

---

# アルカイクスマイル

カトウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルカイックスマイル

### 【Nコード】

N4070D

### 【作者名】

カトウ

### 【あらすじ】

現実のしがらみも、性別も越え、バーチャルセックスネットで『少女』との恋愛に溺れるキアラ。  
下らないスキャンダルの後始末は、妙な事件へと発展していく。  
埋めようのないコンプレックスとエゴイステイックな恋の末路。

《メルジーネの羊水》サイドストーリー

## （前書き）

登場人物・組織・用語

### 【ガザ】

主人公。元兵士。

### 【リリウム】

元軍人で、ガザの同僚。

### 【ファイア】

クガの恋人。嘘つき。

一度ハマったら抜け出せない。他人まで不幸にする泥沼のような女。

### 【クガ】

ガザの友人で、元兵士。

クーガ（ピューマ）をもじって。

### 【セアト】

ファイアの異父兄。

【ファナ】

セアトとフィアの妹。

【キアラ】

サイドストーリー《アルカイックスマイル》の軸になる人物。姓はシーブリング。父親が民主党の上院議員。オシリス社の現会長は父の従兄弟である。

【グレイン】

ガザ達の上官。

【キース】

フィアの父親。脳医学博士。

【トレバー】

電警幹部。

【dog】

連邦政府にとって邪魔な存在や情報の消去を担う組織。表だって公表されていないせいなのか、正式名称はない。軍や連警にも属さず、独立した組織となっている。幹部はともかく、手足となる末端構成員は、社会から外れたもののリサイクルで、人権も剥奪されている。

つまり、彼らは、都合のよい捨て駒である。

そんな、この組織を皮肉る形でdogと呼ぶのだろうが、最近は大抵のことが大事にされているに違いない。少数先鋭。

### 【アイシス】

連邦のセキュリティを担う、システムの名称。連邦政府の安全を監視する。

古代エジプト、最高位の女神から名前を取った。豊穡の女神。

### 【オシリス社】

娯楽から兵器までと、幅広い分野に手を出す、連邦一の巨大な企業。古代エジプトの神から名前を取った。死と復活を司る。

### 【連警】

連邦警察の略。

### 【電警】

電子警察の略。

元はネット犯罪を取締まる連警の一部門にすぎなかったが、5年前のアイシスの導入に伴い独立。アイシスの情報管理が、主な役目。殆どの捜査、犯人の逮捕等は連警が行なうが、連邦の警備システムはアイシスが司っている為、連警よりも発言力が強い場合も。

### 【キセニア戦争】

三十年以上前に勃発した、連邦と東方のキセニア、クルスカ、カス

ティユの三国との戦争。

開始から一年で、連邦政府は勝利を公式に宣言したが、テロやゲリラにと混戦が続いた。今だに終わっていないとゆう声もある。

（ アルカイツクスマイルは「メルジーネの羊水」のサイドストーリーです。

私が管理している、サイトの一つで、2004年11月13日〜2005年2月20日、不定期更新で、ダラダラと掲載したもので、それを加筆、修正しながら連載していく予定です。本編から二年前の話となっています。）

これは偽りの無い世界。

『彼』の頭の中で作られる現実の世界。

事実は、滑稽な悲劇であり、ブラックな喜劇でもある。

しかし、間違えてはいけない。

事実が真実とは限らないのだから。

## 第一章1 キアラ

『彼』が『少女』の首筋に唇を這わせると、彼女は息を漏らすようにうめき、『彼』のシャツのボタンをはずそうと指をかけた。

『彼』は『少女』の肩に手を移動させ、後ろのベッドに押し倒すと、安っぽいスプリングが軋んだ。  
お互いに軽く笑いあいながらじゃれあう。

彼女は自分の動きを止められたことが気に食わなかったらしいが、『彼』は気にせずに、彼女の服のボタンをはずしにかかった。

『彼』の耳元で『少女』が息を吹きかけるように囁く。

「何を急ぐの？時間はたっぷりあるでしょう」

「何も急いでないよ」

『少女』の、黒髪に縁取られた、人形ように美しく端正な顔。その桜色の唇がほころんだ。曖昧で、優しく、不思議な笑顔だった。清らかにも見えたし、場合によっては、淫蕩なものにも見える。全ての概念に通じるように曖昧な微笑みだった。

幼い容姿に不似合いな微笑を見るたびに、『彼』は切羽詰まったような気分になる。彼女を抱きたいのか、壊したいのか分からなくなった。男はそういう欲望を常に押さえている生き物なのだろうか  
と『彼』は考えた。

ボタンを全て外すと、白く未発達な乳房が現れ、『彼』が色づい



た先端を強く吸う。『少女』は小さな悲鳴を上げた。

お互いの体温が上昇してくるのがわかる。よくできた世界で、よくできた感触だった。

『彼』は少女でなければ欲情しないわけではない。少女に出会うまで、『ここ』では考えられることは何でもしていたのだ。

しかし、男に組みしかれるのは、ちっとも楽しくなかったし、アレは痛かった。『あちら側』での経験がないからだろう。暫くやる気はおきそうにもない。

『少女』に出会う以前に、関係をもった『女』が『彼』にこう言った事があった。

「相手を替え続けるのは分かるけど、あなたの好みはよく分からない。普通なら分かるのよ。好みとか性癖とか色々、なんとなくだけどね。

でも、あなたがやることや選ぶ相手って、みんな共通点がない」

『彼女』は『彼』の一貫性の無い行動と嗜好が理解できなかったのだ。

『此处』では、誰もが、情交の相手を頻繁に変える事が普通だったし、決まった相手とだけ関係を結ぶ事のほうが珍しい。あちら側はともかく、『この世界』で恋愛をするかのように関係を結ぶのは、愛情に飢えているのかと馬鹿にされた。何故なら、『この世界』を支配するのは、奔放な快樂だから。ここで優先すべきことは、貞操、そして愛情ではない。ルールを忘れて楽しく遊ぶことだった。

それでも、以前の『彼』ほど、無節操で、無茶苦茶な事を試す人間はあまりいない。

以前の『彼』は試せることは何でも試したし、一度関係を結んだ相手を抱きたいと思うことは無かった。

しかし、この『少女』と4カ月前に出会ってから、彼女以外の人間に興味がわく事がなくなった。

『彼』を知っている《常連客》は、『彼』の変化に、好奇と侮蔑の目を向けた。

『この世界』でも、あちら側でも、『彼』の心にあるのは無関心という、全てを拒絶する壁で、恥も何も『ここ』は恥を曝け出す場所であるし、何も恥ずかしがる必要は無いと『彼』は思い込んでいるから、何を言われても、たとえ罵られたとしても、気にはしなかった。

他の《常連客》が噂するように、愛情乞食になってしまったのかと思うと、少しだけ情けなくなる事もあるが、『少女』に会うと、そんな思いはすぐに吹き飛んでしまう。

『彼』は、自分の変化について深く考えた事はなかったし、そんな余裕もなかった。『少女』と会えば嬉しいし、そうでなければ嬉しくないだけだ。

しかし、今日の『彼』は月日が過ぎて余裕が生まれたのか、いつもは考えもしなかった疑問が浮かびあがり、『少女』の肌をなぞっていた唇をはがして、動きを止めた。

「どうしたの。急に止まっちゃって。何か考えてるの？」

「大した事じゃないよ。ただ、どうして君とばかり、こういう事を繰り返すようになってしまったのか、すごく疑問なんだ」

『彼』が『少女』の青みがかった灰色の瞳を覗き込むと、『少女』は軽く笑い声を上げた。

「答えは簡単だわ。私もあなたも退屈で、そして淋しいのよ」

退屈という言葉には、何も反応はしなかったが、淋しいという言葉は、僅かだが『彼』を動揺させた。そんな言葉は口にしてはならない。

口にしてしまったら、何かに負けてしまうような気がしたのだ。その何かが何なのか、『彼』には分からなかったが。

一瞬、固まった『彼』を『少女』は、あの微笑みを浮かべたまま見つめる。

『彼』は、その曖昧な表情が、何故だか、全てを許し、包んでくれるような気がして安心した。

「退屈が怖いと言ったのは誰だったかしら……」

『彼』は『少女』の質問には答えず。唇をふさいだ。自分だって退屈が怖い。

だが、何故、怖いと感じるのか、その続きは考えなかった。

優しげな笑みを浮かべながら、『少女』の口にする言葉は『彼の言動を支配し、確実に追い詰める。』

曖昧な笑みは、彼女の本心を包みかくすようで、実際に、彼女が何を考えているのか、『彼』には分からない。

そんな『少女』の手のなかで踊らされ、彼女に溺れるのは、腹立たしくもあり、同時に切なかった。

『彼』が、心から彼女の本心を知りたいと言えば嘘になる。分からないから、『彼』は彼女に溺れるのかもしれない。

しかし、今の『彼』にできるのは、彼女の体を組み敷く事ぐらいしか反撃はできなかった。

今は少しでも男の気分浸っていたかった。

一通りのことが終わり、二人は体を絡ませたまま、ベッドの上にいた。

『青年』と、初潮すらきているかどうか分からない『少女』のセックスはあちらの世界では犯罪になりかねない行為だった。

しかし、『此処』では何をしても、相手の了承が得られれば、大概は許された。

「次はいつ会える？」

『彼』は『少女』に尋ねた。

彼女は頬を赤らめたままで、息も荒かった。『彼』は『少女』と同じように、体温は上がっていたが、彼女のように息は上がっていない。

「明日の夕方、そうね、五時ごろはどうかしら？でも、このベッドにはもう飽きたわ」

『彼』は辺りを見回した。

低い天井。薄い壁を覆う、毒々しい花柄模様の壁紙はタバコのヤニの黄ばみで汚れ、合成香料の安っぽい匂いが充満している。ベッドの使い心地も悪い。

『此処』は、まだ地球に人類が住んでいた頃の、場末のモーターを再現した場所だった。

モーターの外にバーが一軒存在する。皆、そこで相手を物色するのだ。

「場所はどこでもいい。君に任せるよ」

「じゃあ、ステージ07で。あそこの内装はなかなかのものよ。ド

ナテツロのダビデ像があるの」

「ドナテツロのダビデか、いいね。ユディトとホロフェルネスはなの？」

少女は顔をしかめた。

「それは無いわ。敵の寝首を切る寡婦なんて、ここには似合わないでしょう。ユディトなら、クリムトのはあつたはずよ。絵画だけど」

「そこでいいよ。楽しそう」

彼女は『彼』に覆いかぶさると軽くキスをして、あの曖昧な微笑を浮かべた。

「じゃあ、また今度ね」

彼女が瞼を閉じると、次第に彼女の体が景色に溶け込むように消えていく。

『彼』は彼女が消えた事を確認すると、瞳を閉じた。

## 第一章2 キアラ

キアラはゆっくりと目を開け、満ち足りた表情を浮かべた。

椅子にうずもれるように座ったまま、視線だけ動かし、部屋の鍵を確認する。誰も入ってきた痕跡は無いようだ。

安堵のため息を吐き、顔を覆うヘッドギアを取ると、頭に鋭い痛みが走った。【このネット】に接続したときに生じる副作用だ。

こめかみと手首の脈の位置、耳の裏、それぞれ左右に貼った回線をゆっくりと外しながら、痛みが治まるのを待つ。

しかし、彼女は自分の体に、頭痛よりも不快な現象が起こっている事に気づき、舌打ちした。頭痛に耐えながら、スカートの中に手を突っ込み、下着を床に脱ぎ捨てる。

下着の内側は、ナメクジが這ったような染みが付き、濡れていた。

せっかく、『男』として、あの『少女』との逢瀬を楽しんだのに、興醒めする。

キアラは頭痛が軽くなると立ち上がり、脱ぎ捨てた下着を拾い上げると、バスルームに足を向けた。

薬に頼れば、頭痛はすぐに治まるが、父親が薬物アレルギーを持っている事を考えると、乱用は避けた方がいい。体を温めれば、時間にかかるが、頭痛は治まる。

脱衣籠に下着を放り込み、自分の衣服を乱暴に脱ぎ捨てた。

脱衣所にある、豪奢な大理石の洗面台には、真鍮で装飾をほどこした楕円形の大きな鏡が飾られている。

薄く化粧をした顔に、丁寧にクレンジングクリームをのばして化粧を落とし、それを、お湯で洗い流すと、鏡に映った素のままの自分の姿を確認した。

別に醜い訳ではない。母親に似た彼女の容姿を父親はいつも褒める。

しかし、それは身贋画というもので、実際は目を奪われるほど美しい場所はないが、目を背けなくなる程の場所も無いのだろう。

目鼻立ちのバランスは良いから、多少の金をかけて磨けば、女の顔とゆうのは変わるものだ。そういうメッキに男は騙されるのだとキアラは思いこんでいた。

彼女は自分の顔、体つきが嫌いだった。なので、父親や、婚約者が誉めるのが分からない。

自分の容姿を　父親以外で誉める男は、キアラの立場、正確には彼女の父親の権威にへつらい、ゴマをすっているだけだと思っていた。

そんな、彼女にとって、本来の自分を忘れる事ができる【あのネット】は、最高の娯楽だ。

【あのネット】とは、つまり、キアラが先程まで、接続していたバーチャルネットで、バーチャルセックスを楽しむためのネットだ



った。

バーチャルセックスのネットはいくつかあったが、彼女が利用するネット「ニルヴァーナ」は、特に素晴らしい。

その分、アクセス料金は他のネットに比べて、約三倍と割高で、専用のヘッドギアと端末も購入しなくてはならない。

だが、その料金の違いの分、感覚も嗅覚さえも見事に表現していた。

現実の姿のまま、アクセスすることもできたが、自分好みに容姿を変えることも可能である。なので、性別を変えることも可能であった。

キアラは最初、女のまま容姿を変えるだけでアクセスしていたが、ほんの気まぐれで、『男』としてアクセスするようになってからは、ずっとそのままだ。

しかし、性別を変えてアクセスすることを、『ニルヴァーナ』は、あまり勧めてはいない。

いくら、リアルに世界を表現することもできて、現実には無い器官の感覚を表現することは不可能だったからだ。

つまり、正常に性行為をする場合。男が『女』としてアクセスしても、バーチャルの世界では、その器官は『できる』ように反応してくれるが、肝心の快楽は何も感じない。反対の場合でもそれは同じだ。その為、性別を変えてアクセスする利用者はあまりいない。

しかし、彼女は『男』としてニルヴァーナにアクセスし続けた。

髪を短くし、身長を15cm程高くし、大きな目を少し細く、そのぶん鼻と口を大きくする。

顔の骨格を少し荒削りにし、体に脂肪ではなく、程好い筋肉を付ける。

そして、『不必要』な器官を削除し、『必要』な器官を付け足した。

『あちらの世界』では、どこから見ても彼女は『男』だった。

容姿や性別の変更は、オプション料金となり、一回の変更ごとに、かなり割高な料金を請求されたが、キアラにとって、それはたいした額ではなかった。

彼女が、容姿、つまり性別を変更登録した際、オペレーターは、現実には無い器官の感覚が得られない事の他に、表情に気をつけるようにと助言をしてきた。

表情は現実のままの筋肉の動きを、そのまま表現するように作られている。

いくら性別を変えても、ふとした瞬間に女々しくなる場合もあるから、気をつけるようにと。

アクセスするようになって1年以上が過ぎていたが、彼女は飽きることがなかった。

しかし、現実での彼女は、自分の性を否定する程、絶望しているわけでないし、同性愛者でもない。

処女ではないし、男とまともに恋愛したこともある。

それでも、彼女は『彼』となり、そこで、奔放に楽しんだ。

そして、あの不思議な微笑をする『少女』と出会ったのだ。

彼女を溺れさせているのは、あの少女の未発達な体ではない。  
あの曖昧な微笑、それだった。あの表情が彼女を突き動かす。

あのネットのアクセス料は決して安くはないし、それ用の端末や、  
ヘッドギアの存在を家族が知らないはずはないだろう。

しかし、家族は何も言わない。見て見ないフリをしているのだろうか。

どうせ、一年後には父親が決めた毛並みの良い婚約者との結婚が  
決まっている。彼女はそれに従うつもりだった。

父親も実害の無い、多少のお遊びには、目をつぶっているのかも  
しない。

明日の少女との逢瀬を楽しみにしながら、バスルームに入った時、  
現実の予定を思い出す。確か、婚約者との約束があった。

あの無害そうな青年は、少女のように自分を突き動かすような衝  
動を感じさせてくれるのだろうか？

そう思ったとき、キアラの体は冷えた。

自分の現実がどれだけ空っぽで満たされないものなのかという事  
実を、彼女はようやく知ったのだった。

### 第一章3 トレバー

トレバーは、今日の朝から気分が悪かった。

オシリスの一族と会うのは、仕事と言えどできれば避けたい事の一つだ。

しかし、先方が面会を要求してきた場合、断る事はできない。

オシリスとアイシス。この二つの言葉を口にする度、グレインは背中に鉛を背負っているような気分になる。

オシリスはベビー用品からミサイルまで幅広く手を広げる巨大企業で、アイシスは3年前に連邦に導入されたセキュリティシステム、コンピューター・ネットワークの総称だった。

長い間、連邦を悩ませていた、キセニア戦争から続くテロは、このアイシスのお陰で激減し、正確にはゼロとなった。

アイシスは電警が管理しているものと、一般では思われているが、人の目を掠めるように、開発したオシリスがかなりの権限を握っているのが現状である。

今から会う青年は、オシリス前会長の孫の一人で、その母親とトレバーは昔からの知り合いだった。トレバーの電警での肩書きは、この青年の前では何の役にも立たない。

部下を二人従え、ホテルの門をくぐると、愛想良く微笑んだドアマンが扉を開けた。

彼が面会する青年が指定したのは、このホテルのスイートルームだった。青年が連邦政府の首都を訪れる際の常宿で、オシリスが経営するホテルの一つでもある。

トレバーは重たい気持ちで、受け付けに足を向けた。ロビーとつながったサンルームは、テイルルームとして利用されており、様々な花や観葉植物が飾られている。そんな美しい内装も彼の慰みにはならない。

懷に手を入れ、自分のIDカードをカウンターに差し出した。

「電警のトレバーだ。  
セアト氏にお会いしたい」

受け付けの男はIDカードを確認し、磁気コードをスキャナーに通した。決して愛想が悪い訳ではないが、いささか緊張した面持ちで口を開く。

「確認できました。  
あと、銃器の類はこちらでお預かりいたします」

トレバーはおとなしく拳銃を出し、続いて、二人もいささか不服そうにそれになった。

トレバー達は、警備員達の刺すような視線を浴びながら、エレベーターに乗り込んだ。

「急な訪問ですね」

「また、女神の気紛れだろう」

トレバーは苦々しげに呟いた。エレベーターが最上階で止まると、彼はため息をついて、ネクタイを締め直し、姿勢を正した。

## 第一章4 トレバー

トレバーがドアをノックすると、ドアが開き、繊細な顔立ちの青年が顔を見せた。

「お久しぶりです」

トレバーが面会を申し込んだ青年、セアトに会うのは、久しぶりのことだった。母親よりも、彼の父親に似ている。

「急に呼び出して、申し訳ないです。」

…部下の方は席を外していただけますか？」

挨拶もそこそこに、人払いをする、セアトの行動に、トレバーは嫌な予感がした。

しかし、逆らう事はできない。

部下の男、二人を一瞥すると、彼らは黙って部屋を出て行った。

「お母様はお元気ですか？」

青年は愛想良く微笑み、トレバーに椅子を勧めた。

「相変わらずですよ。メンテナンスも順調です。電警の方、特にトレバー参事官には、随分、お世話になったので、お礼を伝えて欲しいと頼まれました」

「一番下の妹さんは？」

「ファナの事ですか？母と同じで、相変わらず、元気です」

トレバーは青年の長い睫毛を眺めた。均整の取れた長身だが、顔立ちは中性的で優しいだった。女に夢を見させるような、甘い容貌。群青の海を思わせる瞳は、トレバーに彼の父親を思い出させた。

あの女の若い頃は、意外に少女らしい趣味の持ち主だったのかも  
しれない。

しかし、容姿よりも何よりも、自分に見向きもしなかった男だからこそ、あの女はセアトの父親を選んだのだろう。

まだ、トレバーが若かった頃、自分とその周りは、皆、あの女にのぼせあがっていた。なびかなかったのはセアトの父親だけだった。

あれはそうゆう女だ。昔からそうゆう女だったのだ。

欲しいものは手に入れなければ気が済まない。

だが、それが手に入れば、壊れた玩具のように扱い、ゴミのように捨てる。

我儘で飽き性で、そして恐ろしい女だったのだ。

セアトの父親が、一度でも、あの女に心を寄せる事があったなら、彼女はそこまで彼に執着しなかっただろうし、セアトも生まれなかったに違いないのだ。



彼は、あの女を袖にしたばかりに、つきまとわれ、人生を狂わされた。

今はセアトとあの女の事を忘れたかのように、家庭を築き、法務省に勤めているらしい。

できるなら、消してしまいたい記憶なのかもしれない。

学生だった頃のトレバーは、セアトの母親を、恐ろしい女だとは思ってはいなかった。むしろ、彼女に熱を上げていた人間の一人だった。

彼女の意志の強い眼差しが好きだった。

彼女に執着される、セアトの父親に嫉妬すらした。

しかし、いつからだろう。あの女を、恐ろしい人間だと気付いたのは。

きつとそれは、3年前の事件ではない。もっと前だ。

日に日に大きくなっていく腹を抱えて、満足そうに微笑む、あの女を見てからだ。

その胎の中には、今、トレバーの目の前にいる青年がいたのだが、母親の腹の外から、トレバーがセアトを複雑な気持ちで眺めていたことを、彼が知るはずはなかった。

「こちらの妹さんとは、もうお会いになりましたか？」

「明日、会う予定です。」

しかし、義父はガードが固い。

面会を申し込むのにも面倒な手続きを何回もやらされましたよ。一時でも、家族であった事には変わりが無いのに」

「キース博士は、娘さんを取られるのではないかと、心配しているようですな」

セアトはトレバーの頬に新しい皺が刻まれていることに気付き、この男が三年の間にだいぶ老けた事を知った。

あの、激変の中、母と電警の橋渡しをしてきたのだ、無理もない。

「本題に入りましょうか」

セアトの言葉に、感傷に浸っていたトレバーは現実引き戻され、思わず唾を飲み込んだ。今回は何を言いつけられるのか、そう考えただけで、気が気でなくなりそうだった。

そんなトレバーの気持ちを察しようともせず、セアトは話を進めた。

「バーチャルセックスのネットがこの所、急増化しているのはご存知ですよね？」

「はい。なかなか問題の多い分野です。しかし、近いうちに規制法案が議会に提出されると聞きました。」

まあ、私の耳に入ってくるのは、噂程度の情報ですが……」

「バーチャルネット規制法案は、来週、民主党のシーブリング上院

議員の派閥から議会に提出される予定です。

問題は、共和党に、大手インターネット会社と関係の深い議員が何人かいる事です。彼らは間違いなく反対するでしょうね。

バーチャルセックスネットは、今や貴重な収入源の一つですから。もちろん、オシリスは、母の意向でその手のいかがわしいネットへの参入はしていません。

実は、今日お願いしたいことは、大変お恥ずかしい話ですが、身内にスキャンダルを抱え込んでいる人間がいますね」

「スキャンダル？」

「起こした本人も意識はしていないでしょう。バーチャルネットでの行動です」

「さして、大した事には聞こえませんが…」

「回りくどい言い方でした。

ゴシップ記事のように言えばこうです。

『バーチャルネットを取り締まる規制法案の発案者シープリング上院議員の娘が、バーチャルセックスネットの常連客だった。しかも、理解しがたい趣味を曝して』

…ご存じの通り、シープリング上院議員と母は従兄で、オシリスとの関係も深い。その娘のスキャンダルです」

「確かに、彼がスキャンダルで騒がれるのは、血縁関係のある、お母様やあなた、それにオシリスにとって、好ましい展開ではない。

…しかし、理解しがたい趣味と言うのは？」

トレバーの質問に、セアトは苦笑した。

「僕の口からは、言い辛いですね。

三流の雑誌を賑わすにはもってこいのネタだとゆう事は確かです。

それに、僕自身、彼女には幸せになつて欲しい。

こんな下らないスキャンダルで、人生を棒に振つて欲しくはない」

「そんな事で、このお嬢さんの人生を破滅させるとは思えません  
…」

「あなたには分からないかもしれませんが、彼女の住む世界はそういうスキャンダルで一生を台無しにするところです。

シーブリング上院議員も、娘をゴシップの餌食にされ、日陰に隠すのは耐えられない事なのでしょう。それに…」

「それに？」

「問題が二つあります。一つは彼女が愛用しているネットが、ウェンウー社のものだという事」

トレバーはため息をついた。

ウェンウー社は外資系の大手インターネット会社で、バーチャルネットで会社を大きくした。

現在、オシリスのインターネット部門は、ウェンウー社のシェア

に負けているし、共和党には、ウェンソー社と繋がり深い人物が何人かいた。

シープリング上院議員はオシリス現会長の従兄であり、オシリスと関係の深い議員だと言う事は周知の事実である。

民主党の重鎮である、シープリング上院議員とオシリスを陥れる、絶好のチャンスで、共和党とウェンソー社が見逃すはずはないだろう。

法案の否決よりも、何よりも、オシリスと政府とのパイプ役を失ったり、彼の権威に傷がつくことは、オシリスにも、セアトや彼の母親にとっても、多大な損害を与える事になる。

あの一族にとって、なんとしてでも避けたい事なのだ。

「彼らはその情報をきっかけに、シープリング上院議員を窮地に追いやる事だってできるでしょう。」

たとえ本人でなくても、身内のスキャンダルは、政治家のイメージを悪くします。

もう一つの問題は、シープリング上院議員の娘が、ここ最近、熱を上げている相手です。  
これが、非常に危険だ」

「まさか、ウェンソー社と繋がり深い人物ですか？」

「その通りです。」

憶測ですが、彼女が熱を上げている相手は、ウェンソー社が近付けさせたのでしょうかと思えません。

おそらく、ウェンウー社は法案が提出されたら、彼女との事を証言させるでしょうね。

シープリング上院議員の娘が、愛用しているのは、ウェンウー社のネットなのでから、物的証拠もそろっている。

外部記憶装置を記録を消す事は不可能ではありませんが、生身の人間の記憶を消すのは、容易な作業ではありません。

このスキャンダルのもみ消しと後片付けを貴方に依頼したいのです。これが、母の依頼です」

「その相手を殺せと？」

「方法は貴方にお任せします。何も、殺さなくても方法はいくらでもあるでしょう」

セアトは重みのない口調で、そう言い放ったが、そう簡単に片付ける事などできるはずがない。

一番、ローコストな方法は、証言をする可能性のある人間を消してしまう事である。

「これは、身内の尻拭いを電警に頼むことになりますが、強いて言えば、ネット社会の今後の為でもあるのです。

スキャンダルを踏み潰すことができれば、法案を否決される不安要素が一つ減ります。

この話は、電警にとっても悪い話ではないと思いますが…」

トレバーは、一人の人間を抹消してしまう事に良心の呵責を覚え  
たが、それ程、面倒な命令でないことに、胸をなでおろした。  
スキャンダルの後始末なら、まだ楽な仕事だ。

バーチャルセックスネットは、電警が取り締まっている。痴情の  
もつれから、法外な請求と、トラブルはあとをたたず、電警はその  
始末に手が回らない状況が続いていた。法案の可決は、確かに電警  
にとっても、メリットがある。

それに、彼が直接、手を汚さなくても、仕事を押しつける方法が  
一つあった。

「了解しました。電警としても、法案の可決は是非とも叶えたい事  
です。最善を尽くしましょう。」

… 場合によっては、犬をけしかけますが、よろしいですね」

場合によらなくても、トレバーはdogを使うつもりなのだろう  
と、セアトは思っていた。内心、嘲笑いながら、できるだけ愛想の  
いい表情を浮かべた。

「方法はそちらに任せます。」

詳しいデータは後ほど、あなたのディスクに転送しますので」

セアトにとって、スキャンダルを握り潰す方法は、なんでも良か  
った。

契約を結び、彼らが無事、任務を遂行してくれさえすればいいのだ。  
微笑むとトレバーに手を差し伸べた。

## 第一章5 セアト

セアトは契約が交わされた意味での握手を済ませ、部屋を出ていく、トレバーの背中を眺めながら、自分が用件を言う前の彼の怯えたような表情を思い出した。

母は無理な注文を言いつけすぎる。

今までに比べ、今回の命令は簡単な方だし、電警にとっても有益な取引だった。彼が胸をなで下ろしたのがよく分かった。

明日にでも、用件を彼のディスクに送ればいい。

今は久しぶりに味わう、外の世界を楽しみたかった。

窓から景色を眺めるのも飽きたし、そろそろ街に出たくなった。ホテルの近くにある公園は大きく立派な作りだったが、まだ足を踏み入れたことはない。

今日は陽気も良く、そこで目的もなく歩くのも悪くないように思えた。

予定が決まると、鏡で自分の姿を確認し、部屋の外へと出ようとドアノブに手をかけたとき、部屋の電話が鳴った。

今日の面会はもう無かったはずである。

不審に思いながら、電話を取ると、コンシェルジュの声ではなく、懐かしい声が耳に届いた。



「兄さん？」

セアトは溜め息をついた。

「フィア、面会は明日だったろう？」

「お久しぶり。」

今、ホテルのロビーにいるの。

別に今日会っても構わないでしょう？」

おくゆかしげな雰囲気にくせに、フィアの強引なところは母に似ている。

セアトが連邦に訪れた目的はフィアに会い、母の意向を伝えることだった。

あの程度の【命令】は自宅から、電警に依頼すれば良かったのである。

フィアに面会の日時を勝手に変更されても、断る理由が無く、セアトは、渋々ロビーに降りた。

フィアは物憂げに足を組み、ロビーの隅にある、ソファアーに座っていた。

相変わらず、日陰みたいな女だなど、セアトは思った。

幼いながらも、ファナの方は貪欲なほどの生命力を感じさせるくらい存在感がある。

そして、母と同じように強引で我儘だ。

そのぎらつくぐらいの存在感を思うとファナの方が母に似ている。ファナの出生の理由を知る彼は、複雑な心境になった。

フィアはセアトと目が合うと、ゆっくりと立ち上がった。

「久しぶり」

セアトはほえんだが、フィアは表情を硬くしたまま口を開いた。

「兄さんも、お変わりないようね」

久しぶりに会う兄妹の雰囲気にしては、いささか冷ややかすぎるものだった。

居心地は悪かったが、久しぶりに会った妹との用事を立ち話です  
ます訳にはいかず、セアトはホテル内のレストランでの昼食に、フ  
ィアを誘った。

「さつき、親戚の一人を見たわ。

男の人と一緒に、あのレストランに入ってくのが見えた。

向こうは気付いてなかった。もしかしたら私たちの事なんて覚えて  
いないかもしれないけど、一緒だったら気不味いでしょう？」

セアトは思わず尋ねた。

「もしかして、それキアラじゃないか？」

「……そうよ。小さい時に何度か会ったきりだけど、印象が悪かつ  
たから良く憶えてる。あれはキアラだった。でも何故？」

セアトはフィアの質問には答えず、皮肉な偶然に苦笑した。  
電警に依頼した、スキャンダル。それはキアラが起こしたものだっ  
たからだ。

ホテルのメインダイニングのレストランは先客がいたため、セアト達は一階のティールームへ入った。

キアラと一緒にいたの男は、おそらく婚約者だろう。  
来年、結婚すると聞いている。

メインダイニングでの昼食は名残惜しかったが、彼女と顔を合わすのは気まずい。

たとえキアラが、セアトを憶えていないとしても、彼女のスキヤンダルを知る彼は、どんな目で彼女を見ればいいのか分からなかった。

それに、フィアは長い時間セアトと過ごしたくはないようだった。

奥の席をウェイターに案内させ、席に付くと、フィアはメニューも見ずに、紅茶を頼んだ。

よほど長居したくないらしい。

嫌われたものと内心苦笑しながら、セアトは開きかけたメニューを閉じて、コーヒーを頼んだ。

「用件は？」

「性急だな。お前に伝えることがあったから、わざわざここまで来たんだ。電警への用件はついでだ」

セアトはタンブラーの水を飲んで口を湿した。

「電警？また、お母さんの気紛れかしら。トレバーも災難ね」

「今回は簡単だよ。」

電警にとって利益になる依頼だし。

それに、トレバーは間違いなく他人に仕事を押しつける」

ウェイターが紅茶とコーヒーを席に運んできたので、彼は一旦、言葉を止めた。

「恋人が出来たんだって？」

フィアはため息をつきながら、紅茶をカップに注いだ。

「とても優しい人よ」

「母さんはまだ早いんじゃないかって」

フィアは鼻で笑い、砂糖を紅茶に入れ、荒々しい仕草で掻き混ぜた。

高価な食器が乱暴な動作のせいで下品な音を鳴らす。

「よく言うわ。私、もう20よ。その年にシングルで兄さんを産んだ人が言える台詞じゃないわ」

「確かに。」

どんな男なんだ。それぐらいは聞いていいだろう？」

フィアは紅茶を一口飲むと、不安げな視線をセアトに向けた。

「彼に何かするの？」

「そんなことはしない。」

父親が違っても、妹である事に変わりはないんだ。  
心配するのは当たり前だろう。母さんもそれは同じだ」

「…違うわ。お母さんが大切なのは、兄さんだけよ」

「そんな事ないよ」

「いいえ、そうだわ。」

ファナがいるから、私はいらないし、ファナだってどこまで必要と  
しているか分からない。そういう人よ」

「母さんが聞いたら悲しむよ。」

それに、俺だって、代わりなんていくらでも作れるんだから」

「違うわ。兄さんは私たちとは違う。特別なもの」

フィアは断言するように言い切った。

「お前達の方が特別じゃないか」

「お母さんにとって、兄さんが特別だって事よ」

フィアは冷たい表情でセアトを見つめた。その根底にあるものが、  
嫉妬なのか、憎悪なのか、セアトには読み取れない。

セアトはまるで人形に見つめられているような気分がした。

フィアは言葉を詰まらせたセアトにため息をついた。

兄も母の偏愛に気付いている。だから、言葉に詰まるのだらうと

フィアは思った。

しかし、今、ここにいる二人が悪いわけではないのだ。  
母が悪いと言いきってしまうのは簡単だが、本当にそれだけなのだろうか。

そういう事を考える度にフィアは思う。

いったい何がいけなかったんだろう、何を間違えてしまったんだろうと。

いくら考えても、答えが浮かび上がる事はない。  
フィアの頭の中で、彼女を責めるように、疑問がまわり続けるだけだった。

その疑問が、いつものようにまわり始めた時、フィアは《妹》の事を思い出した。

そういえば、今日は《あの子》を見ていない。

いつも、セアトの影に隠れて、自分を睨むように見上げてくる、あの子を。

フィアはティーカップをソーサーに置くと、辺りを見回した。

「あの子は？」

「ファナの事か？」

今日はあいつは来てない。元気だよ。それにお前よりも優秀だ」

フィアは顔を引きつらせ、呟くように言った。

「それが、ファナの幸せに繋がるとは限らないわ」

「ファナを嫌ってるんじゃないのか？」

「それは、関係ないわ」

「何にせよ、母さんは喜んでいるよ。」

……この話は、やめよう。限りが無い。

俺が聞きたいのはお前の恋人が、どうゆう男かだ」

いつのまにか、セアトの口調は高圧的に変わり、フィアは語るしかなかった。

怒らせたくない相手だったのだ。

「優しい人よ。」

それに強いわ。退役したけど、キセニアの前線にいた」

「そんな男はいくらでもいるじゃないか。」

お前に何の利益があるんだ？」

フィアは表情を曇らせた。

この話をセアトは信じるだろうか？

父親のように、真面目に聞いてくれないのではないかと、心配になった。

何故なら、彼女は不完全だったからだ。

「好きになったから。彼はとても、優しいわ。それに、守ってくれるわ。私を守ってくれる」



「男として、当たり前的事じゃないか」

セアトは笑ったが、フィアは顔を両手で覆いかぶりを振った。手を動かしたときに、ティーカップが倒れ紅茶がソーサーにこぼれた。

「分かるの。漠然だけど間違いない。

きつと、いつか近いうちに私は殺される。

なら、守ってくれる人が必要でしょう？強い人なら、私を守ってくれるでしょう？」

その声は、あまりにも必死で、悲痛な響きをもって、セアトの耳に届いた。

## 第一章 6 キアラ

キアラは虚ろだった。

何を食べても、何を飲んでも味がしない。

婚約者との約束の為。いつも通りに支度をして、予定通りの時間にレストランの席に着いた。

体は普段と同じように動くのが不思議だった。  
何かしていなければ、落ち着かないのだろうか。

なんで、私はこんな事をしてるんだろう？  
こんな所で、この男と食事なんかするより、早くあの『少女』に会いたい。

しかし、今は溜め息はつかない方がいい。

この男が一緒だからだ。

キアラは、自分にはため息すら、自由につけないと思うと、情けなくなってきた。

だが、あの『少女』に会って何をするのだろうか？

それは決まっている。

いつもの通りの事をすればいい。

だが、そんな気分でもない。

私はあの『少女』と何がしたいんだろう。  
彼女をどうしたいんだろう。

「キアラ」

名前を呼ばれて、彼女は我に返った。

婚約者は心配そうな顔をして、彼女を見つめていた。

「気分でも悪い？」

つくづく人の好い男だと思う。

親が決めた相手とはいえ、婚約者が傍ににいるのに、うわの空で食事を続ける女に腹を立てた様子もなく、逆に心配している。

彼は父のような政治家になれるだろうか？

おそらく無理だ。

父はもしかしたら、自分の言う通りに動く男を探して、キアラにあてがったのかもしれない。

キアラは一人娘で、結婚すれば彼が養子婿になる。  
つまり、彼が父の跡を継ぐのだ。

「大丈夫よ、ごめんなさい。何の話だった？」

「やっと、お義父さんが僕を使ってくれるって話」

彼は屈託なく笑った。

キアラとの結婚を期に上院議員の出馬が決定したのだ。

もちろん、議席は民主党である。

今は父の秘書をやっていた。

国立の大学をスキップで卒業した秀才で、仕事は忠実にこなすが、彼には毒が無い。

政治家には向いていないような気がする。

父はキアラには優しくかったが、娘である彼女にも計り知れない部分がいくつかあった。

それに比べ、この男はお人好しだし、何より疑う事を知らない。純粹培養のお坊っちゃんだった。

「それと、新しい議会法案の話をしようと思ってたんだ」

キアラは、ウェイターがワインを注ごうとするのを断り、料理が半分以上残った皿を下るように頼んだ。

「新しい法案？初耳だわ」

父はキアラに政治の話は一切しなかった。

「バーチャルネットの規制法案だよ。」

僕はそういうのに疎いから知らなかったんだけど、今は色々なネットがあるんだね」

キアラは、背筋が凍った。

彼は、彼女がバーチャルセックスネットの顧客である事を知っているのではないかと思ったのだ。それでも、聞かずにはいられない。

「そうね。でも、どうゆう法案なの？」

キアラの不安げな顔を見て、彼は安心させるように笑った。

「バーチャルネットは、色々、問題が多いみたいだ。副作用の頭痛とか、個人情報の流出。急成長した分野だから、何かと得体の知れない会社の参入も多い。

オシリスはしっかりしてるみたいだから、君の家に規制法は何も害をあたえることはない。心配はないよ」

この男は、キアラがオシリスと関係の深い、自分の家を心配しているのではないかと思いつ込んでいるようだった。

キアラの父親はオシリスの親族の一人だった。前会長の甥に当たる。

現会長はキアラの父親の従兄である。

キアラの父親は一族の意向で会社経営ではなく、政界に足を踏み入れた。

彼が申し上がることができたのは、才覚だけでなく、そのバックボーンと豊かな財力があつてこそだった。  
今では民主党を牛耳るまでになる。

「問題があるのは」

彼は言葉を区切った。

いくら、来年結婚するとはいえ、若い女性に、この話題はどうかと思つたのだ。

しかし、急に話題を変えるのも不自然なことだし、彼女も興味があるようだった。

彼は声をひそめて、続きの言つた。

「バーチャルセックスのネットだ」

突然、シャンパンの栓を抜く小気味よい音が鳴り、隣の中年女の集団が、嬌声を上げた。

キアラも婚約者も、そちらに視線を動かした。

女の一人の顔に、シャンパンの白い泡がかかったのだ。

失敗したウェイターが慌てて、謝り頭を下げている。

身なりの良い婦人達は、怒る様子もなく、笑いを必死に堪えている。

泡をかけられた本人も、顔を赤く染めながら、忍び笑いを洩らしている。

彼女達が、何を連想して笑っているのかは明らかで、若いウェイターは顔を赤らめ、下に俯いた。

キアラはその様子を笑うわけでも、うぶに頬を染めることもなく、婚約者に話しかけた。

「具体的にどんな、規制がかかるの？」

彼はキアラの意外な一面を見た気がした。

彼女の父親の話では、全く政治に興味がないとゆうことだったからだ。

この話も単なる話題作りのためだったのだが、彼女は興味を示した。

そういえば、何度か話の流れで、政治的な話に繋がる場合はあった。彼女は嫌がるわけでもなく、聡明な意見を言った。

政治に全く興味が無いわけではないようだ。

そんな彼女の父親の言動を考えると、わざと娘を政治から遠ざけているようにしか思えなかった。

「まず、バーチャルネットを開設するには、政府の監査が義務付けられる。

バーチャルセックスネットは、特に問題が多いみたいだ。

悪徳な会社は個人情報ばらまき、時にはユーザーを揺すったり、法外なアクセス料金の請求。

そこで出会った相手のストーキングも急増中。

明らかに違法行為だし、このネットについて電警も頭が痛いようだ。法案が可決されれば、バーチャルセックスネットは売春、買春と同じ方法で裁かれる事になる。

つまり、この手のネットの経営とアクセスは違法になるんだ」

キアラは頭が真っ白になった。

法案が可決されれば、あのネットは閉鎖。少女に会えなくなってしまっ。

「ウエンウィ社はどうでるかしら？」

今、あの会社にオシリスのインターネット部門は負けてるわ。

……それに、きちんとしてる」

ウエンウィ社はキアラが顧客となっている、バーチャルセックスネットの親会社だった。

「ウエンウィ社は反対するだろうね。

バーチャルネットのお陰でオシリスのシェアに食い込む事が出来たんだから。

でも、可決になるよ。



ウエンソー社はバーチャルセックスネットにまで手を広げている。

そのせいで、企業イメージはすこぶる悪くなった。

いくら、きちんとしていても、はしたないとは思わないかい？

性的な物を売り物にするなんて」

はしたない？

あんた、結婚したら、毎晩私に、はしたないことするんでしょう？

キアラはそう口走りそうになった。わずかに唇が痙攣したが、平静を取り繕った。

それよりも早く、あの少女に会いたい。

嘘でも、虚像でもいい。

会って確かめたいのだ。

彼女の存在を。

## 第一章 7 セアト

セアトは、フィアを恋人と別れるよう説得しろと、母に命じられて連邦本土まで足を運んだのだ。

今までのフィアは、セアトが高圧的な態度で命令、脅しをかければ、不服ながらもそれに従ったが、今回は呆れるほど頑固だった。それに、声を殺してはいたが、泣き始めたのにも、まいった。

結局、セアトはフィアを説得する事を諦めざるおえなかった。

別に妹の涙にほだされたわけでもなく、あの怯え様はセアトに『危機感』を抱かせたのだ。

それに、母の言い分は過保護すぎるもので、理にかなってるとは言い難い。

フィアを説得するより、母を説得したほうが、まだ良いとセアトは判断した。

母の監視から逃れられるバカンスは名残惜しいが、キアラの件は部屋に帰ってから電警にデータを送り、肝心のフィアの事は、今日中に家に帰って、母を説得することにした。行動は早い方がいい。

フィアが新しい恋人である、クガとゆう男の事を本当に好きなのかどうかは疑問だった。

彼女自身は気付いていないかもしれないが、それは一匹の犬に、愛玩と番犬を同時に求めるようなもので、セアトが思う恋とは、また違う感情のように思えた。

だが、女とゆうのは常に計算高い。

それを意図的にやっているのではなく、本能で自分の利害を計算するのが得意な性だった。

もしかしたら、それが、彼女にとっての自然な恋の形なのかもしれない。

セアトはフィアをホテルの出口まで送っていった。

ロビーを横切ったとき、キアラがレストランから出るのが見えた。

こちらに気付いている様子はない。

フィアは、それに気が付くと自然に顔を背けた。  
気付かれる事に心配しただけではなく、キアラが嫌いなのだろう。  
目も合わせたくないらしい。

セアトの記憶では、子供の頃のキアラは両親の愛情を一身に浴び、

傍系とはいえ、フィアやセアトとは違い社会に認められた存在だ。

素性の知れない、何故だか分からないけど、本家にいるセアトやフィア達を、他の子供たちのように疑う事もせず、笑顔で明るく話しかけ、遊びに誘ってきた。

持てる者の余裕が生む、優しさである。

そのどれもが、フィアが無意識的に欲しているものであり、決して手に入らないものだった。

フィアはキアラに嫉妬していた。

しかし、年月とゆうものは恐ろしい。

あの天真爛漫な少女が、バーチャルセックスネットを愛用し、性別を変えて、幼い『少女』を抱き続ける、理解しがたい未来を歩むなど、誰も予想は出来なかったはずだ。

母の話では、大事に育てた娘の奇行を知った時の父親の動揺は、なかなかの見物だったそうだ。

普通の父親なら、無理もないだろう。

しかも、彼女の愛用するネットは、ウェンソー社の子会社だ。彼らは、あることないことを大げさに騒ぎ立てるに決まっている。

キアラの父親が恥を忍んで母に泣き付いたのは、自分の政治家とゆう立場だけではなく、父親としても、なんとしても避けたい事だ

ったのだろう。

フィアと別れたあと、セアトはキアラの姿を横目で眺めた。

仕立ての良いクリーム色のワンピースが、上品な顔に良く映える。

セアトはキアラの姿と行動のギャップに軽い目眩を覚えた。

幼い頃の彼女を知っているだけに、彼女の爛れた欲望を見せ付けられたような気がする。

「女は理解しがたい者。それをしようとする男は愚か者、か」

セアトは自嘲するように呟き、キアラの後ろ姿を見送った。

## 第二章 1 トレバー

トレバーは、昼食を終え、自分のデスクに戻ると、端末にセアトからメールが届いていることに気付き、それを開いた。

冒頭を読んだとき、思わず、皮肉な笑みがこぼれた。

- - - - -  
- - - - -

外資系企業ウエンウーの子会社、バーチャルセックスネットにシーブリング上院議員の娘、キアラ・シーブリングが登録されていることが判明。

彼女は男性の姿でネットに登録。

『少女』としてアクセスし続ける人物と、4カ月前から、交流を深めているようだ。

シーブリング氏は、来週、議会に提出されるバーチャルネット規制法案の提唱者である事から、身内のこの行為を考えるなら、法案可決に、損失を与える事にもなりうる。

- - - - -  
- - - - -

セアトの母親の要望は、身内のスキャンダルの尻拭い。

つまりは、あのファミリーの痴情の後始末。

…それもバーチャルセックスネットでの。

スキヤンダル元となる、『あらゆる』データの削除とゆうのが今回の依頼内容だった。

『あらゆる』、つまりは、記憶するものを全てということだ。

シープリングは、オシリス血縁の議員で、そして、オシリスと電警は切っても切れない縁があった。

政治家の娘、お上品なアッパークラスの娘が、男としてバーチャルセックスネットに接続し続け、あるうことか、レスボス式の少女嗜好を曝け出すとゆうのは、大衆を喜ばすにもってこいのゴシップである。

何も不自由のない娘が、理解しがたい趣味を持っていたことには、皮肉にも感じたが、正直、理解に苦しんだ。

少女嗜好は同意は出来ないが、そこまで理解に苦しむほど珍しい嗜好ではない。

彼が最も理解できない理由は、彼女が『男』として、バーチャルセックスネットにアクセスしつづける事だった。

バーチャルセックスネットで、異性の快楽が得られるならまだしも、今の技術で異性の快楽を感じるのは無理なのだ。

何故、感じもしない快楽に身をゆだね、無意味な行動を続けるのだろうか？

トレバーにとって、性的快楽とは、肉体的なものから得られるものだったから理解できなかった。

セアトが宿泊しているホテルのスイートルームの一泊の料金は、トレバーの二カ月分のサラリーとほぼ同額である。

そういう金を湯水のように使い続けなければならない連中の趣味は、だんだんと倒錯してくるのかもしれない。

トレバーにとっては別世界の出来事のように思えた。

トレバーはメールに添付されたデータを開き、このスキャンダルの詳細を知る、『少女』の現実の姿がホログラムで浮かび上がると、ため息をついた。

血生臭い仕事をしなければならぬのは覚悟していたが、『少女』の現実の姿を見たときに迷いが現われたのだ。

ホログラムとともに浮かび上がった文字によれば、娘の相手とゆうのは、ウェンウーの子会社の社員で、バーチャルセックスネットを主に担当する主任プログラマーだった。

それだけなら、彼は何もためらう事などしなかっただろう。

彼がためらったのは、『少女』に扮した、プログラマーは女性で、彼女が美しかったからだ。



繊細、女性らしい、とゆう二つの言葉がここまで、似合う女もそういないのではないだろうか。

華奢で小柄だが、けして貧相な印象を与えないのは、顔立ちの華やかさと、やや釣り上がり気味の大きな目にあるのだろう。不思議な色合いの瞳には力があつた。

白い肌と灰青色の瞳、長い黒髪がエキゾチックな雰囲気醸し出し、手足や腰は頼りない程細いのに、女らしいラインはちゃんと出ている。肉感的とはいいがたいが、女を感じさせるには充分だった。その柔かい線は艶めかしくも見えたが、それ以上の清々しさが彼女にはある。

彼女のその細い首がねじり折られたり、綺麗な顔や体が蜂の巣にされたり、無残に切り刻まれるのは、惜しいと思った。

もともと、トレバーは女には甘かったし、綺麗な女ならなおの事そうだった。

すでに情報は、ウエンソー社の手の中にあるだろう。それはアイシスを使って消去すればいい。

だが、セアトも言ったように、いくらアイシスでも、生身の人間の記憶を消去するのは、不可能だった。

『データの削除が不可能なら、それを保持するハードウェアを壊してしまえばいいのよ』  
と、あの女なら言うだろう。

トレバーもそれしか道が無いことはわかっているが、大した罪の

無い女一人を、電警とゆうよりオシリスの都合の為に消すのは抵抗があった。

この法案は電警にとっても有り難いものだったが、それ以上に得をするのはオシリスだった。

オシリスのインターネット部門のシェアはウエンウー社に負けている。

ウエンウー社の勝因は、バーチャルネットにあった。  
オシリスはこの部門には、まだ弱い。

セアトやその母親、つまりオシリスの一族はこの法案を期に、一気にウエンウー社を叩くつもりなのだろう。

しかし、そんな都合で、綺麗な女を殺したくはなかったし、自分の手を汚したくはなかった。

自分本位な良心の呵責の末、その主任プログラマーのデータをアップし、正式な仕事の依頼文章を作る準備を始めた。

彼が作る文章とは、『犬』への仕事依頼だった。

さいを採るのは自分だが、手を汚すのは連中だけでいいのだと、彼は思った。

ようは、彼女の無残な死体を見たくない為に、トレバーは、他人に仕事を押しつけたのだ。

トレバーが本物の善人なら、何としても、この綺麗な主任プログラ

ラマーを救う手立てを考えて実行するのだろうが、彼は善人ではなかったし、ホログラムと経歴を見ただけの女に、恋い焦がれ、命をかけて救いたいと思う程、おめでたくもなかった。

免罪符を見つけた人間のように、安堵の表情で、彼は依頼文書を送信した。

通常回線で、その文書を送ってしまったことに気づき、後悔するのは、それからだいぶたってからの事だった。

## 第二章 2 グレイン

今の仕事は自分にとって適職だと、グレインは思っている。

もとは、軍の諜報部に所属していたが、キセニア戦争を経験して、軍にほとんど愛想がつきた。

理由は戦争が嫌になったのではない。

軍の墮落ぶりに、心底、愛想がつきたのだ。

一見、完璧ともいえるシステムは、融通がきかない迄に凝り固まり、予想範囲を越えた事象が少しでも起これば、がらがらと崩れていく。

キセニア戦争は、彼に言わせれば、連邦の完敗だった。  
何が原因かは明らかだ。

連邦は、あの三国、キセニア、クルスカ、そしてカスティユを甘く見すぎていたのだ。

確かに、キセニアの兵器と、連邦の兵器とでは、圧倒的に連邦のものの方が性能がよい。

しかし、戦争とは、所詮、人間と人間の争いなのである。

そんなグレインにとって、正式名称すらない機関、"dog"への転職の話が持ち上がった時、彼は迷うことなく軍を辞めた。

連邦にとって邪魔な人間の抹殺や、情報操作など、いわゆる、決して表にはでない裏側の機関で、血生臭い仕事はあるが、軍とは別の命令系統であり、独立した組織となっている事にグレインはひかれた。

諜報部にいたこともあり、この手の仕事はなれたものだ。

軍よりは融通のきく所である。

しかし、彼が諜報部にいた頃、体験した仕事に比べれば、ここの仕事はきわめて簡潔で、単純でわかりやすく、そして不条理なものが多かったが。

彼の主な仕事は、依頼された”仕事”のシナリオを描く事と、自分達が手足として使う、”犬”たちのスカウトだった。

軍に在席した頃に比べれば、グレインのストレスはかなり減ったが、今、彼を悩ませているのは、シナリオを組み立てることよりも、彼が望む、使える人材が不足している事だった。

こんな仕事に使える人材とゆうのは、人権と言論の自由を与えられた一般市民では、不都合な点が多い。

暗殺や情報操作などを担う、この組織は、一部の人間しか知らない。

そして、自由と平等を尊重する国家にとって、あつてはならない組織なのである。

どんな時でも管理をすることができ、邪魔になれば使い捨てれる人材とゆうのは、なかなかいないものである。

しかも、こんな仕事であるのだから、馬鹿では勤まらない。

彼が主にスカウトしている連中は、軍関係者が多かったが、なんらかの事件を起こした者たちだった。

社会復帰できない程の過ちを犯したものや、極刑を免れない程の犯罪者達である。

いざとゆうとき、捨てる為に、そういった者達から、” スタッフを選ぶのが、この組織の特徴でもあった。

グレインのスカウトの内容は、彼らの命を救う事を条件に、彼らの持つ人権を組織が奪い、政府に隷属することを交渉をするのだ。

まるで、悪魔の契約のようだった同僚をグレインは笑った。

自分は悪魔でも天使でもない。  
ただ、任務に忠実なだけの公務員だ。

今日の午前中の仕事も、彼自身が選んだ、” 犬 ” の候補との面会があり、その女が拘束されている、軍の施設に説得に向かった。

見事な赤毛の若い女で、気の強そうな目元は、自分の起こした事件に呆然としているのか、力が無かった。クルスカで起こした、彼女の酷い事件を考えると、本当に彼女が起こした事件なのか疑いとなる程だった。

しかし、グレインが話を進めるうちに、ジェイドグリーンの瞳が見る見る間に、力を取り戻していくのが分かった。

彼女は、今まで通りの生活がおくれるかどうかと、グレインに聞いた。

彼が、監視はつくが、生活も変わらないし、家族とも自由に会えると答えると、彼女は考えるように黙った。

迷っているのだろう。しかし、そういった反応は悪くない。

迷うという事は、グレインが出した条件に彼女が傾いている証拠だからだ。

精神的にやや不安定な女だったが、久々に使えそうな人材に巡り合い、彼女の反応も悪くなかったので、グレインは機嫌が良くなった。

グレインが、上機嫌で昼食を終え、本部に戻り、一時間ほどたった頃、彼の端末の一つが、トレバーからの文書を受信した。

それが、通常回線で送信されたことに気づき、グレインは眉をかめた。

通常回線ではセキュリティは完全ではない。  
ハッキングされる可能性が充分にあるからだ。

そして、文書の内容にまた腹を立てた。  
たかが、民間人の暗殺。  
バーチャルセックスでの痴情の後始末。  
しかも、オシリスにとって都合の悪い人間の消去。

ターゲットの情報は事細かに記載してある。  
これだけ詳しく調べることが出来たのなら、わざわざdogを使わずとも、電警が手を汚せばいいのである。

しかし、上流階級のスキャンダルの後始末にしては少々異質なもので、それはグレインの好奇心をわずかに刺激した。

ターゲットの姿と経歴がホログラムで浮かび上がると、トレバー

が、何故、自分達に仕事を依頼してきたのかがすぐに分かった。ターゲットとなる相手は女で、美人だったからだ。

「トレバーめ、自分が手を汚したくない理由でこっちに押しつけたな。

だから、あの女に足元をすくわれるんだ」

グレインは悪態をつきながら、ターゲットの他のデータに目をやった。

名前はサラ・リンドバル。28才。  
職業はウェンウー社の主任プログラマーとある。

彼女の容姿は技術屋とゆうより、もっと華やかで女性らしい職業を連想させるような身なりだった。

ここ三カ月のクレジットカードの使用状況を見ても、ブランド品に疎いグレインでも知っているような、店名が並んでいる。

一回の買い物に使う金額も量も、かなり多い。

借金をした様子も、支払いを滞らせた事もなく、彼女自身のカードからの支払いである事から、誰かに《貢いで》もらったわけでもない。

彼女名義である、銀行の口座の履歴を見たときに、グレインは目を剥いた。

毎月、彼女の口座に振込まれる給金は、一介の主任プログラマーにしては、多すぎると言ってよかったのだ。



華やかな容姿から、彼女が、ウェンウー社、社長の愛人なのではないかと一瞬だけ思ったが、経歴を見たとき、彼女が普通のプログラマーでないことが分かった。

バーチャルセックスネットの子会社設立はウェンウー社の発案ではなく、彼女がウェンウー社に企画を売りこんだのだ。ウェンウー社が企画を買い、出資。

彼女が基礎理論を組み上げたバーチャルセックスネットの子会社、ニルヴァーナが設立されたらしい。

ニルヴァーナの社員数は、収益を考えると、意外な程少ない。費用はほとんど、バーチャルネットの為の設備ばかりにかけられており、人件費はかなり押さえられている。

会社の社長や取締役は、親会社の役員の出向や、ウェンウー社と繋がり深い人物の天下りばかりで、彼らはあまり実務には関わっていないようだ。

子会社自体も、一つのビルや、オフィスを建て本拠地を固めているのではなく、ウェンウー本社ビルの一室を間借りしている。形式だけそこに会社があることになっていた。

顧客や、ヴァーチャルネットの管理は別の場所で行っていたのだ。

主に業務をしている場所は、ターゲットが借りている、12区のアパルトマンの四階にあった。五階に彼女の自宅がある。

サラリーが高額にも関わらず、彼女は築四十年もする、古典的なアパルトマンに住んでいた。

確かに古いこと以外に、生活に困るような点はないが、セキュリティの面を考えると、このアパルトマンは何かと不用心な点が多い。

まず、12区とゆう場所。

この区は、俗に“アイシスからの逃げ場所”と呼ばれている。

昔、大規模な自爆テロがあつて以来、連邦はこの区の手入れを怠っていた。

一応、道路には、アイシスの警備システムが搭載されているが、ほかの区が道路ばかりか、一般の建築物の中にまで、当たり前のようにアイシスの警備システムを搭載しているにも関わらず、12区は未搭載の建物ばかりで、住んでいる人間も、連邦政府の援助なしでは暮らしていけないほどの低所得者が殆どである。

しかし、マトモな人間なら、こんな場所に居を構える気にはならないだろう。

今にも崩れそうな、とても人が使えないような建物。そして看板さえ無い胡散臭い店が並んでいる。  
首都で起こる犯罪の半数以上が、12区で起きていた。

つまり12区は、一般に言うスラム街だった。

そう呼べるような地区は、ほかにもあったが、ここまで放置された場所はない。

家賃をあと10%多く支払えば、もつとまともで安全な地区に住むことだってできる。だが、ここの住人はそういった事をしない。

しようとしなかった。

何故なら、彼らは、安全な暮らしよりも、危険な地区にいた方がいいと思う人間ばかりだからだ。

表だって言えない《職業》や、連邦からけむたがられる《主義》の人間ばかりが住む区だった。

12区をフェンスで囲んで隔離した方がよいのではないかとゆう、本気ともジョークともとれない議論が囁かれる程、荒廃しきっている。

その区にある、彼女の自宅兼仕事場所のアパルトマンは、他のものに比べれば、設備は一応整ってはいた。

だが、アパルトマンの設備は監視カメラも入り口に一台。お情けのように、入り口がオートロックになっているだけだ。

オフィスと彼女の部屋の扉には、カードキーと声紋認証のロックが一応ついてはいたが、警備員も、またその代わりとなるオートマタ《自動人形》の存在はない。

もちろん、アイシスは搭載されてはいなかった。

彼女は、そこで大半の仕事をし、バーチャルセックスネットの管理をしている。

任務を決行する場所は、ここが良いだろう。

グレインは、この仕事の作戦と相応しい人物を考えた。

大した警備システムも無く、相手が民間人となれば、新人にでも任せられそうな仕事だったが、いくらブランド品に武装されたやり手のキャリアウーマンでも、相手は民間人であり、やはり、罪のない女を殺すのは躊躇するものだろう。

相手が誰であれ、トリガーを引ける人間を何人かピックアップし、その中で成功率の高い犬を選んだ。

コイツは生意気なだが、多いが何かと役に立つ。

作戦を頭の中で組み立て終わり、改めてトレバーの文書を読んだ。そして、ふとした悪戯心が芽生えて、グレインは秘書に内線電話をかけた。

「ニルヴァーナのバーチャルセックスネット用の端末、ヘッドギアのセットを一式用意してくれ。

支払いは電警のトレバー参事官のディスクにまわせばいい。

あと、ガザとの回線を繋げ」

トレバーはグレインにとって、気に食わない人間の一人だった。しかも、こんな仕事を回してきたのだから、嫌がらせの一つぐらいはしてやりたかった。

本来なら、電警での、トレバーの役職で、dogに仕事を依頼する権限などない。

トレバーが特権を与えられている理由は、彼があの子の息のかかった役人の一人だからだ。

あの男は、あの女にいいように、使われている事に疑問を抱かな

いのだろうか。

いつまで、飼われているつもりなのだろう。  
自分なら耐えられない。

グレインは、彼女に尻尾をふりながら、彼女の尻を追っていた男達の末路と、セアトの父親の事を比べ、どちらがマシな人生なのかを考えた。

## 第二章3 キアラ

キアラは婚約者を一人置いて、レストランを出た。

そのまま食事を続けられるような心境ではなかったのだ。

お人好しの青年は、キアラを家まで送ろうと言いだしたが、彼女  
はできるだけ丁寧な口調で断った。

今更、こんな事に気を使ったのは、気を緩めたら、ひどい言葉を彼  
にぶつけてしまいそうで恐かったのだ。

母親が早すぎる娘の帰宅と、思い詰めた表情に、何かあったのか  
と尋ねたが、キアラは何も答えずに、自室に入り、鍵をかける。

誰とも喋りたくなかったし、とても母親に相談できる内容ではない。

ベッドに倒れこむように横になると、自分を抱えこむように丸く  
なる。

母親が心配して呼びかけたが、キアラは答える事ができなかった。

やがて、そのまま呼びかけても無駄だと、あきらめたのか、扉越  
しから呼びかけることを母親がやめて、足音が遠ざかると、部屋の  
中はしんと静まりかえり、聞こえるのは自分の呼吸する音と、鼓動  
だけだった。

興奮の為なのか、動揺のためなのか、脈のリズムが狂ったように早  
い。

できるなら、今、自分の耳に流れ込むもの、すべての音をシャッ  
トダウンしていまいたくなった。

自分の鼓動でさえも煩わしく感じる。

キアラは自分が情けなかった。

自分で自分が許せない程、情けなかったのだ。

あの婚約者の事は、嫌いではなかった。

好意に近い感情も、確かにあった。

彼は優しくかったし、それに、キアラ自身、父の期待を裏切るような事はしたくはなかったのだ。

しかし、彼を愛しているのかと言えば嘘になる。

今日、彼に会い、彼女は初めて嫌悪感を抱いた。

彼ではない。自分に嫌悪したのだ。

たかがバーチャルセックスネットが無くなるだけで、これだけ動揺し、あの『少女』に会えなくなるというだけで、混乱してしまう、自分の『現実』の稀薄さが情けなかった。

結局、彼女にとって、あのネットは、満たされない現実からの逃げ場所だったのだ。

それでも彼女は、あの『少女』に会いたくて、彼女の存在を確かめたくてしょうがなかった。

こんな気分をずっと味わうなら、現実を見せ付けられて絶望した方がまだ。

約束の時間には早かったが、彼女はニルヴァーナのヘッドギアに手を伸ばした。

## 第二章 4 ガザ

その日、太陽が登りきる時刻になっても、ガザは惰眠を貪ったままだった。

寝転がったソファからようやく身を起こしたのは、傾きかけた太陽が、部屋を照らし始めた頃。

眠気とアルコールのせいで、意識は、まだはつきりしない。

寝癖のついた頭をかきながら、欠伸をした。

テーブルに置いてある、既に温くなったミネラルウォーターのボトルに手を伸ばし、直接、口をつけて飲み干す。

リビングを見渡し、彼はため息をついた。

ひどい荒れようだったからだ。

あちらこちらにビールの缶や酒ビンが転がり、床では、体格のいい男が、高斟をかいて寝ている。

「おい。クガ、起きろよ」

その寝転がっている男を、足で蹴るように軽く揺すったが、男は寝返りをうつただけで、起きる気配はない。

昨日の夕方、演習が終わって、一杯ひっかけたあとで家に帰ると、今、床で眠っている男、クガが、玄関の前で待っていた。

呆れた事に、既にできあがった状態だ。

ガザも酒は飲んではいたが、ものの一杯。大した量ではない。

しかも、クガはそんな状態なのに、ビールを2ダースと、安ウイスキーの大きなボトルまで持参していた。



「飲む」

この男の言った言葉は、それだけだったが、ガザはなんとなく、クガがどうしてここに来たのかが、分かった。ようは、愚痴を聞いて欲しいのである。

キセニアの駐屯地で知り合ったこの男は、任務を共にするうちに、ガザと親しく付き合うようになった。嫌味のない、気持ちのいい男で、ジャーナリストになるのが夢なのだと、彼は恥ずかしげに語った。

ガザよりも先に軍を辞め、今は出版社に勤めていた。彼の目標である職業に、少しずつ近づいたと言って良かったが、軍隊と、会社勤めでは、環境は劇的に違う。

ましてや、彼は、そういった場所に勤める事も初めてで、今でも、そのギャップに苦しんでいた。

そういった環境の変化は、仕事が定時で帰れるとか、楽であるとかは関係なくストレスがたまる。

人が何に対し、ストレスを感じるかは、それぞれである。

クガに関して言えば、いくら重労働であろうと、軍隊の生活の方が、この男の性にあっていたのだろう。

人の愚痴を聞くということは、話している人間が思う以上に、聞いている人間には負担がかかる。

幸い、クガは、あまりぐだぐだと喋るようなタイプではないし、ガザはそこまで重いと思った事はなかった。

だが、昨晩は、仕事の話はしなかった。話題は一カ月程前から、恋人になった、女の話だった。

余程、綺麗な女なのだろう。らしくもなく、クガの彼女への賛美は、ガザが呆れる程だった。

出会いは、クガが勤める、出版社近くのカフェで、最初に話し掛けてきたのは、クガではなく彼女の方だった。話かけられたクガは数秒間放心したらしい。

その話を、ガザは腹を抱えて笑った。まったく、『らしく』なかったからだ。何かの冗談かと思った。

しかし、クガの彼女への溺れっぷりがただ事ではなく、それが冗談ではないと気付いたのはすぐだった。

「信じてもらえないかもしれないが、この女の為に死ねると思ったんだ。」

会ったばかりの女の為に死ねると思った」

クガの、その言葉を聞いて、ガザはもう笑えなかった。十代の少年のようにのぼせあがっているだけではないし、はしかどころの騒ぎではない。

「待てよ。そんな顔するな。これには続きがあるんだ。」

放心したのは数十秒ぐらいだったと思う。次に来たのは寒気だった。

初めて会った女に対して、そうまで思い込んだ自分に寒気がしたんだ。

おかしい、俺はおかしくなってるって。

それで、胡散臭いものでも見るような目で、あいつを見たんだと思う。

そうしたら、あいつは笑った。声をあげて笑うんじゃない。微笑ん

だんだ。

もう、嬉しくて仕方がないといった具合にね。

俺は、あいつがなんでそんな風に笑うのか、訳が分からなかった。だって、胡散臭い目で見られて、嬉しそうに笑う女なんて理解できないだろう？

それで、あいつは、俺の隣の席についてた。

話した事は普通の世間話みたいなもんだったけど、俺が、3年前まで軍に所属していて、キセニアにいたことを知ると、興味が深くなつたみたいで、俺の連絡先を知りたいと言ってきた。また、会いたいって。

綺麗な女に、話かけられて、連絡先まで聞かれて、悪い気はしなかったから、俺は連絡先を教えた。

短い時間だったけど、マトモそうな女だったし」

「キャッチセールスの類とか疑わなかったのか？」

「それは、色々考えたさ。少しでも、そんな予兆が見えたら、会わなけりゃ済むことだろう？」

「そりゃあそうだ」

「で、女の方も、連絡先のメモをよこして、先に店を出ていった」

「その後に何かがあったわけだ」

「お前も性格が悪いな。

まあ、確かにその通りだ。

俺達は、その時、カウンター席に座ってて、女が出てしばらくすると、ウェイターが『初めて見た』って呟いたんだ。

俺は何の事か気になって、何を初めて見たのか、尋ねた。

ウェイターは、あの女が初対面の人間に、連絡先を教えるのを初めて見た。と答えた」

「別に、普通の事なんじゃないのか。

店に来る度に、めばしい男に、声をかける女の方がめずらしいだろう」

「俺もそう言ったさ、そうしたらウェイターは、苦笑しながら答えた。

『ただ、言えるのは、あの女が、どうしようもないくらい、淫乱な女って事です。

いつもは、そのままテイクアウトだから』」

「…とんでもない女だな」

「だろう？

全然、そんなタイプには見えなかったから、俺は、『あんたも、あの女と寝たのか？』って尋ねたら、ウェイターは苦笑いしたまま、仕事に戻った。

まあ、それなりの事はあったんだろうよ」

クガは、酔ってはいたが、その口調は冷静だった。

「お前さ、飯にも、自分の女が手当たり次第に男と関係持ったって言われたんだろう？今付き合ってるんだろう？もっとヒステリックになってもいいと思うよ」

「あのな、今、付き合ってたとしても、過去の素行にヒステリックになっても、仕方のないことだ。

それを知っていて俺は付き合ってるんだから」

「今は？今も、男漁ってたかどうかするんだ」

「今は、他に男の影はないと思う。

そのウェイターの話じゃ、淫乱って事だったが、俺にはそうは思えない。

男慣れもしてないし、うぶにすら見える」

「じゃ、お前はそのウェイターが、嘘をついてるって思ってるわけ？」

「…さあ、どうだろうなあ。

俺はあいつが、別に、はすっぱで、とんでもない尻軽でもかまわないんだ」

「じゃあ、なんで正体無くなる程、酔いたがるんだ？」

「最初に話しただろう。

この女の為なら死ぬと思ったって。

本当に妙な感覚だったんだ。あれは普通じゃない」

「一人で上せられても。あてられるこっちの身にもなってみろ」

「…上せるって感覚じゃないんだ。

まるで、自分じゃないみたいだったんだ。

強いてゆうなら、そう『思い込まされた』みたいな感覚かな」

「なんだよ、それ」

クガは、また苦笑しながら、少し考えるような顔をした。

「うまく言えないが、あれは俺の意志じゃない。

『何か』に頭のなかをいじくられてるような、勝手に、俺の中に『何か』が入ってくるような感覚だった」

「『何か』ってなんだよ。

頼むから神とかは言わないでくれよ」

「さあ、なんなんだろう。

少なくとも俺の意志じゃない」

「精神科にカウンセリングでも行った方がいいんじゃないのか？」

ガザはクガの言っていることが理解できず、なげやりに答えたが、酔いのせいか、クガはそのまま話し続けた。

「今はもちろん、そんな感覚は湧かない。

あの女に対して、性欲とか、好意とか、愛情とか、そういった、淡い気持ちは湧くけど、そこまで、切羽詰まった気持ちになることはないんだ。

でも、あいつといると、たまに、その妙な感覚がする。

頭の中に何かが入ってくるような感覚がする。

気を抜いた瞬間、まどろんでいるとき、時も場所も、俺の気分さえ関係ない。油断すると、ふつつつとわいてくるように、『何か』が入り込んでくる。

俺はそれを、毎回、打ち消して拒否してるんだ」

ガザは、淡々と喋る、クガの顔を見ていた。よく知った顔だが、喋り続けるクガは、ガザの知らないクガだった。

「いつからかな、俺はそれが楽しみになってきたんだ。  
拒否すればするほど、『何か』は、執拗に俺の中に入りこんでこ  
うとする。」

困った事に、そのやりとりは、とても刺激的なんだ。

そんな訳の分からない感覚と戦う事が楽しみになってきてる自分が  
恐いんだよ」

ガザはクガの語る、『何か』に、うつすらとだが、不安を覚えた。  
「疲れがたまってるんじゃないのか。だから、そんな妙な感覚にな  
るんだよ」

ガザは、自分の不安を消したい為に、なげやりな答えで、クガの  
話を終わらせた。

## 第二章 5 ガザ

ガザは、昨夜のクガの話を思い出し、ため息をついた。

確かに気の合う男だが、一つだけ理解できない事がある。  
それは女の趣味だ。

クガはそこまで、女に困るような容姿や性格ではないのに、彼の付き合う女はろくな女がいなかった。

何かしら問題を抱えている女が多かったし、執着心の強い、ウェットな性格の女ばかりだからだ。  
自分はさっぱりとした性格なのに、そういった女に頼られることが、好きらしい。

クガの今、付き合っている女もそういった女に違いない。  
彼が妙な感覚を時折感じるのは、仕事のストレスと、どうせ、その女の重みのせいからきているのだろう。

しかし、今は、この眠っているクガを叩き起こす事の方が問題だ。  
どうやって、クガを叩き起こそうかと考えていると、リビングに置いてある、仕事用の端末がアラームをたてて起動しはじめ、ガザは舌打ちをした。

この端末が起動するのは、仕事が入ったときだけだったからだ。

ガザは端末に向かい、ホログラムをオフにし、イヤフォンを耳に



付けた。

『なんだ。今起きたのか』

聞き慣れた、上司グレインの呆れたような声が耳に流れてきた。ガザは、相手の映像を切っていたが、あちらはそうではないようで、寝癖のついたままの、みつともない姿が見えているらしい。

『熱源が一つ余分にあるな。…ああ、いつもの、あの元兵士か』

グレインは、ガザの部屋の情報を、今、見たのだろう。

カメラこそないものの、ガザの生活、誰が部屋を訪れたとゆう履歴などは、ガザを管理している連中には筒抜けだった。

監視されるのは、心地がいいものではないが、それは、ガザの払った代償の一つだ。

しかし、こんな代償で罪が許されている事を、ガザに殺された人間の遺族が知ったら、ただではすまないだろう。

中年の男の声が、耳に直接響いてくるのは、あまり気持ちの良いものではない。それに、クガがいつ起きるかも分からない。

ガザは、急かすように、グレインに言った。

「用件は？」

『仕事が入った』

ガザは苦笑した。

政府が自らが作った法を犯すとゆうリスクを背負ってまでも、消したい人間や情報は、日々、絶える事無くわいてくるらしい。

ノルマに追われることはないが、失業という言葉からは無縁の仕事なのかもしれない。

『本部設置場所は、12区。

メンバーはお前一人だ。』

「一人で済むような仕事なのか？」

『今回の任務は簡単だ。手をわずらわせる事もないだろう。バックアップは、何人が付ける。

今回の本部の場所のデータを後で送る。

明日、12:00迄にそこへ来い。…それと』

グレインは、一旦、言葉を区切り、苦々しく付け加えた。

『それまでに、体調を整えておくように。いくら簡単な任務でも、二日酔いでは話にならない』

ガザは鼻で笑い、通信を一方的に切った。

グレインの注意を鼻で笑ったものの、確かに、今の体調は万全とは言えない。

今も、思考回路にアルコールの靄がかかっている事は否めないのだから。

こういった、だらけた体に喝を入れるのに最適な方法は、多少の運動だ。

狂った体内時計も、体を疲れさせ、早めに睡眠を取れば元に戻るだろう。

シャワーを浴びてから、ジムへ行こうと決め、バスルームに向かおうと足を踏み出したとき、床で大きな体が、寝返りをうった。

シャワーの前に、やらなければいけないことを思い出し、ガザはまた一つため息をついた。

## 第二章 6 キアラ

キアラはあれからすぐに、ステージ07へとアクセスしたが、約束の時間にはまだ早く、あの少女がいるはずはなかった。

焦る気持ちといらつきを抱え込んだまま、このステージにアクセスしたが、このステージの建物に入った瞬間、そのことを忘れそうになった。

少女は、ここの内装はなかなかのものだと言ったが、それ以上の場所だったのだ。

キアラが婚約者と食事したホテルにどことなく似ているが、現実にあるもののケチ臭さとセンスのなさを嘲笑うかのように、豪華で洗練された場所だった。

ニルヴァーナのどのステージもそうであるように、ここは明けることのない夜が永遠と続く。

一階のロビーと庭園で相手を物色したり待ち合わせに使い、交渉が成立したあと、二階の部屋で目的を果たすのがここのルールらしい。

ここにはソファや椅子は置いてはあるが、ホテルのように喫茶室やレストランはない。

サンルームから見えるライトアップされた庭園は、国も気候も花の咲く季節も、まったく無視するように、ダリア、ジャスミン、白木蓮、芙蓉、牡丹などが爛々と咲き誇っている。

壁に飾られた絵画も、ルネサンス、アールヌーボー、印象派、現

代美術にいたるまで、現実にある美術館よりも豪華な面子の作品が、飾られていた。

どこか淫媚な作風のものが多かったが、バーチャルネット、つまり仮想空間ということもあり、美術品を所蔵、管理している財団や美術館に、使用料を払えさえすれば、仮想空間に利用することはできる。

なので、ガラスの花瓶一つにしても、ガレやドームなど、普通なら手にとることすらできないようなものを、無造作に飾る事ができるのだろう。

豪華だが、どこか浮き世離れして、飾られたものに統一制はまったくなく、それらの共通点は、ただ美しい事だけだった。

美しいものを掻き集めるだけ掻き集め、飾り立てたような内装だ。一歩間違えれば乱雑で嫌味なものになってしまいが、ここには調和があつた。

それは大きな差だった。

けして成金趣味の為せる技でも、美術収集に熱をあげる人間のそれでもない。

この空間を組み立てた人間の、繊細で狂ったような美意識。それを強く感じた。

絵画や彫刻に興味のない人間は素通りしてしまうかもしれないが、キアラは美術品は嫌いではなかったし、むしろ好きな方だった。

何度か会うつちに趣味の話になることもあり、前に、ガレが伊万里焼を意識して作ったと言われる花瓶に、触れてみたいと言った事もあつた。

少女はキアラの好みにあつたステージを選んでくれたのだろう。

何もせず、じつと待っているだけなら、耐えられなかったかもしれないが、ここで美術品に目を楽しませ、ガレの花瓶にそっと触れていると、抱え込んでいた焦りのような感情を、少しだけ落ち着かせる事ができた。

しかし、絵画とアンティークの観賞に熱中していても、キアラに誘いをかけてくる客が何人かいる。

ご丁寧に絵画の説明をしてくれる者までいたが、それぐらいの知識はキアラも持っていたし、いちいちそんな連中を相手にするほどの気前の良さは持ち合わせていない。

生返事に対応するだけだったが、相手にするのも馬鹿らしくなり、後半は無視と決め込んで観賞に没頭した。

室内を十分に堪能し、狭いながらも立派な庭園に出ると、そこにドナテッロのダビデ像が飾ってあった。

ダビデは数多く作られていたが、その中でも有名なものは、ミケランジェロのダビデ像だろう。

そのミケランジェロではなく、わざわざドナテッロのダビデ像をここに置いたのは正解であると、キアラは思った。

最初はフィレンツェのパラッツォ・メディチにあったと言われる、このダビデは、ドナテッロのパトロンであったコジモ・ディ・メディチが発注して作られたと伝えられている。

ミケランジェロのものと同じように、ほとんど、全裸であった。

ミケランジェロのダビデは、確かに素晴らしい。知名度もドナテッロのものとは比べものにならない。

しかし、ここにはミケランジェロのダビデは似合わない。  
あえて言うなら、健全すぎるのだ。

全裸の彫像を健全と言うのもおかしい話だが、ドナテッロのダビデ像と比べての話である。

何が違うと言えば、作者が違うのであるから、立ち姿も肉体の質感もまるで違う。

ドナテッロのダビデは、男らしい筋肉に身を包んではない。  
だからと言って女性的なものでもなく、まだ成熟していない中性的な体つきだ。

実際の人間で型をとったのではないかと言われるほど、自然なたずまい。しなやかな手に剣を握り、首を打ち落としたゴリアテから伸びた羽が、大腿にそうようにして張りついている。彼は冷たい微笑みを浮かべながらゴリアテを足下にしていた。

その微笑は、甘いのに何かを睥睨するような、冷たいものだった。

その表情はどこか官能的で、キアラは後ろめたさを感じ、何かよからぬものを見てしまったような気分になれた。

バグが生じたのは、キアラがダビデに見とれ、その世界に没頭しはじめてすぐだった。

視界がぼやけ、風景が歪みだした。  
他のバーチャルネットではよく体験するもので、それはシステムの不安定さや、サーバーが『客』をさばききれなかった時によくある現象だった。

そのまま、強制的にネットから弾かれることもよくある。

しかし、ニルヴァーナでそれを体験するのは初めてで、キアラはここが現実ではなく、所詮、よくできた仮想空間でしかない事を実感して不愉快になった。

こういった現象は、『客』にはどうする事もできない。ただ、じつと嵐が過ぎ去るのを待つだけだ。

キアラは固く目を閉じ、歪んだダビデや草花を見ないようにした。いくら仮想空間でも、歪み続ける不安定な景色に酔ってしまう事はある。

そのとき、キアラの耳に、待っていた少女の声が届いた。

「ずっと、待ってたみたいね」

キアラは目を開け、目の前に少女がいる事に安堵した。

もう会えないのではないかと心のどこかで心配していたのだ。

強ばった体から、自然に力が抜けていく事に気付く。

この場所の華やかさに負ける事無く、何度見ても彼女は美しかった。バグはいつの間にかおさまり、景色は何事もなかったかのように、キアラとその少女を固着させた。

少女は、微笑みを浮かべてはいたが、何故か疲れた表情をしていた。

「でも、なかなかいいステージでしょう？」

彫像を触ったり、ガレのスタンドを撫でまわしても誰にも怒られない」



そしてキアラが、言葉を紡ぎだす前に、彼女は口を開いた。

「ずっと待たしていたのに悪いけど、今晚は急用が入ったの。すぐにアウトしなくちゃいけない」

甘い妄想が消えるほど、彼女は事務的に用件を伝えた。

「明日は？」

「無理だわ」

そっけない返答に、キアラは思わず、声を荒げた。

「じゃあ、次会えるのはいつ？」

「今の段階じゃ分からない。また機会があれば会えるわ」

また機会があれば。意味を返せば、機会がなければ会えないと言うことだ。

「そんなものがある？」

私はあなたの名前すら知らない。何一つあなたの事を知らない。そんな関係なのに約束もせずまた会える事ができる？」

少女は困ったような、呆れたようなため息をついた。

そして、駄々をこねる子供に言い聞かせるように、優しく言った。

「あなたが望むならまた会えるわよ」

「明日もここで、待ってる」

「そんな聞き分けのない事を言わないで」

「いきなり、もう会えないって言われたようなものじゃない。理由も言わず。」

「納得できるわけがない」

「あなたの悪いところは、焦るとまわりが見えなくなつて、自分の感情しかぶつけられない事ね。」

それに、もう会えないと決まつたわけじゃないわ。何をあせるの？」

「じゃあ、何故、急に会えないみたいな事を言うの？」

「人の質問には答えずに、質問ばかりするのね」

少女は感情的になる、キアラに苦笑した。『彼』とは正反対に極めて冷静だった。

「私だつて、こんな冷たい言い方をしたいわけじゃない。でもね、忘れてはいけないことがある。ここは『現実』じゃないのよ。」

確かに、体験した情報、脳で処理する経験は、ここと現実とたいした差はないわ。

それでも絶対的に違う事がある。

肉体がないの。脳では経験してるのに肉体は経験してないの。

『現実』がなければ『この世界』は確立できない。

でも、『この世界』がなくても『現実』は確立することができる。

ここは、私たちの生活に付属する、お楽しみの一つにすぎないものよ」

「つまり？」

「今は、そのお楽しみが危うくなる程、現実が忙しいの」

現実。なんて残酷な言葉なのだろう。

確かに、ここは現実ではないし、別になくても生きていくうえで必要のない場所だ。

それでも、今のキアラにとって、少女との関係がなくていいものはなかった。

「何が原因でそんなに忙しいの？」

少女は返答を濁すように曖昧に笑った。

答えたくないのか、キアラには理由を言う価値すらないのか。

『現実』の無関心の塊であった彼女は、もうどこにもいなかった。我儘で自分本位な感情が、彼女のプライドを吹き飛ばした。

「あなたは私がいらないの？」

「一人で感情的にならないで。」

あなたをいらないなんて思ってないし、あなたの事はかなり気に入ってるのよ。

でも、今のあなたが私に何を求めているのかは、わからない。

あなた自身も自分が何を求めているのか分からないのではないかしら。

キアラ、よく冷静になって考えてみて」

「明日も待つてるから」

「約束はできないわ」

少女はそれだけ言うと、キアラを残して、そのまま庭園を去っていった。

華奢な後ろ姿を見ながら、キアラはぶつけようがない怒りを覚える。私を拒絶した。彼女は私を拒絶した。

少女の口にした言葉を頭の中で反芻しながら、違和感を覚える。一度きりだが、少女はキアラの名前をはつきりと呼んだ。キアラが少女の名前を知らないように、教えた事はない。

怒りを忘れ、少女を探したが、彼女の姿は既になく、あのダビデが冷たい微笑みを浮かべて『彼』を見下ろしているだけだった。

## 第二章 7 サラ

ニルヴァーナからダイブアウトしたとき見えた、途方にくれたような『彼』の顔を思い出し、サラは胸が痛んだ。ひどい事を言ってしまった。

「自分が何を求めているのか分かっていない」

我ながらよく言えるセリフだと思う。

サラも自分が、本当は何を求めているのか分からない。何をすべきかは分かって、本当に欲しいものが何かは分からない。

しかし、今はタイミングが悪いとしか言いようがなかった。

残された時間はあと一日と少ししかないのだから。急いで、ニルヴァーナのシステムも修正しなくてはいけないし、できるだけ沢山の『友人達』にデータを渡さなくてはいけない。失敗すれば、彼女に二度と会うことはできないだろう。

サラが時間に追われるきっかけは、なんとも馬鹿げた話だった。

キアラのニルヴァーナでの行動を隠すため、彼女の父親がサラを消そうとしているのだ。

なんとしてでも、娘を自分の常識の範疇に閉じ込めておきたいらしい。

親として娘のこういった趣味を知ってしまったのはショックだろうが、その趣味の相手を殺そうとするのは、いささかやりすぎではないだろうか。

ウェンウー本社にサラとキアラのニルヴァーナでの関係が露見すると、重役達は、サラに証拠のデータの提出と、キアラとの関係を証言するよう要請してきた。

近々、キアラの父親の派閥からバーチャルネット規制法案が議会に提出される事は知っていたが、まさか、自分がそのスキャンダルの証言を求められるとは思ってはいなかった。

確かに、サラはニルヴァーナを管理する立場なので、キアラがшибリング上院議員の娘であることは知っていたが、二人が出会ったのはまったくの偶然だった。関係をもった後で、キアラの父親が誰か分かっただけで、別に彼女を利用しようするために近づいた訳ではない。

サラは立場が立場なだけに、ウェンウー社の要請を断る事はできなかった。

本社の命令に背く事は、国を裏切る事と同じ意味だったからだ。

念のためにшибリング上院議員の周りや、電警のネットに網を仕掛け、上院議員の身边を洗い上げていると、あまり芳しくない事実が浮き彫りになる。

上院議員の近辺で、不可解な事件が多く起こることか。

ライバルの失脚、突然の死。それは、さも偶然のように、自然を装っているが、なんともきな臭い。

警戒して網をしかけたたのは正解だった。

思ってもみない情報が、電警からサラに伝わり、彼女は迷う事無く、母国にいる『本当の上司』に、自分が殺される可能性と、電警が自分を消すように依頼した組織の事を報告した。

その組織の名称は不明で、文書にも、ただ、犬としか書かれていないが、何を専門にする分野なのかは明らかだ。

民主主義、平等を声高らかに宣言する連邦であっても、物騒で公表できない組織は存在するらしい。

どこの国も同じだとサラは苦笑した。

扱うジャンルは違うが、自分も似たような立場だからだ。

国が自分を守ってくれるかもしれないと、少しでも期待して報告したのだが、上司は『犬』の情報は有り難く受け取ったにも関わらず、彼女を守る気はさらさらなようで、自分の身は自分で守るようと、いつも通りの冷たい返答をよこしてきた。

その返答はある程度予想していたものだし、それなら、これから自分のやりたいようにやらせてもらおうとサラは心を決めた。

自分を守り、そして何も知らないキアラに傷を付けない方法でその場をしのぐ事にした。

それに、自分を守ろうとしない母国や上司に一泡吹かせてやりたかった。

キアラのあの様子では、自分の父親が、サラを消すようにと色々仕組んだ事実を、まだ知らないのだろう。

彼女の上司、あの男の言った通り、今の連邦はパワーバランスがおかしい。

原因は連邦を牛耳るあの一族　オシリスのせいだろう。

こんな事で、自分に彼らが関わってくるとは予想もしなかったが。

世の中に偶然はない必然だけだと言った、あの男の言葉が真実なら、この世の摂理に感謝したい気分になった。

サラがキアラに出会ったことも、彼女がオシリスに関係の深い人物であつたことも偶然ではないのだ。

今回の出来事は、サラにとっての危機かもしれないが、チャンスでもあるかもしれない。

事がうまく進めば、自分に与えられた指命も果たすことができるかもしれない。

あの一族の一員にしては、キアラはまともだった。

少なくとも、まともに生活していた。

彼女を愛する両親に与えられた、安楽な日常に包まれ、それを失う事を露ほども疑わない。

ようやくこの年令にして、親離れしようと、あがきだしたが、親の方がうまく子離れできるだろうか。

打算を抜きにしても、キアラはかなり好みだ。

無意識に美醜を見抜く。頭も悪くない。

そしてなにより、娘を愛する両親に与えられた場所しか知らなかった事に焦りを感じはじめている。

サラはそういったものに抗う人間は好きだった。

もし、キアラにオシリスの血筋の突拍子もないとさえ思える程の



行動力。

その『血』が表面に出るとき、彼女はどう変化するのだろう。それを思うと、興奮に近い感情が湧き出てきた。

そのきっかけ、彼女を変化させる媒体は自分かもしれないということ。

そうなれば、キアラにとって自分は忘れがたい存在になるに違いない。

自分の存在を彼女に刻み付けることができるだろう。

サラは徹底的に自分の容姿と肉体を利用して生きてきた。売れるものはなんでも売った。体の一部でさえも。

後悔はしたが、良心の呵責に苦しんだりはいしない。

自分の何もかもを利用しなければ、この豊かな生活も手に入れることはできなかったのだと理解している。

豚が餌箱を漁るように、自分の体を貪る男達に何をされても、何も感じなかった。彼女の中には打算しかなかったからだ。か細い声で抵抗すると、男達は喜んだ。

実際は恥ずかしいわけでも、痛いわけでも、感じているわけでもないが、そういった『フリ』は男達には必要だったからだ。

それでも許せない男が一人だけいた。

他の男達は、サラに本気でのぼせているか、自分の肉欲を満たす為だけに、彼女を抱いたが、サラの上司　あの男は違った。

彼はどの男よりもサラに優しかった。

どの男よりも贅沢をさせてくれたし、高価な贈り物もくれた。彼女に高等教育を受けさせるためにＩＤを買い市民権を与え、湯水のように金を使った。

しかし、ようやくその全てが彼の計画だった事に気付く。

彼の『計画』、サラが連邦に『潜入』する目処がたつと、男はまったくサラに会おうともしなくなった。

連邦に旅立つ直前に、彼はそ知らぬ顔をしてサラに会いにきた。久しぶりに会った男は、相変わらず優しくかったが、サラには指一本触れはしなかった。

連邦で勉学に励むようにと、君がいい成績を修めれば修めるほど、それは国にとって利益になる事だと言い聞かせた。

サラはようやく気付いた。

彼の行動、その自分への奉仕は、愛情からくるものではなく、彼のロジックの断片にすぎなかったということに。

優しく笑う目の奥、その瞳には、感情のゆらぎはなく、サラを抱いた事すらその計画の段階にすぎなかった。

彼の心にサラが映った事はなかったのだ。

サラは、彼が愛情ではなく、何かの衝動、鬱屈した欲望であれ、性欲であれ、それが打算的なものでなければ、彼を許せたかもしれない。

彼にあったのは、常に冷静に計算し、自分を打ち消して、サラを母国の、そして自分の駒にするための目的しかなかったのだ。

そして、一番許せないことは、そんな男の優しさではなく、今更気付いた、彼の底知れない冷たさに自分がひかれてしまった事だ。同じような人間にひかれる、自分のナルシズムにも吐き気を覚えた。ただ単純に、あの男に愛して欲しかったかは、サラには分からない。

自分が、男達に今までやっていた事を、同じ男にやり返された悔しさと惨めさ。

本当の意味で自分は汚れてしまったのだと思った。

彼と過ごした月日は苦々しい思い出として、サラの心に傷を残した。

どの男も彼の面影に重なり、許せなくなった。

それでも、自分を利用し、男達をたぶらかす事はやめられなかった。

ずっと、そうして生きてきたのに、今更、生き方を変えることはできなかった。

あの男が、何事もなかったかのように、サラとの関係を清算しようとしている事に気付き、サラは激昂し男に乱暴な言葉を投げつけた。

あなたは、私を利用しただけだし、私なんて気にもかけたこともない癖に、そうやって優しくして、善人面する。

そんなあなたを私は許す事ができない。殺してやりたいぐらいだ。

興奮してまくしたてる彼女に、彼は冷静にこう言った。

「君はもつと、冷静でお利口な娘だと思っていた。私が君を必要としていないと言ったが、君は私を必要としてくれた事があつたのか？君は私の事を、自分のパトロン、君にとって都合のいい男という以外で目に映った事があるのか？」

君が私を利用したように、私も君を利用しただけだ。

それを今更になって、私を責めるのは筋違いと言うものだ。

君が自分の利益のみを考える女の子だったから、私は君に近づいた。

たとえ、君が私の愛情を欲していたとしても、それは私には与えてやることはできない。

私には荷が重すぎる。

君は淋しい女だ。これからもずっと一人だろうし、他人と交わることもないだろう。

周りが君を一人にしているのではなくて、君がそう望んでいるからだ。君は子供と同じで、人から与えられる事を待つか、そうでなければ奪う事しかできない。人に何も与えようとしない。だから救いようがない。

私に君を救う事は無理だ」

その言葉はサラをひどく傷つけた。

サラを淋しい女だと、ずっと一人のままだと言った。

では、彼は一人ではないのだろうか。

サラの知らない彼。

感情をむき出しにした彼がどこかにいるのだろうか。  
それを知る人間がいるのだろうか。

面白半分に、キアラとニルヴァーナで関係を持ったとき、いつも感じる嫌悪感とあの男の面影を不思議と抱く事はなかった。

あの世界で肉体は男でも、現実には女である事を知っていたからだろうか。サラは、あの男の面影も彼の言葉も忘れた。

自分にあの男の事を、例え一瞬でも忘れさせてくれた存在を、できるなら傷つけたくはない。

いくら甘やかされて育てられた女だとしても、どの男もできなかった事を彼女はしてくれたのだ。

それに何も悪い事などしていない。  
悪いことをしているのは、彼女の父親やまわりの人間、そしてサラ自身だ。

これから起こること、自分がやらなければいけないことを考えると、緊張感よりも、なぜか興奮に近い感覚が沸き上がってきた。

キアラと自分を守らなければならない使命感と、名をあげる為の野望。

一方で献身的な望み、もう一方で利己的とすらいえる欲望。

矛盾してはいるが、双方には共通点があった。それは彼女自身が強く望んでいる事だった。

その両方をかなえたいと思う自分は欲張りなのだろうか。

先程、思わずキアラの名前を呼んでしまったが、彼女はそのサインに気付いただろうか？

あの男に与えられた使命に相応しく、やはり自分は悪い女なのかもしれない。

### 第三章 1 ガザ

ガザは、目的地に近づくにつれて荒んでいく風景を物憂げに眺めた。

裕福で整った清潔な街から、貧乏で手入れの行き届かない不潔な街へ。

橋を渡った時点から街の様子はひどくなった。

無人タクシーの中、今日の仕事場所に向かっている途中だった。

グレインは、今回は楽な仕事だと言ったが、ガザはその言葉を信用する気になれなくなった。

無人タクシーから流れるアナウンスが一際大きくなっている。

ここは危険区域だとか、連邦の首都で一番犯罪の発生率の高い区だとか、強盗や強姦に気を付けるようにとか。

アナウンスは終わったかと思えば、はじめに戻り、同じ言葉を繰り返すばかりだ。

今回の仕事の『根城』は治安がいいとはいえない12区のマンシヨン。

ガザも12区の治安の悪さは知っていたが、民間企業が運営する無人タクシーですら、ここまで来たとゆう記録を消してもらった。上に物騒な場所なのだろう。

ガザは無人タクシーの運営会社とナンバーをメモした。

グレインに、ガザがここまで来たとゆう記録を消してもらった。

目的地付近に着き、タクシーから降りるとグレインに指定された場所へと足を向けた。

道は石畳を敷き詰めて作られているが、ゴミが散らばっており、お世辞にも清潔だとは言えない。

この12区は19世紀パリをイメージして作られた。

現代的で無機質な高層ビルを建てず、趣のある『無駄』の多い建物ばかりを建設した。

昔ここが栄えていた頃は、高級ブランドの店が立ち並び、ここで部屋を借りることが一種のステータスとなるほどの区だったと言う。

しかし、この区を設計した人間たちは都市計画をきちんと立てていなかった。

道を整備する前に、建物の建設を急いだせいか、細い路地が何本も迷路のように入り組み、かなり不便だった。

そして、二十年ほど前、12区を大きな爆破テロが襲う。

被害はすさまじいものだった。一ヶ所ではなく、四ヶ所で同時に起こった。

死者は五百人をゆうに越え、爆破のあった場所は、一般人では入ることを躊躇うような、店やレストランやホテルのロビー。

犯人は捕まったが、彼らが連邦の豊かな人間達を狙ったのは明らかだった。

主犯者のテロリストはカスティユ系の移民だった。カスティユはガザの生まれた国だ。

彼らは母国の為に良かれと思ってやった事なのだろう。

その思考はガザにはまったく理解できないが、この場所でテロを決行した理由はなんとなく理解できた。

一言で言えば嫉みだ。

戦火で荒れた土地で、這いつくばりながら泥水を啜るような生活を強いられる連中。

安全な場所では高価な酒を舐めながら、体感したことのない、戦争について語る連中。

この不平等。

一度、落差を見た者は感じずにはいられないだろう。

政府は、すぐにでもこの区を再建するつもりだったが、そこまで手が回らなかったのが当時の現状だった。

なにも、テロが頻発したのは、12区だけではなかったからだ。復興を優先されたのは政府の重要機関と関係の深い土地で、丁度同じ時期に、陸軍の施設が破壊された事もあり、娯楽と金持ちのステイタスの為だけに存在する街の復興は後回しにされた。

そして、いざ12区に再開発するだけの余裕ができたとき、政府は12区の計画性のない街づくりに唖然とするほかなかった。

見た目は美しいが、建物の手抜かりの工事。

装飾はすばりしかったが、中身はひどく御粗末なものだった。テロであれだけひどい被害が出たのは、爆薬だけが原因でないことが今更分かった。

それに加え、入り組んだ道路。

少し手を加えただけでは追いつかない。街を最初から作り直さなくてはいけないほど予算がかった。

政府は12区の復興を見送ってしまった。それは、もちろん今でも見送られたままだ。

それでも、この街にひかれる連中はあとをたたない。アイシスの目から逃れたい者達。政府の目から隠れたい親キセニアの連中。



そして、物好きな好事家。

テロがあつた場所の一部は、まだ残っており、爆炎の跡と崩れた建物の一階はまだ残っていた。

そういう場所は、沢山残っているが、ここまで、見捨てられた区はめずらしい。あえて、そういったものを国が作ったのではないかと思つてしまうほどだ。

昼間はゴーストタウンのように人気がない。それがかえつて不気味だ。

入り組んだ細い路地裏には看板を出せないような店が何件もあり、夜ともなれば娼婦や男娼、麻薬のディーラーなどいかがわしい連中がたむろする。

しかし、ガザはそういう場所に不思議と不快感を抱かなかつた。懐かしくさえ感じたのである。

12区はガザの故郷に少し似ていた。似ているといっても、ガザの生まれた町はカステイユの中でもとんでもない田舎で、いくら老朽化しているとはいえ、こんなに立派で手のこんだ建物はないし、住人は戒律の厳しい宗教に縛られ、生活するのにも精一杯で、麻薬や娼婦がはびこる程、余裕のある場所ではなかつた。

放棄された、あちらこちらに見える廃墟。その雰囲気似ているのだ。

ガザは目的地のマンションの前に辿り着くと溜め息をついた。

老朽化が進み、廃墟のような八階建ての建物。

グレインは『古いマンション』と言ったが人が住んでいる様子は全く無い。

一階は、何かの店が入ってたのだろう。

大きなショーウィンドウがあったが、窓ガラスはほとんど割られ、破片は室内に飛び散ったままだった。

指定された部屋は四階にあるとのことだったが、どこから四階に行けるのかは外からではまったく分からない。

とりあえず、中に入るしかなさそうだ。

ガラスのないショーウィンドウから中に足を踏み入れ、薄暗い室内を見渡す。

高い天井から蜘蛛の巣や埃で汚れたシャンデリアが吊り下がっていた。壁にかけられた真鍮細工を施した大きな鏡はショウウィンドウのガラス同様に割られ、床に丸裸のトルソーが数体床に転がっている。大きな棚は倒れたままだ。

煤けた緋色の壁には、高級ブランドのマークがまだ残ってはいたが、上からスプレーで下品な落書きがされていた。

奥にエレベーターがあったが、動くようには見えない。試しにボタンを押したが、やはり動かなかった。ガザは階段を探す為に辺りを見回した。

その時、道に人影が見えた。

若い女だった。こんな所を女一人で歩くのは物騒に思える。この区ではめずらしく、こざっぱりとした服装をしているが、遠目なので顔までは分からない。

女はガザに気付いたらしく足を止め、「階段が建物の裏にあるわ」と大声で教えてくれた。

ガザが近づいて礼を言おうとすると、女は急いでいるのか足早にその場を離れて行った。

### 第三章 2 ガザ

女が言ったとおり、非常階段が建物の裏手にあり、そこから四階へと向かった。

階段から四階へ通じる扉の鍵はグレイン達が開けたのだろう、鍵はかかっていなかったが、耳障りな音をたてながら滑り悪く開く。

廊下は一階のようなひどい有様ではないし、広い。

古風なアパルトマンを真似て作ったらしいこのマンションの扉は綺麗な装飾がされており無駄に大きかった。昔は高い家賃で貸し出していたのだろう。

指定された部屋のドアをノックすると、スーツを着た、何度か見たことのある男が扉を開けた。

玄関から続く廊下の先にある、一番大きな扉の部屋に行くようにとガザに言った。

その部屋にグレインとその部下が三人いた。

グレインと一人の男はいつも通りスーツ姿だが、あとの二人はスーツではなく、作業着、もう一人は薄汚れたＴシャツとジーパンとゆるラフな格好だった。

グレインは不機嫌に言った。

「七分の遅刻だ」

「なら、ちゃんと非常階段の場所くらい教えろよ」

部屋は古ぼけてはいたが広がった。

何より天井が高い。床は寄木細工で綺麗な模様が施されていたし、壁は目が覚めるような青に塗られ、窓枠や柱は白く縁は金で装飾されている。窓も大きく、バルコニーまでであるらしい。

豪華と言つてよかつたが、手入れをしていないせい、あちらこちらに染みが見えるし、塗装は剥けている所が目立つ。

それに、グレイン達が用意した真新しい家具たち。

会議室にあるような簡素な机とパイプ椅子、シンプルすぎて武骨にすら見えるスタンド、仕事で使う為の端末。それらは、この部屋の内装には不似合いだった。

「今回は待機する時間が長いだろうから、おまえの部屋も用意した」

ガザを奥の部屋へと案内しながら、グレインはまた口を開いた。

「12区へ来たのは初めてか？」

「ああ、別に来る用事もないし、何があるってわけでもないだろう」

ガザの為に用意された部屋は一応掃除がされたのか、古いが気に障るほど汚れてはいない。

天井には前の住人が忘れていったのであろう、凝った形の照明がぶらさがっていたが、グレイン達が待機していた部屋と同じスタンドがあることから、これは使えなさそうだ。

あとの家具らしきものは、グレインが用意したらしい簡素なベッド、テーブルに椅子が一脚、リクライニングチェア、そしてテーブルの上に端末が二台、奇妙な形のヘッドギアがその一台に繋がっている。

ガザはベッドに腰を下ろし、グレインは向うように椅子に腰掛けると液晶パネルを手渡した。

「さっそく、本題だ。」

電警から依頼があつてこの仕事を引き受けたが、正直、乗り気はしない。

今回の任務の内容を簡単に言つとだ、現実世界ではない、バーチャルネットでのスキャンダルの後始末。  
馬鹿げた話だろう？

今度、議会に提出されるバーチャルネット規制法案を発案した派閥の議員の娘が、ウエンソー社のバーチャルセックスネットの顧客だったことが最近分かり、めんどろな事が起こる前に、その娘の『恋人』を消去して欲しいと、電警が我々に依頼してきた。  
この事がマスコミに知れると色々とかいひな事になり、法案可決の為にしなくてはいいけない事らしい。

気の毒な話だ。たかがバーチャルネットで睦みあつただけで、女が消去される。

しかも、法案可決で一番得をするのは、電警でも政府でもない。  
オシリスだ。

法案を提出する派閥の中心人物、ジョン・シーブリング上院議員がオシリスの血縁者だと言つのも周知の事実だしな。

まあ、見ての通り、シーブリング上院議員の娘がこのスキャンダルの発端だ。笑わせてくれるだろう？  
思いもしない火種を身内に抱え込んでいたわけだ。

ウェンウー社が急成長したのはバーチャルネットのおかげだ。オシリスのバーチャルネットは、ウェンウー社のシェアに負けている。

オシリスはウェンウー社の急成長が気に食わない。

ウェンウー社は極東の外資系の企業だということが、民主党を牛耳る右側の議員たちにとっても目障りだ。あちらの国と共和党は縁が深いからだ。

電警はバーチャルネットがらみの事件に頭を悩ませている。法案が可決されれば、電警は今までネックになっていた個人情報保護法も無視して権限を行使でき、バーチャルネットを取り締まりしやすくなる。

政治的な理由どうこうよりも、まあ私欲と保身のためにスキャンダルをもみ消したいと言うのが彼らの本音で、一応、彼らの利害は一致したらしい。

この法案を期に、政府とオシリスはウェンウーを徹底的に叩くだろうな」

ガザはパネルに映し出された情報を見つめながら、唇を歪ませた。

議会议案可決の為に邪魔な情報を知る人間の消去。権力者の醜聞を隠す為にその相手を消去。

それらは、誉められる行為ではないが、よくあることだ。現実の世界での話では。

今回は依頼内容と事件の関係者の情報が詳細に書かれていた。そこまで教えられることは滅多に無い。

「なるほどね。色々としららしい理由をつけているが、結局、この事が世間にばれて一番困るのは、上院議員だ。自分の娘の奇行を世間に曝したくないだけなんだろう。」

私的な理由で俺たちが利用される訳だ。あんたは、その上院議員の親心、それが気に入らないのかい？」

「幸いにも私には、こんな性癖をもつ娘がいないのでね。この上院議員の、いきすぎた親心は理解できない」

嘘つけ、とガザは思ったが、口には出さなかった。

グレインが気に入らないのは他に理由があるはずだ。

彼がもつと下らない理由で、仕事を回されても、愚痴なくこなしているのを、ガザは知っていた。

「しかし、今回は珍しいな。俺にこんな事まで知らせてもいいのか？」

「電警は自ら手を下すこともできたのに、我々に仕事を押しつけてきた。」

しかも、不用心にも通常回線で文書を送信してきた間抜けだ。

これぐらいの情報を流しても、罪にはならないだろう？」

ガザは液晶パネルの、スキャンダルが発端となった議員の娘の項目を押した。

名前はキアラ、彼女の現実の姿とバーチャルネットでの姿が画面に浮かび上がる。

バーチャルネットでの彼女の姿は、現実の顔立ちと酷似した男だった。



ガザは眉間に皺を寄せた。

「男になってアクセスしてるのか？この手のネットでは性別変えても何も感じないんだろう。意味が無いんじゃないのか？」

「さあ、私にはこのお嬢様の考えている事はわからんよ」

ガザは、ターゲット、議員の娘のバーチャルネットでの『恋人』のデータを画面に映し出し、ますます渋い顔をした。もう、ため息しか出ない。

「彼女も屈折してるな」

グレインは嫌味な笑いを口元に浮かべた。

ターゲットのプログラマーのネットでの姿は、彼女そのものだった。

しかし、現在の姿ではない。おそらく、十二、三才頃の姿だ。

「バーチャルネットは、非現実的な世界を楽しむ場所だ。人の趣味にとにかく言う資格は私たちにはないだろう？」

「確かに」

ガザは口ではそう言いながらも、何か見てはいけないものを見てしまったような気分させられた。

このターゲットの女は類をみないほど美しく、彼女のバーチャルネットでの姿は美少女と言っている。

しかし、何が嬉しくて、体が熟れていない子供の頃の自分に、セ

ツクスの味を染み渡らせたいと思うのか。相当に自虐的で屈折した女だ。

グレインはああはいつてるが、表情は下世話だ。

ゴシップでも読んでいるときと同じ気分でのだろう。

「俺はどうしたらいい？」

「ここから5件先のアパートマンにターゲットの部屋がある。仕事場兼自宅だ。

彼女がネットにアクセスした時を狙おうと思う」

「やり方は？」

「殺したあと、現金か何か金目の物を盗って来い。

お前がやったとゆう痕跡さえ残らなければ手段はなんでもいい。だがレイプはやめてくれ。後始末が面倒だ」

「そこまで悪趣味じゃない。それに俺ごときがどうこうしたって、満足するような女じゃないよ」

「お前が動きやすい武器を調達しよう。リクエストは？」

金品を取るのには、強盗の犯行に見せかける為なのだろう。

ガザは部屋の見取り図を見ながら、なんの武器がいいか考えた。

そのアパートマンに住んでいるのは彼女だけだった。この区は見ての通り治安が悪い。多少、音がしても大丈夫だろう。

「M29 - OS」

銃の型番をガザは告げた。妙に人気があり、どこにでも手に入る銃だった。

この銃は、二十世紀半ばに『最強の銃』と呼ばれたスミス&amp; m p・ウエッソン社のM29のデザインをオシリス社が真似て作った、いわゆる復刻版と称した模造品だが、デザイン以外はまったくのオシリスのオリジナルだ。

M29は車のエンジンすら貫通することができると風聞されていたが、それは威力のある弾丸を使った場合の話である。威力のある弾丸を使えば、その分の反動が大きくなり、実戦向きではなくなる。

しかし、技術は進歩するものだ。反動は減り実戦向けの銃となって発売された。

より強力な弾丸を使用する事も可能となっている。

「あいつものナイフ二本。左手の使用は？」

「左手はダメだ。この程度の仕事で使用する事は認められない。第一、あれは足がつく。」

相手は生身の女一人だ。何もサイボーグを相手にするわけじゃないんだぞ。

銃は威力が大きすぎるし、ナイフは余分じゃないのかね？」

「念のためだよ」

「用心深いな」

ガザは肝心な説明が抜けているのに気付き尋ねた。

「決行日は？」

「今日の夕方と言いたいところだが分かん。」

議員の娘が会う約束を一方的にしたが、ターゲットがアクセスするかどうかわからんのだよ。

明日かもしれないし、三日後かもしれない。

そのアパルトマンはアイシスが搭載されていないほどの旧式だ。バーチャルネットにターゲットがアクセスするのを確認したら、こちらから連絡しよう。

それまでここで待機していてくれ」

「もしアクセスしなかったら？」

「22:00までにアクセスしなかったら、23:00に仕事を開始する。」

「随分、いい加減な作戦だな。それでいいのか？」

「君を評価してるんだよ」

ガザは鼻で笑った。

「嘘つけ」

グレインは、ガザの生意気な態度に気を悪くする様子もなくそのまま話を続けた。

「それに、もし失敗してもだ、お前や私たちには責任はない。電警

の間抜けなヤツが通常回線で文書を送信してきた事のミスの方が重大だ」

失敗しても、いくらでも、言い逃れできるのだとグレインは言いたいのだろう。

ガザはグレインが、この仕事をあまりよく思っていない理由がなんとなく分かった。

おそらく、通常回線で依頼をしてきた電警の『間抜け』と知り合いであり、嫌いな人間の一人なのだろう。

「わざと失敗しろって意味にも聞こえるな」

グレインは渋い顔で念を押すように言った。

「何もそこまでは言っていない。電警に挙げ足を取られるような真似はするな。できうる限りの事はしろ」

ガザは一つ気になっていたことがあり尋ねた。

「それと、アレはなんだ？」

そう言いながら、テーブルの上の、ヘッドギアが繋がれた端末を指した。

「議員の娘が愛用する、バーチャルセックスネットの専用端末だ。どんな所か見てみたことはないか？ 運が良ければ恋い焦がれ『恋人』を待ち続ける、議員の『お嬢様』に会えるかもしれない。彼女が約束した場所はステージ07だ」

「不要だ。興味ない」

「一応、警告しておくが、あのネットで激しい運動をすると、頭痛の副作用がある。痛み止めも用意したが、程々にな」

「どうせ、この資材一式の請求、仕事を回してきた電警のディスクに回したんだろう？」

凶星だったらしく、グレインは笑った。

「お前は出勤命令があるまでここを出るな。二人待機させる。用件は彼等に頼め」

ガザと作業着とジーパンを残してグレイン達は部屋を出ていった。

### 第三章 3 ガザ

作業着の男が、ミネラルウォーターのボトルをガザに持ってきた。本音ならビールの方がよかったが、さすがに待機中にアルコールを飲むのはまずいだろう。

彼からそれを受け取ると、作業着は溜め息をつき気弱な口調で言った。

「さっき俺達の部屋に鼠が出たんだ。こんな所、早くおさらばしたい」

「駐屯地のキャンプに比べたら天国だ」

ガザは呆れた顔をしたが、作業着は気付かずに、ヘッドギアに目を止めた。

「アクセスしてみたのか？」

「まさか。あんなネット、悪趣味の極みじゃないか。それともあんたが替えの下着を買ってきてくれるのか？」

ガザの下品な冗談に男は顔をしかめた。

「それは勘弁してほしいな」

「でも、あのネットには興味があるわけだ」

作業着は照れたように笑った。

「そりゃあね。」

俺もアクセスしたことはないが、依存症になった奴の話だと、現実との見境がつかなくらいリアルで、現実よりも良い世界なんだとそれに、規制法案が可決されたら、このネットは無くなってしまuish、いい機会じゃないか」

「そんなにすごいのか？」

「セックスしなくても、一度アクセスしてみればいいじゃないか。感覚、嗅覚まで見事に再現されていて、例えるならリアルすぎる夢に近いんだそうだ。」

まあ、アクセスしたら、感想聞かせてくれよ」

男はそう言って部屋から出ていった。

ガザは、作業着とジープの部屋からとってきたゴシップ雑誌とスポーツ雑誌のページをパラパラとめくった。あまり面白そうではない。

そしてグレインが用意したヘッドギアに目を向けた。

確かに、興味が無いと言えば嘘になる。

現実よりもいい世界。それは確かに気になった。

ミネラルウォーターを一口飲み、煙草に火を点ける。一室に閉じ込められることが、こうも暇だとは思わなかった。

煙草をくわえながら、ベッドに寝転がり、窓に目をやる。



今日は嫌味なほど天気がいい。

机に置かれた、バーチャルネットの端末を起動すると、文字が浮かび上がった。

それは、ニルヴァーナについての説明だった。

ヘッドギアの他に、回線があり、それらをこめかみや、耳の下に張りつけてアクセスする。

最近流行りだした、端子をうなじに埋め込まなくても、リアルな仮想空間が楽しめるとうたっている。

ネットからアウトするときはパスワードを口にするだけでいい。もし何らかのトラブルでそれが出来なかった場合は強制切断のボタンがヘッドギアに取り付けてありそれを押せばログアウトすることができる。

アクセスするのにさほど難しい、技術がいるわけではないらしい。

別にセックスするわけじゃないし、アクセスするぐらいなら構わないか。

ガザは煙草を灰皿で揉み消すと、ヘッドギアに手を伸ばした。

ネットへの通信を開始すると、目の前の景色がゆっくりと溶けだすように歪み、ガザは目を閉じた。

目を開くと、あの部屋の風景ではなく、眩しいぐらいの白い空間がどこまでも広がっていた。

「いらっしやいませ、スミス様」

真っ白な空間に、無感情で抑揚のない女の声が響く。

スミスというあからさまな偽名はグレインが登録したものなのなの。  
のう。

「アクセスありがとうございます。」

当社のバーチャルネットへのアクセスは今回が初めてですね」

ガザは思わず、自分の掌を眺めた。

確かに、現実の感覚と差異はないが、妙な感覚だった。

まずはログアウトするときのパスワードを設定させられた。

それが終わると、白い空間に、自分の姿が、今の服装のまま浮かび上がる。

鏡で見るのではない、他人から見た自分の姿だ。

「変更なさいますか？」

変更するとは、容姿のことらしい。

「いや、このままでいい」

「現実の姿のままですと、ストーキングなどの被害や実生活への支障の確率が大きくなります。」

責任は当社で取れませんがよろしいですね？」

「ああ」

一通り、利用規約が説明された。

このネットでの禁止事項。あるステージ以外での強姦行為は規約違反で罰金、アクセス禁止になること。

ユーザー同士のトラブルは本人同士で解決すること、など。

あるステージ以外での強姦行為は禁止とゆうことは、強姦してもいいステージが存在するとゆうことだ。

女の声はステージの説明に入ろうとしたが、制止した。行くところは決まっていたのである。

「ステージ07に行きたいんだ」

今回の仕事の資料によると、議員の娘とプログラマーが明日会う約束をしているステージがそこらしい。

「承知いたしました。」

ステージ07はドレスコードがあります。お客さまの現在の服装ではアクセスできません。

服装を変更されますか？

なお、変更には追加料金が加算されます」

ガザは驚いた。バーチャルネットのくせに、ドレスコードとは。

「かまわない」

ガザの目の前に、服が幾多も吊されたスパンが浮かび上がった。その中から選べとゆうのだろう。

ガザはこういったことは苦手なのだ。そして面倒に思った。

「適当に選んでくれないか？」

果たして、そこまでマニュアルがプログラムされているのか疑問に思ったが、試しに言ってみた。すると目の前の自分の姿、黒のＴシャツに綿パンとゆうラフな格好から、仕立てのよい黒のスーツへと変わっていく。

女の声は値段を告げた。

現実でこのランクの服を買うよりは安いだろうが、存在しないものの値段にしては高い気がした。

しかし、会社は儲かるのだろう。

その商魂に半ば呆れながら感心して、自分のスーツ姿に違和感を感じ、暫く黙った。

「色やデザインを変えましょうか？それとも価格を下げますか？」

女の声が尋ねてくる。

まあ、いい。

アクセス料金を払うのは、自分ではない。

「これでいい」

ガザはあることを思い出し、尋ねた。

「ステージ07は強姦行為の許されるステージじゃないんだろうな？」

「ステージ07での強姦行為は規約違反になります。

強姦行為の許されるステージは19、21です。  
変更なさいますか？」

「ステージ07で」

いくら、バーチャルでも、そういうものはなるべく見たくなかった。

「初めて当社のバーチャルネットをご利用されるということです、ナビゲーターをつけます。

今回は初回ということで無料でサービスさせていただきます。

ナビゲーターと申しましても、わたくし同様、ネットにプログラミングされた擬似人格ですので、お客さまのプライバシーを侵害することはございません。

もし不要な場合は、その場でナビゲーターに言い付けていただければいいので、どうぞご利用ください。

では、ステージ07のアクセスを開始いたします。  
どうぞ、ごゆっくりお楽しみください」

女の声は相変わらず、抑揚に乏しく無感情だったが、お楽しみくださいという言葉だけが、妙に生々しく頭に響いた。

### 第三章 4 ガザ

目の前の白い景色が、テレビのチャンネルを変えたように、一瞬、砂嵐がノイズのように走り、ガザは思わず目を閉じた。

目を開くと、視界に広がったのは、コロニアル調の建物で、それを夜の闇がおおっている。

不必要に大きな扉に、着飾った人間達が吸い込まれていく。ぼんやりとそれを眺めていると、子供の声が響いた。

「スミス様いらっしやいませ。

初めてお目にかかります。ナビゲーターのユウガオA2と申します。よろしく願います」

その声の主の姿を見ると、ガザは思わずのけぞった。

目の前に立つ子供、ユウガオA2と名乗ったナビゲーターの性別は女なのだろうが、性徴のはっきりしない外見年令と奇抜な格好のせいで、気付くのに時間がかかった。

たつぷりとした黒髪を肩口ではっきりとそろえ、色彩感覚が混乱しそうな動きにくそうな服を着ている。

足首までの長さのシルクのバスローブをしっかりと着付けたような服で、白地に赤や朱色、紫、金、銀で草花の模様がびっしりと入り、前に結び目をもってきた帯は鮮やかな赤地に金の亀甲模様だった。けばけばしく、目が痛くなってくる。

靴はサンダルのようなもので、妙に底が厚く、かなり歩きにくそうだ。

それに、化粧。

凹凸の乏しい、モンゴロイドの、のっぺりとした細面の顔にほどこされた化粧はかなり奇抜だった。

白粉を顔だけでなく、首や服から覗く手足までも厚く塗り、眉毛はない。目尻に赤いラインを入れ、赤い口紅が上唇だけに本当のラインよりも控えめに塗られていた。

眉毛がないせいで、切れ長の目が際立ち、蛇のような印象をガザに植え付ける。

どうにも馴染めそうにない。

ガザが絶句していると、ユウガオA2はガザを見上げ微笑んだ。蛇が微笑んだらこんな顔をするのではないのだろうかとガザは思う。このナビゲーターは人間の形をしているが、まったく別の生き物のようだった。

「いかがされました？」

「なんなんだ。お前は」

「はい。私はユウガオA2。ナビゲーターです」

ガザは彼にしては丁寧な言葉を付け加えた。

「その格好は何だ」

「私は、昔のニッポンの遊廓にいたカムロをモデルに作られました。

」

「ユウカク？カムロ？」

「遊廓は簡単に言えば売春宿です。  
まだ客の相手ができない見習いのような子供をカム口と読んでいた  
ようです。」

ついでを言うのなら、私の名前は源氏物語の……」

「わかったもったいい」

「そうですか。では参りましょう」

ユウガオA2はガザの後ろに続き、二人は建物の中に入った。

ガザは建物に入るとエトランスを見回した。さっきの白い空間は  
目が痛かったが、ここは照明は幾分落としてあり、やわらかな印象  
だった。

扉同様、無駄に高い天井、細工の美しい柱や、飾られた絵画と花。  
そのどれもが豪華で洗練されている。

ドレスコードがあるのもうなずけたが、同時に居心地の悪さも感じ  
た。ガザは自分がある中にある異物のようなものに感じる。つまり、  
場違いなのだ。

こういう『高級』な場所は現実でも訪れたことがない。

微かだが、ピアノの音が耳に届いた。

ガザは曲名を知っていた。それをピアノでアレンジしたものだ。た  
流行音楽には疎かったが、クラシックはだけは多少は分かった。  
ガザが自ら興味を持って知識を貯えた訳ではなく、彼が興味を持  
った人間がクラシックが好きだったのだ。

しかし、それは懐かしむ思い出と言うより、むしろ苦いものだっ  
た。彼女とはもう七年も会っていない。



風の噂では結婚したらしい。ガザの元親友と。

「スミス様、何かご不満な点があるのですか？不快指数がわずかですがあがりました」

ユウガオA2が尋ねてきた。現実にはガザにとりつけられた、回線のおかげで、彼の脳波や血流の変化はナビゲーターに筒抜けらしい。

「この音楽がいやなんだ」

「では変えましょう。リクエストはございますか？」

「できれば音楽なんか流してくれなくてもいいんだけど。それができないなら、ジャズでも、糞みたいな流行歌でも、クラシック以外ならなんでもいい」

「承知いたしました」

ユウガオA2がそう答えると、耳に流れる音楽がぴたりと止んだ。

エトランスからロビーへ向かうと静かに談笑する声が聞こえた。

ロビーの天井は吹き抜けになっており、緩やかな曲線を描く二つの階段が鏡を合わせたようになっている。

猫脚の椅子とテーブル、ソファがいくつか置かれ人がまばらに座っていた。

腕を組んだ男女が、階段を上っていくのが見える。

このロビーで相手を見付け、上の階で目的を果たすのが、このステージのルールらしい。

先客達は、ガザを品定めするように目を向けた。  
ねっとりまとわりつくその視線に背中に寒気を感じる。

ガザは寒気を堪え、視線を向けた先客達の顔を見渡した。  
翡翠色のカクテルドレスを着た女が、艶やかに微笑みかけ、近寄っ  
てきたが視線をそらす。

女は気を悪くしたようで、耳元で囁いた。

「ペド野郎」

上品に着飾っているのに、発した言葉は不似合いに下品だった。  
ガザは驚いたが無視をした。それを見てユウガオA2が助言した。

「さっきのはよくありません」

「あの女が吐いた暴言が？」

「いいえ、スミス様の態度です。いくら気に入らないお客さまでも  
無視はよくありませんよ」

「じゃあどうしろと？」

「誘いをかけられたら丁寧にお断わりすればいいんです」

ガザはくだらないデートマニュアルを講義されているような気分  
になった。

彼が探しているのは、あの議員の娘と『少女』に戻ったプログラ  
マーだった。バーチャルセックスの相手を探しにきているわけでは

ない。

『少女』に関しては、アクセスしたとき、グレインが知らせる言っていたので、会える事はなさそうだが。

ガザはため息をついた。そして、自分に視線を向けなかった男を見つけた。

彼は議員の娘だ。

ガザはユウガオA2に言った。

「もうナビゲーターはいらない」

「わかりました。またご用があれば承ります」

ユウガオA2が行ってしまつと、ガザは『彼』に視線を戻した。

『彼』は壁ぎわのソファに座り込み、何かぼつと考えているように見えた。

ガザは適当に距離を置き、『彼』を観察する。

当然、あの『少女』は見当たらない。

『彼』は相手を探しているようには見えなかった。

ガザが観察している間、二人の女に話しかけられたのだが、見向きもしなかったからだ。

『彼』は話しかけられても面倒臭そうに受け答えるだけで、女達と視線を合わそうともしない。

『彼』は『少女』を待っているのだろう。

『彼』のくつろぎぶりは、堂に入ったものだった。

本人はおそらく気付いていないだろうが、他の客達は、いかにも慣れたように振る舞ってはいるが、尻が浮いて緊張しているようにも見える。

彼らは、おそらくガザと同じように、現実ではこんな豪華な場所には訪れた事がないのだ。

慣れない場所になると人間は緊張し、どうしても動きが堅くなったり、うかれすぎたりする。

しかし、彼女は、生まれてからずっとそういう物に囲まれてきたのだろう。違和感などどこにも感じてはいないようだった。

ここは差別的な場所だとガザは思った。

バーチャルネットで豪華に着飾り、高いアクセス料金を上乘せしてこのステージに来たとしても、トレーラー暮らしの現実の生活が、嫌でもにじみ出てくるのではないのだろうか。

そもそも贅沢というものの自体が、差別によって成り立っているのかもしれないが、このステージを作った人間はかなり嫌味な趣味の持ち主に違いない。

ガザは『彼』を暫く観察することに決め、室内の景色を眺めた。

そして、壁に絵画が何枚か飾られている事に気付いた。『彼』が座るソファの横に飾られているひととき大きな絵が特に目立つ。

照明が暗いのでどんな絵なのかは分からない。

ガザはその絵に近寄ったが、傍に人が来ても『彼』は何も反応がなかった。

見向きもしない。

ガザは自分に見向きもしない彼から油絵に視線を移した。そして、複雑な心境になった。

裸の女と白鳥の絵だ。

それだけなら、何も思わないが、女の股に白鳥が割り込んでいる。獣姦、しかも相手は鳥だ。悪趣味にも程がある。

いくら、ドレスコードがあり上品な内装や建物でも、ここがバーチャルセックスネットである事を嫌となぐらい思い知らされた。

ガザが渋い顔をして絵を眺めていると、『彼』が唐突に口を開いた。

「レダと白鳥」

『彼』は、ガザの様子を可笑しそうに見つめていた。

### 第三章 5 キアラ

キアラはぼんやりと天井を眺め、たまに聞こえる嬌声が忌々しく、無意識に舌打ちをした。

ここにあの少女が現われるという確証はない。それなのに、今日も懲りもせずアクセスする自分に腹が立つ一方、焦りと不安が頭をしめていた。

彼女は『少女』に聞かなくてはならないと思っていた。何故、自分の名前を知っていたのかということ。

一瞬、父を説得して、議会にバーチャルネット規制法案を提出をやめさせる事を思いついたが、その発想の幼稚さに自分でも呆れた。そんな我儘を言ったところで、どうすることもできないだろう。

ステージ07に昨日初めてアクセスしときは、その壮麗さに酔ったが、今ではそんな気分にはひたれそうにもない。ガレのガラス細工もなんの慰めにもならなかった。

今日も、何人かの人間に誘いをかけられたが、だんだんと相手にするのも、面倒になってきた。

ずっと壁ぎわのソファに座り、次々と入れ替わる人間達を見ながら、時間がすぎるのを、『少女』が現われるのを待っていたが、だんだんと情けない気分になってくる。

そろそろアウトしたほうがいいかもしれない。心のなかでそう呟

き、接続を切ろうか迷った。

その時、自分の右側に、人の気配を感じた。

相手をするのも面倒臭いと思いながら、ゆっくりと視線をそこに動かすと、一人の男が渋い顔をして、絵画を眺めていた。

何をやっているのだろう。まさか、ここまで来て絵画の鑑賞をしているのだろうか？

キアラは絵画に目を向けた。

レダと白鳥だ。

男は別に好色な眼差しを向けているのではなく、明らかに不快そうだった。キアラはその様子、ここでは場違いな反応を面白いと思った。

「レダと白鳥」

キアラがそう言うと言った男は驚いた様子でこちらを見た。

鋭い眼差しだった。

白人にしては色素が濃く、目鼻の彫りはそこまで深くない。

奇妙な調和とアンバランスさがあった。キセニアがクルスカ、もしくはカステイユあたりの混血なのだろう。

あちらは、連邦と違い、保守的な宗教のせいで民族の血が薄くなることをひどく嫌うので混血児は少ない。なので、連邦国内での混血児はめずらしくはないが、あちらで混血児が生まれるのは、キセニア戦争で連邦兵士が種を勝手に撒き散らした時のみだと言われる。それは、正当な結婚という手続きも、相手の了承すら得ずにそれを

行なう事だ。

彼は連邦出身なのだろうか。もしあちらからの帰化人だったと考えると、気分が悪くなってきた。

キアラは男性特有の暴力と傲慢さを心から憎んでいたからだ。

気分を持直し、キアラは言葉を続けた。

「レダと白鳥がモチーフなんだよ」

男は絵を眺め、また渋い顔をした。

「なんだって白鳥なんかと？」

この男はレダを知らないのだ。なら、分かるはずもない。

「座つたら？」

男に椅子をすすめると、彼はキアラの向かいに座った。

よく見ると、長身で、目障りなほどもついてないが、鍛え上げられた体がスーツの上からでも分かった。

目付きは悪いが、スタイルは悪くない。

ここはバーチャルネットであるし、付け加えた容姿なのかもしれないが。キアラは自分もこれぐらい筋肉を付けた方がよかったかな、と思った。

「ギリシア神話であるんだ。

多情な神……ゼウスがレダって娘に目を付けて、白鳥に化けてやつ



「ちやうんだよ」

男は砂を嚙んだような表情を見せ、唇を歪めた。

「節操がないな」

「そうだね。神様のやることじゃない。

それで生まれたのが、スパルタの王妃になったヘレナって事になってるんだけど」

「トロイの木馬の？」

男はトロイの木馬は知っていたようだ。トロイの王子パリスがヘレナを略奪した事で起こった戦争。

「そう」

「あれもなんだか変な話だよな」

男の言葉に、キアラは吹き出した。彼と話すことで気が紛れ、焦燥が少しだけおさまっていることに気付いた。

それに、この男と話をしていれば、他の人間から誘いをかけられることもないだろう。

他の連中から男色家と思われるかもしれないが、別にキアラは気にしなかった。

「確かにね。いくら稀にみる美女だとしても、たかが女一人を巡って戦争を起こすなんて、マッチョな考えだよ」

「マッチョ？」

「愛する女の為に戦争をするってゆうような話だろう？ 実際は違うね」

「じゃあ、あんたは何が理由だ？」

「男のくだらないプライドの問題さ。寝取られ男と間男の。そんなくだらないプライドの為にアキレスは死んだ。ヘレナは戦利品にすぎない」

混血の男は苦笑した。

「なるほどね。わかるけど、バリバリのフェミニストが言うような意見だ」

キアラは自嘲気味につぶやいた。

「フェミニスト？ やめてくれよ。胸が悪くなる。あれは主義でもなんでもない。ただのロマンティストだ」

キアラは知っていた。自分が男の傲慢さが嫌いで、フェミニストの気があることを。

自分が抱いているものが、主義でもなんでもない、成熟拒否の処女が描く妄想に近いロマンスなのということも。

女の権利などどうでもいいのかもしれない。

もしかしたら、自分は男に生まれたかったのかもしれない。男の持つ高慢さに嫉妬しているだけなのかもしれない。

キアラは道徳的な家庭で育ってきた。

それは正しいが、保守的で、開明的とは言えないものだった。

「女の子はこんな事しなくてもいい」

何度も聞かされてきた言葉だった。強要されたことはない。やんわりと付け加えられるのだ。

そして、『外』での不平等を知らないまま、『善』と『平等』こそが最後に勝つものだとか教え込まれてきた。幼く、大事に育てられてきたキアラはそれを疑いもしなかった。

模範的な家庭。ある種の類いの人間たちからは絶賛されそうな価値観だった。

結果、潔癖すぎて融通のきかない概念にとり憑かれた。

成長し外の社会にさらされると、幼少時代に教え込まれた善悪は、世間では建前に過ぎないものに感じられた。

頭の中では、その『建前』に疑問を感じているにも関わらず、『善』と『平等』が勝てない世界が許せない。

持ち前の頑固さのせいで寛容にもなれない。

大人になつてからは、自分が女だからという理由で、父と同じ道からそこから遠ざける両親や、父の本当の『仕事』の内容に対して不信の種を募らせている。

あなたが私に教え込んだ価値観はなんだったのか。そう詰りたかったが、それよりも、父や母を傷付けることの方が怖かった。

もしかしたら、自分がバーチャルネットで男になるのは、そういった鬱屈した欲望の捌け口なのかもしれないと思った。何故だかその考えに寒気を覚え、キアラは口を開いた。

「ここは初めて？」

「このネットに来ること事態初めてだ。あんたは？」

男の目は鋭かったが、ぎらついた性欲を感じなかったので、キアラは気を許した。疲れていたのだ。そういう目でなぶられることに。

「常連だよ。でも、このステージは昨日が初めて」

「まさか、バーチャルネットでドレスコードがあるとは思わなかった」

キアラは笑った。

「なんで、初めてなのに、こんな面倒なステージにアクセスしたんだ？」

「それは」

男は一瞬、言葉を飲んだ。キアラは不審に思ったが、そこまで詮索するのは不躰に思った。

話したくないならいいよ、と言おうとすると、男が皮肉げな表情を浮かべて、口を開いた。

「人探し」

キアラは他にもそういう連中がいることに驚いたが、男にはキアラが抱える焦燥のようなものを感じられなかった。

しかし、人探しにも色々とあるのだろう。

「あんたは？」

男は嫌味にさえ、見えるような笑みを浮かべて尋てくる。馬鹿にされているような気分になり、不愉快そうにキアラは答えた。

「似たようなものかな」

キアラはあの『少女』を思い描いた。

なぜ、彼女はある姿でアクセスしているのだろうか？

自分が、なぜ男としてアクセスしているのか。認めたくない事実を認識しようとした今になって、一つの疑問が沸き上がった。

「どんな奴なんだ？」

男は再び尋ねてきた。

見かけによらずしつこいことを聞いてくる。

「わかってるのは、もったいぶった女だってことだ。

本当に何も知らないんだ。なんで、自分がこうやって待ってるのかもね」

その時、キアラは気付いた。

私は彼女が何者なのかを知りたいのだ。

しかし、知ったところで何をしたいのだろう？  
現実の彼女に会い絶望したいのだろうか。

もしかしたら、本当は『少女』のことなんてどうでもいいのかもしれない。

さっき感じた寒気。

鬱屈した欲望の捌け口、自分がここで『男』である為に、あの『少女』というツールが必要なだけなのかもしれない。

また、自分が何をしたいのか分からなくなってきた。  
ただ漠然と分かったのは、彼女に会いたくて仕方がないとゆうことだけだ。

早くこの焦燥を取りのぞきたかった。  
それができなかったら、いつか、叫びだすに違いない。

キアラが急に俯いて黙ったせい、男もそれ以上は何も聞いていなかった。

ふと、キアラが顔を上げると男はキアラを見ているのではなく、別の所に視線を固め、驚いた様子で目を見開いていた。

探していた人が見つかったのと思い、彼の視線の先に目をやると、そこにはあの『少女』がいた。

キアラは男の存在を忘れ『少女』に駆け寄った。

『少女』はあの、不思議な笑みを浮かべる。

「なんで、ここに？」

「あなたこそ」

「決まってるじゃないか。君に会いに来たんだ」

『少女』はキアラの必死な様子を可笑しそうに見つめ、『彼』は思わず赤面する。

冷静になって考えると、何故、あの男は『少女』を見て視線を固まらせていたのだろう。

不思議に思い、その事を尋ねようと振り返ったが、男の姿はもうどこにも無かった。

### 第三章 6 ガザ

ガザは『彼』が黙って俯くを見て、少しだが哀れに思った。

たかがバーチャルネットで関係しただけの相手に、ここまで思いを寄せる事が出来るものなのだろうか。

理解はできないが、『彼』は『少女』を好きなのだろう。利用されていることも知らずに。

あまり、問い詰めるのも可哀相な気がして、『彼』から視線をそらした。

そして、思いがけないものを見たのだ。驚いて声を上げそうになった。

あの『少女』だ。

『少女』はこちらをじつと見つめていたのである。

グレインは、あのプログラマーがアクセスしたら、知らせると言っただけだ。

ガザが『少女』とネットで会えるわけはなかった。

なんで連絡してこないんだ？

目が合うと、『少女』は優しく微笑んだ。

その笑顔は外見年令に相応しいものではない。

『彼』が『少女』気付き、に駆け寄っていく。



ガザは『少女』の笑顔に緊張した。得体の知れないものを見ているような気分になった。

早くグレイン達に知らせなければいけない。

最初に設定させられた、アウトするときのパスワードを呟いた。

「5468974521」

反応がない。もう一度呟いてみたが、ガザはこの仮想空間にいたままだった。パスワードを間違えたのだろうか？いや、そんなはずはなかった。忘れるわけがない番号なのだ。

ガザはヘッドギアのこめかみ辺りにあるスイッチを手探りで探した。

ネットを強制終了させるためのスイッチだ。

多少頭痛がするらしいが仕方がない。

現実の手が動いているかどうか不安になったが、ボタンの感触を見付け、それを押すと、また景色が歪み、頭に鋭い痛みが走った。

### 第三章 7 キアラ

キアラは『少女』と二階の部屋に上がった。

キアラはあの男の事を聞きたかったが、実際に会うと何を話していいのかわからない。

二人は部屋に着くまで、何も喋らなかった。

部屋の内装も、あのホテルに似ている。

潇洒なスタンドが部屋を照らし、壁にはクリムトの水蛇が飾っていた。

キアラはクイーンサイズのベッドに腰掛け、窓を見る。  
ここはいつも夜だ。

『少女』は『彼』の前までくると、床に膝をついて、ズボンのジッパーを開け、中身を引っ張りだした。  
ゆっくりと舌を這わせる。

『彼』はもちろん何も感じない。

それでも『少女』は性器を口に含んだ。  
湿った音が部屋に響く。

『彼』が何も感じなくても、偽物の性器は膨張していく。

普段なら興奮したのだろう。しかし、今はそんな気分にはなれなかった。

「舐めなくていい」

『少女』は性器から口を放した。舌と性器が唾液の細い糸で結ばれている様はだらしなく、そして淫靡だった。

彼女は手を放すときに、『彼』の脚の間、正確には『ここ』では無い器官、キアラが削除した部分を撫でた。

『彼』は偽物の性器をしまいジッパーを上げた。

「じゃあ何をするの？」

「君の言う『現実的』な話し」

「どうしちゃったの？昨日からなんだか変よ」

僕は、と言いかけてキアラは、言葉を飲んだ。

「私はここで二回以上関係を続けた相手はいなかった」

「知ってる」

「君は違った」

『少女』は急に俯いた。

「知ってる」

「でも、私は君の名前も知らない」

彼女は、キアラの唇に人差し指をあてた。

「頼むからそれ以上言わないで」

「だって私は……」

「知ってる」

彼女はキアラの隣に座った。

「全部知ってたわ。」

名前も姓も、性別も知ってる。

何処に住んでるか、父親が誰か、もうすぐ結婚することも知ってる」

キアラは眉をしかめた。

「全部お見通しって訳？なんで知ってるの？」

「ごめんなさい。それは言えない」

キアラは悲しくなった。

何故、彼女が自分の現実の姿を知っているのかとか、そういう事が悲しいのではない。

別に彼女が何者でも良かったのだ。

彼女にいずれ会えなくなること、その手がかりさえ教えてもらえないことが悲しかった。

「君の名前も聞いちゃ駄目なの？」

彼女は笑顔を向けたが、それは見たことのない複雑な表情だった。

とても寂しそうに見えたからだ。

「昔の映画で、こういうのがあったわ。

ある男が、女の子と出会う。

男は女の子と毎週日曜日にデート繰り返すの。

でも男は女の子の名前を知らない。男は彼女と会えるだけで幸せなのよ。

それで、ある日、男の誕生日がきて、女の子がプレゼントを贈るの。なんだと思う？」

「わからない」

「女の子の名前」

キアラは腹がたってきた。こんなにも自分は追い詰められているのに、『少女』はこの状況を楽しんでいるように感じたからだ。どんなに切なげな表情を作ろうと、激情に支配された人間は氣取った事など口にはできない。

「じゃあ、誕生日じゃないと名前は教えてもらえないんだ」

「そうね」

「でも、無理。

ネット規制法案が可決されたら、会えなくなる。

誕生日には間に合わない」

彼女は驚いて、目を見開いた。

「知ってたの？」

「昨日知った」

彼女は困ったような表情を浮かべしばらく黙った。

「それで焦っているの？」

キアラは溜め息を吐いて、顔を両手で覆った。

「それだけじゃない。なんだか怖い」

「何が怖いのか？私に会えなくなるのが怖いのか？」

「会えなくなるのは寂しいけど、私の中の君のポジションが怖い。今まではあなたに会えたらそれで満足していたのに、そこまであなたに執着した理由を考えたら怖くなってきた」

「冷静に自分の感情を解析しだすようになったら恋は終わりなのよ」

『少女』は少し寂しそうにそう言った。

彼女の言葉は、キアラに棘が刺さったような感覚を与えた。

「怖くなったのは、ここで私が『男』である為に、君に執着したような気がしてならないから」

「私に純粹に恋い焦がれたわけじゃないのが、あなたにはご不満なの？」

「そう。なんだか、すごく惨めな気持ちになる」

「随分と幸せな環境に育ったのね。お父様とお母様は……そう、純粹に恋して、純粹に愛し合っているとでも？」

「わからないけど、私の目にはそう見えるわ」

「そんな事、当の本人達にしか分からないわよ」

キアラは黙った。確かにそうだったからだ。

「私をあなたが必要としてくれたのなら、私はそれで充分なの。理由なんて関係ないわ」

「どんな理由だろうと？」

「ええ」

「私はあなたに何もしてあげてないのに」

「もう大人なのに、随分子供みたいな事を言うのね。私は満足してるのよ。色々だね」

『少女』は笑った。何がおかしいのか。その先は言わない。

「そこまで言ってくれるのに、名前は教えてくれないんだ」

「だってあなたに危険が及ぶもの」

「理由も答えられない？」

彼女はキアラの唇を噛むようにキスした。そして瞳を覗き込んで囁く。

「私は、あなたを見込んでる。  
あなたが好きよ。」

欲望に正直で、屈折してて、現実が満たされていないところも」

キアラは、赤面した。

そして、こんな恥ずかしい事を平気で言えることに感心した。

「ちつとも、誉めてるように聞こえない。」

それに、すごく可哀相な人間みたいじゃないか」

「誉めてないわ。痛々しいからひかれたのよ」

彼女は相変わらず笑顔だ。キアラは不平そうな顔をした。

「痛々しいって」

「どうにかしてあげたいけど、本人がなんとかしない限り、救いようが無いって事よ。」

そそるでしょう。そういうの」

「わからないよ。そんな感覚」

彼女はキアラの肩に頭をもたれかけさせて、背中を宥めるように撫でた。

そして、意を決したように真剣な表情を浮かべた。

「あなたがロビーで喋っていた男が、おそらく私の命を狙ってくる」



キアラは顔を上げた。

「なんで、君の命を狙う必要があるんだよ？」

「詳しい事は、私の口からは喋れない。

私と現実で会いたい？」

現実の私はこんな姿じゃないわ。あなたより年上の女よ。それでも覚悟はできる？」

キアラはうなずいた。

「その覚悟があるなら、私の言う通りにできる？」

少しでも失敗したら、私は死ぬだろうし、あなたも、あなたのお父様もただでは済まない。

それでも、私に協力してくれる？」

キアラは黙って頷いた。もう頷く事しかできなかった。

### 第三章 8 ガザ

辺りは真っ暗だった。

そこに、ぽつんと誰がいる。

けばけばしい奇妙な格好。ナビゲーターのユウガオA2だった。

ガザは自分がまだ、この仮想空間にいたままだということに気が付き舌打ちをした。

ユウガオA2は目を見開き、大声で言い始めた。

「登録名スミス。……………以前のデータと照らし合わせ、それらしき人物の照合。……………該当なし。連邦市民管理局のIDと照合……………

……………IDの該当なし。

アクセス料金の請求は（有）テトラ社、住所09区通りM-21-803……………建築物なし、空き地。

不正アクセスと認識。規約違反の為、キキキキ強制アクセスセセセ切……………ダダダダ断ンンンではなくキキキキキキキキ強制ハハハハ排排排排ジジジジ除ヨヨヨヨとしますますますますです。オシオキオシオキオシオキオシオキ」

壊れた人形のように、顎をガクガクと揺らしながら、ユウガオA2は叫びながら、ガザにめがけて突進してきた。

ガザは咄嗟に身を翻し、ユウガオA2のタックルをかわす。ユウガオA2は足をもつれさせて派手に転んだ。地面に俯せに倒れ

たが、すぐに立ち上がり、歩きにくそうな靴を脱ぎ捨てると、懲りもせず、ガザに突進してくる。

ガザはまたユウガオA2を避けようとしたが、ユウガオA2はガザの動きを読んでいたかのように、ガザを突き飛ばし、馬乗りになると四つんばいになって動きを封じてきた。

ガザはユウガオA2から逃れようと抗ったが、子供の姿からは想像できない程の力でそれを封じこめようとする。

ユウガオA2の体の変化を見せはじめた。手足は伸びはじめ、胸と腰に重たげな肉がまとわり付く。切りそろえた髪が伸び、顔もモンゴロイドの細面から彫りの深いものへと変わっていく。

ガザはユウガオA2を見つめた。何処かで見た顔だと思った。

ユウガオA2は腕を伸ばし、ガザの首に両手を絡めると何の躊躇もなく締め上げ始めた。

ガザは抵抗しようとユウガオA2の顔を殴ったが、びくともしない。

やがて、ユウガオA2のぼやけていた輪郭がはっきりしだす。

虚ろな目、生気のないその顔。乱れた長い髪。

ギリギリと首を絞められ、霞んでいく視界にその顔が浮かび上がる。

その生涯に一度も自分を抱いてくれた事も、言葉をかけた事も、視界にすら入れようとしなかった、ガザを生んだ、ただ一人の女。

必死に抗いながらも、頭の片隅でこの女になら殺されてもいいかと、ガザは思った。

母親の顔をしたユウガオA2は苦し気なガザを眺めて満足気に微笑む。

これは母さんではない。

母親は一度たりともガザに向かって微笑んだ事がなかったのだから。

ガザは余っただけの力をふり絞って、ユウガオA2の腹を蹴った。ユウガオA2の体がガザから離れる。

「いい趣味してるよ。お前は」

ここにはいない女に向かって、ガザは荒い息をしながら呟く。

こんなことをできるのは、一人しかいないだろう。

あの『少女』だ。

息を整えながら、ユウガオA2から距離を取った。

当たり前の話だが、ガザは丸腰である。左腕が使えないかと一瞬思ったが、ここは『現実』ではない。

あの『少女』の作り出した仮想空間だ。

この趣味の悪い悪夢にいつまで付き合わなくてはいけないかと思うと、背中に冷たいものがつつたう。

何処かで聞いた事のある音楽が耳に流れ始めた。

亡き王女のためのパヴァーヌ。

あのステージ07で流れていた音楽。

思わず首を降った。もう勘弁してほしい。

ユウガオA2はいつの間にか母親の顔ではなかった。  
ガザのくいしばった唇から自然と言葉がこぼれる。

「……エメ」

彼女が好んでピアノで弾いた曲を聞きながら彼女の幻影を見たくはなかった。

昔のままの、柔らかい印象。いつも見せた、はにかむような笑顔、遠くを見つめるような潤んだ瞳は、今も色を映さないままなのだろうかと漠然と思った。

ガザの感傷をかきたてる姿をしたまま、ユウガオA2は手にサーベルを持つ。

ガザが息を飲む間もなく、右足に向かってそれをふった。

軽くさわったただけだと思ったサーベルは、皮膚に触れたとたん鋭い刃のまま膨張し、ガザの足にのめりこむ。

肉に入り込む冷たい異物を感じたのはほんの一瞬だけだった。

激痛が走り、血を吹き上げながら、左足も連れに骨まで切断された。

当然の事ながら立っていられるはずはなく、地面に仰向けにガザは倒れた。

しかし、痛みに呻きながらも、冷静になりつつあった。

それは、ここでの痛覚を知って安心したからだ。

これは本物の痛みではない。

仮想空間での疑似体験であることは百も承知しているが、現実のものと思えばかなり柔な痛みだった。

ガザは体の部位を失う痛みを知っていた。

「来るなら来いよ。次は何だ？」

ガザはユウガオA2ではなく、天を仰ぎながら言った。  
ここを盗み見ているであろうあの女に。

白い光の粒子のようなものが天から降り注ぎ、それがそれが人の形に集まる。

やっと出てきたか。

天使か女神でも気取っているのだろうか。  
ガザはその光を睨んだ。

### 第三章 9 ガザ

「お気に召してもらえたかしら」

サラは両足を切断されたガザに微笑んだ。

ガザは何も答えず、目の前にあらわれた女を睨む。

「意外に平気なのね。もつと苦しんでるかと期待したんだけど」

ガザが殺す予定の女は、バーチャルネットでの少女の姿ではなく現実の彼女の姿だった。

綺麗な女だったが、嫌なビジョンを見せ、自分の足を切断した女に好意はわかなかった。

失われた足の部分に白い粒子が集まり、足が再構築されていく。

嘘のように痛みが消え、失われた足の感覚が戻ってくる。

痛みはなくなったが、気分が悪い事に変わりはない。

ひどい冗談だ。

足が復元されたのは、偶然でもバグでもなく、目の前にいる女がもとに戻したのだ。

その証拠に女は驚きも動揺もしていない。ただ静かに微笑んでいる。女はガザにどんな感覚でも与える事ができるのだろう。

「気に入りはしないが、体の一部を失う痛みってのはこんなものじゃない」

「わざとよ。」

現実以上の痛みを味あわせてあげる事もできるわ。

でもそれをやると気が狂ってしまったり、誤って舌を嚙んで死んでしまう事があるの。

今、あなたに死なれたら困るもの」

「あんたはどうやら、俺の正体を知ってるようだな」

「電警が通常回線で文書を送ってくれたお陰で、あなたが何なのかは、だいたい分かったわ。

さすがは世界を牛耳る連邦政府。物騒な組織は、何も公表されているものだけとは限らないのね。

貴方達の前じゃ、あの悪名高い陸軍13部隊も霞んで見えるわ」

まるで他愛のない世間話でもするような口調で女は言った。

「俺を生かしておいて何の特になるんだ」

サラは長い髪を指で遊びながらガザにゆっくりと近づく。

「そうね。あなたを死なない程度に痛めつけて、そのまま閉じ込めておけばよかったのかもしれない」

ぞつとするほど、甘く優しい声で女は言った。

「あのニルヴァーナとか言うバーチャルネットや、あんたの考える事、屈折したレズの趣味はまったく理解できないが、あんたがどんな女かは大体わかったよ」

足が復元されても、地面に座り込んだままのガザに視線を合わせるように、サラは跪いて顔を覗き込んだ。



「ぜひ聞かせて欲しいわ」

ガザの頬に触れ、指の背で撫でながらサラは言った。

内心どう思っているのかは知らないが、まるで愛猫の喉でも撫でるような手つきに、ガザは手から離れるように顔を背けた。

「まず男が嫌いだ」

サラはガザを馬鹿にするように吹き出した。

「そんなつまらない事？」

随分、お粗末な思考回路ね。私がキアラが女だって承知してて、寝たからそう言ってるの？

他に分かったことはないのかしら」

サラはガザをせせら笑ったが、ガザも皮肉な笑みを口元に浮かべた。

「あんたは生まれが卑しい」

サラの顔から笑いは消え、ガザの頬を撫でていた指も動きを止めた。

「あのステージ07は、あんたのコンプレックスの表れだ。

本当の金持ちはああいったものに、感嘆こそすれ執着したり、誇示しようとはしない。

あんたのお相手の議員の娘みたいに、生まれた時からそういうものに囲まれて育ってるんだ。誇示したってしょうがないだろう。それ

が当たり前場所だし、そうだったものが日常の生活にあるわけだから。

自分の美意識や持っているものを誇示したがるのは、コンプレックスに捕われた成金か貧乏人だけだ」

ガザは頬にそえられたまま動かなくなったサラの手を振り払った。

「あんたの生まれは、わびしくて綺麗なものなんてない、貧しい所なんだろう？」

運よく綺麗に生まれたあんたは、精一杯男をたぶらかして、ステージ07みたいな、豪華で差別的な場所に連れていってもらったんだろう。

豪華な内装、着飾った金持ち達。あんたは馬鹿みたいに口をあけてまわりを見渡す。

夢でも見ているような気分になったはずだ。当たり前だ。

そんな場所が、この世あることすら知らない程の貧乏人だったんだから」

一気に話し、ガザはサラの凍り付いた顔を眺めた。

当てずっぽうで、思いついた事を口走っただけだが、的は獲ていたらしい。

生まれが卑しい、貧乏人と言われ、怒らない人間は少ない。普通ならそこで怒りだすはずだったが、サラは顔色こそ失っているものの、激昂する様子も、怒りを押さえている様子もなかった。

ガザはもう一押し、彼女が傷つくような言葉を吐いてみることにした。

「あんたに贅沢と差別的な場所を教えた男が、男嫌いの原因なら傑作だね」

ガザの感情を逆撫でするような言葉にサラは何も反応しなかったが、一つため息をついて口を開いた。

「今、私が何考えてるかわかるかしら」

「わからない。怒る以外は考えてなかったから」

「もしかして怒らせたかったの？だとしたら、あなた、恐いもの知らずなのね。私はあなたをどうすることだってできるのよ。」

確かにあなたの体に異変が起きたら、現実にいる仲間が気付くだろうけど。

それに、あたなの所属している組織では、末端の構成員にも尋問の仕方を教えるのかしら」

「まさか。あそこはそこまでしちゃくれないさ。」

あんたの反応には拍子抜けしたけどね」

「坊や、舐めてもらっては困るわ。あなたとは踏んできた場数が違うわ」

サラはガザの首に腕を回し、目を覗き込んできた。しなだれかかるように柔らかい女の体を押しつけ、鼻が触れ合うほど顔を近付けた。

「私が思った事はね、現実の生身の男が欲しくなったの。こんな気持ちになるは、久しぶりだわ」

なんとも生々しい言いようだが、期待していいような意味でないのは確かだ。

サラは甘えるように体をガザにもたれかけてはいるが、熱に浮かされた様子もなく、表情は恐ろしく冷たかった。

冷静に淡々と言葉を紡ぎだすだけだ。

表情には出さないが、腸が煮えるような思いをしたのだろう。冷静に怒っている。

彼女はあえて、重要な言葉を言わなかった。

欲しくなったのは、いたぶりたい現実の生身の男だ。

できるものならやってみるとガザは思ったが、口には出さなかった。

「私もあなたを舐めてかかっていたみたい。でも合格よ。今から解放してあげる。」

しばらくは動けないでしょうが、現実で私を殺しにいらっしやい。殺せるものなら殺してごらんなさいな。

こうやって出会えたのも何かの縁でしょうし、お互い楽しみましよう。可愛がつてあげるわ」

サラはガザの額に軽くキスをした。サラの凍り付いた表情は氷が

溶けるように消え、微笑んだ。からかうように付け加えた。

「ねえ、エメって娘は、あなたにとってどんな女だったの？」

ガザは血が逆流するような怒りを覚えた。

彼女はステージ07で見せた曖昧な微笑みを浮かべたままだ。聖女の彫像にも似て、清らかな造形そのものだが、自虐的なセックスに溺れる女に相応しく、中には猥雑で汚らしいものが詰まっている。

この女はちつとも堪えてなどいないのだ。自分の表情も仮面を変えるように、変化させるだけの余裕がまだあり、ガザの傷を抉る隙を伺っていた。

人になじられることも、馬鹿にされることも慣れきっている。ガザに言われた事などたいした事ではないのだ。

思わず、彼女の手首を強く握ろうとしたが、掴む事はできなかった。ガザの指は彼女の手首を擦り抜け、虚しく自分の手を握り締めただけだった。

それを合図に暗闇に溶け込むようにサラは消えた。彼女が完全に消えてしまった瞬間、景色が変わる。

瞬きする間もなく、目に映ったのは、あの黒い空間ではなく、染みが目立つクリーム色の天井と、そこから釣り下げられた、ぐねぐねとした円を組み合わせて作ったガラスの照明器具だった。

それが、自分が現実の世界の景色だと気付くのに数秒かったが、

現実に戻れた感覚を堪能する間もなく、嘔吐感が込み上げ、ガザはヘッドギアをむしり取るように外し、咄嗟に窓を開け、嘔吐した。間を置いて嘔吐した物が地面に落ちる音を耳にし、ぜいぜいと肩で息をする。

胃の中のものを全て吐き出したが、吐き気は治まりそうにない。

最悪な気分だった。頭痛もひどい。

「あの女、絶対に殺してやる」

ガザは物騒な言葉を呟き、荒い呼吸のまま、グレインの用意した痛み止めを噛み砕いて飲み込んだ。

### 第三章 10 ガザ

ガザはグレインの部下たちのいる部屋、リビングのドアを乱暴に叩いた。のろのろとドアが開くのが待ちきれず、強引にノブを引く。ドアを開けた作業着の男が咎めるように言った。

「部屋から勝手に出るなよ」

「それどころじゃない。」

ターゲットがニルヴァーナにアクセスしていた。グレインからの連絡は？」

作業着はだらけていた顔を急に引き締めた。

「いや、まだだ」

ジーパンの男はあわてて携帯電話を出し、グレインと連絡を取り始めた。

「見間違いないんだろうな」

作業着は疑うような顔をしながら、ガザを部屋にいれると手袋をはめ、同じ物をガザに投げてよこす。武器のチェックをしろということらしい。

「確かに、あの女だったぞ」

ガザは手袋をはめ、作業着から銃を受け取り、薬室とグリップをチェックする。そして、弾丸を選びながら考えた。

グレインの話ではオートマタは配備されていないとのことだったが、グレイン達はあの女がニルヴァーナにアクセスしたことに気付かなかった。彼女にとっては、情報を上書きすることもなど造作もない事かもしれない。

もし、カスタムされたチタン合金のオートマタがいたとしたら、こんな軽装備でかなうわけがない。せめてサブマシンガンぐらいは欲しかったが、グレインがそこまでの装備を用意してくれるかは微妙だった。

ガザは考えをめぐらせ、作業着の男に尋ねた。

「ワームの用意は？」

ワームとは、釣具や爬虫類の生き餌にされる環虫類の事ではなく、特殊な弾丸の名称だった。

人間に向けて撃つものではなく、ハッキングや、電気回線をダウンさせる為に使うものだ。

壁などに打ち込むと、弾丸から長い金属性のワイヤーが伸び、回線を探しあて、それに無理矢理つながる。

そのワイヤーの動きが環形動物に似ている事からワームと名付けられた。

ワーム単体では、ただの銅線か通信に使うケーブルかを見極めることはできないが、何発か打ち込み、その一つが回線に繋がれば、そこから遠隔でネットワークを干渉できるように作られている。



「ワーム？そんな物の用意はしてない。それに、今回はハッキングはしないって……」

「ワームは他にも使い道があるだろう」

ガザの言葉に作業着は息を飲んだ。

ワームは被弾すると、金属性の回線を探すワイヤーが中に伸びる。そのワイヤーは色々なサイズのものがあるが、金属性で柔なものではない。

生身の人間にそれを使い、運悪く貫通しなかった場合、ワームはありもしない金属性の回線を探し続け、肉と内臓を突き破る。ワイヤーは金属性の回線を見つけない限り、動きを止めない。

「お前、悪趣味だな」

ワームの悪趣味な応用は、連邦軍の兵士が、ゲリラにわざと撃った事で問題にもなった。

「あの女に使うなんて言っていないだろう。」

もしかしたら、オートマタがいるかもしれない」

「あの銃なら、オートマタをやるには充分だろ。わざわざ遠隔操作でダウンさせる必要もない」

ガザは作業着の察しの悪さに舌打ちしたくなった。ワームは他の使い道もあるとガザは言ったのだ。何も遠隔操作でハッキングしろとは言っていない。

「通常のオートマタならな」

頭痛はまだ治まらず、ガゼはまた痛み止めを噛み砕き、水で流しこんだ。

「軍用のオートマタのカスタムモデルが闇で出回ってる。12区はそういうものが仕入れやすい場所なんだろう？」

ワームはあの糞みたいな銃でもつめこめれるようなものまで出る。それに体張るのは俺だ。

ワームぐらい用意できるだろう？」

作業着は根負けしたようにため息をついた。

「わかった。用意する。くれぐれも人間には撃つなよ」

ジーパンが、携帯を突き付ける。

グレインと繋がったらしい。

「どういふことだ？」

グレインの声には焦りを感じた。

「こっちが聞きたい。さつきステージ07で『会った』。

あの女、議員の娘に会いにきたとかほざいてたが、散々な目にあわされた。

俺達のことも知ってる。あの女が俺にそう言った」

「しかし、ターゲットはまだ、アクセスしていない」

「電警は通常回線で依頼文書を送ってきたんだよな？あの女はそれで俺たちの事に気付いたとも言ってた」

グレインは舌打ちした。

「トレバーめ。」

あの女に、情報が漏れていたとゆうわけか。そうになると、あのプログラマーに一杯食わされたな。

とりあえず、本人かどうか調べる。

確認でき次第、連絡する。お前はあらゆる事態に備えてここで待機するように」

「すぐにも行ったほうがいいんじゃないのか？」

「もしかしたら、私たちの情報が世間に流されているかもしれない。待機だ」

グレインは、マスコミとプログラマーの詳細、ウェンウー社の動きを調べるつもりなのだろう。

もしかしたら、任務の内容も変わるかもしれない。

しかし、慎重すぎるのではないのだろうか。

グレインには彼なりの考えがあるのだろう。

それに上官だ。ガザは手足にすぎなかった。従っしかない。

「了解」

簡単な仕事だと思っていたが、あの得体の知れない女は、なかなか梃子搦らせてくれそうだ。

ガザはこういった緊張感と刺激、変化が好きだった。無意識に口角が上がっていた。

窓の景色を眺めると、すでに空は赤く染まっていた。

### 第三章 11 ガザ

グレインから連絡があったのは一時間近くたった後のことだった。もう、日は沈み切りはすっかり暗くなっていた。

「やっと、特定できた。彼女だ」

「どういう仕掛けだったんだ？」

「複雑に識別コードとアクセス場所を書き変えていた」

「ごく丁寧なこつて」

「彼女はおそらく、自宅から、ネットに潜っている」

「おそらくってどういう事だよ」

「彼女の住むアパートマンはかなり古い。セキュリティも旧式だ。それにアイシスが機能していない」

「もしかしたら、そこに居ないって言う事か？」

「そうだ。」

だが、いくら、12区でも道には警備システムが作動している。彼女は朝に一度外出してからは道に一步もでてない。

しかし、相手はプログラマーだ。もしかしたら、アイシスをハッキングしたのかもしれない」

グレインの口調は重かった。

考えすぎじゃないのか？

と、ガザは思ったが、口には出さなかった。

「俺は何をすればいいんだ」

「予定どおりだ。彼女がいれば殺せ。居なければ連絡を。」

それと、ウェンウー社も、マスコミも何も動いていない。

情報は何も漏れていないようだ。ターゲットが何を考えているか分からない。

実力も未知数だ。臨機応変に頼む」

「それなら、サブマシンガンぐらい用意して欲しい」

「場所を考えろ。いくら12区とはいえ、こんな人の目があるところで、マシンガンの使用を許可するわけにはいかない。

ワームの調達を頼んだのだろうか？それ用の銃を用意した。ワームもしオートマタにうまく被弾させることができれば、こちらでも動きを止めれるような準備をしておく」

「実に頼もしいことで」

ガザは嫌味を言ったが、グレインはそれには答えず、すぐに通信を切った。おそらく、ワームの遠隔操作をさせる準備にとりかかったのだろう。

余計な気遣いをせず、せめてOS46      愛用するオシリス社製  
ブラスターを頼んでおけばよかったと後悔した。あれならカスタム  
されたオートマタが相手でもなんとかできた。

ガザはとっくに彼女は逃げているのではないかと思った。自分な

らそうするだろう。

念の為に、衣服の下に防弾の為のスーツを着て、アーミーナイフとM29の模造品を隠し持った。用意されたワームとそれ用の銃の説明を作業着がし始めた。

「ワームの弾は用意された銃で使えるぎりぎりの大きさのものも考えたが、濫用するとフレームが壊れる可能性がある。

安全性を考えると、どうしてもワイヤーが細くなるが、これが精一杯だ」

ガザは作業着が用意したワームに舌打ちしたくなった。この弾では、ワイヤーの太さはせいぜい5ミリ程度だ。だが、文句ばかりも言っていられない。

与えられた武器で任務をこなすのも仕事だからだ。

ガザは非常階段を降りて、ターゲットのアパルトマンへと足を向けた。

### 第三章 12 ガザ

ターゲットのアパルトマンに着くと、用意された鍵で玄関のロックを開けた。

確かに古かったがグレイン達が用意したマンションに比べれば、手入れは行き届いていた。

監視カメラが規則どおりに動き、ガザを映す。  
アイシスでなければ、データーの消去は容易い事なので、グレインは後でそうするつもりなのだろう。  
ガザは気にしなかった。

エレベーターを使わずに、階段からターゲットが居住区として使っているフロア、5階へと目指し、耳を澄まして急いだ。  
ガザの足音だけが、階段に響く。

ターゲットの根城、その入り口まで来ると、扉に爆発物がしかけられていないか探知機を使って調べる。何も反応はなかった。声紋認証の鍵は、グレインが用意した、カードキーを通しただけで、鍵が開く。

ここの鍵は、オーダーメイドでも、特別製でもなく、市販の誰でも手に入るものだった。

ただの空き巣なら、この手の鍵を開けるのは、大仕事なのだろうが、ガザの所属するこちらは違う。

何せ、バックに政府と「オシリス社」がついた、国家の犬なのだ。市販の鍵などものともしなかった。



この階はターゲットの住居用のフロアであるらしい。  
玄関ホールは照明が付けっ放しだった。

部屋に入った瞬間、何者かが襲ってくるかと期待していたが、人の気配はまるで感じられない。  
期待は裏切られたのかもしれない。

あの情報を知っておいて、女一人で立ち向かってくるとは思えなかった。

いたとしても、素人の女一人だ。

グレインの逆探が正しければ、眠るようにネットにアクセスしているだろうし、たとえアクセスしていなくても、それは赤子の手を捻るように簡単な作業に違いない。

それでも一応警戒しながらまわりを見渡した。

建物自体は古かったがこのフロアはそんなことを感じさせなかった。豪華と言っている。

図面でも見たが、一人で住むのには贅沢なほどのスペースを取っている。

全体的に落ち着いた雰囲気。柔らかな照明、瀟洒な花瓶や小物には、女性らしい細やかな心使いが感じられた。

玄関ホールの大理石の床、ペルシャ絨毯やマホガニーや紫檀の家具らは高級感を漂わせており、グレインの用意した部屋と違い、こ

この内装は手入れも行き届いている。

それら内装は、この区画には不似合いであり、彼女の給金には相応しい物だった。

こういった趣味の女が、何故、老朽化したアパートマンを根城にし、わざわざ、12区のような場所に住んでいるのか、ガザは不審に思った。

玄関ホールを警戒しながら抜け、ターゲットがいる部屋を探す。

壁に背を這わせながら、リビング、キッチン、バスルーム、寝室、書斎、クローゼットの中まで詳細に調べたが、そこには何もなかった。

事前に見た室内の図面によれば、階下にある、ニルヴァーナのオフィスは居住フロアと室内が階段で繋がっている。そこへ向かうと、廊下に出た時、階段から足音が聞こえた。

ガザは床に直接置かれた大きな花瓶の影に身を隠し、様子を伺った。

「早急にこの場から立ち去ってください。警察に通報します」

鈴を転がしたような。そう表現するのが似合う女の声が響いた。あのプログラマーの声ではない。

ガザは声の主を見た。

整った顔立ちをした女だった。

どこか幼い顔立ちだが、胸は見事に膨らみ、腰は絞ったように細い。見事なスタイル。

身に付けている服は、黒いミニのワンピースにフリルのついた白いエプロン。

ミニスカートから白いニーソックスをはいた長く形のいい脚が伸びていた。

メイドスタイルと言うべきなのだろうが、正当なメイドと言うよりは、男が好きそうな格好だった。

絵に書いたように整いすぎた容貌と、その瞬きをしない目。光を受けて一瞬だが赤く光った瞳で、生身の人間ではなく、オートマタ自動人形 だと言うことが分かった。

光を受けて瞳が赤く光るのは、オートマタである決定的な証拠だった。出るもが出たかとガザは思う。

メイドスタイルのオートマタはまた告げた。

「早急にこの場から立ち去ってください。警察に通報します」

機械とは思えないほど滑らかな口調だったが、バリエーションの乏しさを感じずにはいられない。

ガザは素早くM29を構え、近づいて来るオートマタの眉間に向けてトリガーを引いた。乾いた音が部屋に響く。

ガザの放った弾丸はオートマタの人工皮膚を突き破り、リアルに

血色を良く見せるための赤い皮下循環液が吹き出た。

額から血のような皮下循環液が綺麗な顔を汚したが、オートマタは無表情に頭を後ろに傾けただけだった。

弾丸は貫通してはいなかった。

人間で置き換えるなら骨 中の精密機械を保護するためのものでもある金属製の装甲骨。

それに僅かにのめりこんでいるだけだ。ガザは舌打ちした。

また、オートマタの顔に向けて引き金を引く。今度は右目に目掛けて。

アイカメラが壊れてくれればいいとガザは思ったが、それは淡い期待にすぎなかった。

アイカメラは依然として赤く光を放ったままで、オートマタは上半身のバランスを崩したただけだった。足を進める事はやめなかった。

「銃器を床に置いて、両手を上げ、壁に向かってください。従わない場合は強制的に排除します」

相変わらず、可愛らしい声でオートマタはそう告げる。

「そりゃ、聞けないね」

答えが返ってこない事は分かっている。

そもそも、この人形は言葉を理解することができているのだろうか。

それはプログラミングされている行動パターンの事ではない。人間の形を模したこの自動人形のAIは、人間のように「理解」できているのだろうか。

馬鹿げた疑問だとガザは、その疑問を頭の隅に追いやった。

オートマタはガザの言葉は「理解」しなくても、否定の『パターン』は読み取れたらしい。

強制的な排除の行動、ガザの頭部めがけて蹴りを入れてきた。ご丁寧にも短いスカートがめくれ白い下着が見える。

ガザは左腕でオートマタの攻撃をガードし、右手に持った銃をオートマタの頭部に撃つ。僅かにバランスを崩したオートマタの腹を力の限り蹴る。オートマタは床に転んだ。

愛玩用に見えるオートマタは、外見はそうでも、中身はカスタマイズされたものに違いない。

左腕は痛覚をオフにしているにも関わらず、骨が軋んだのが分かった。生身であつたら骨は砕けていたかもしれない。生身と機械の境目が痺れている。

オートマタの装甲骨は、おそらくガザの左腕と同じ材質のものだろう。

チタン合金か特殊セラミックか。

そんな事を考えながら、ガザは残っていた弾丸を全て、床に倒れたオートマタの顔面に打ち込んだ。

童顔の愛らしかった顔は、鼻が潰れ、人工皮膚がまばらに残っているだけで、赤い皮下循環液にまみれた装甲骨が黒光りしていた。もう人の顔には見えない。

いくら意思を持たない機械とは言え、それは人の形をしている。人工皮膚はリアルに作られているものだし、銃を撃つ度に吹き出る血のような皮下循環液、そこからはみ出る武骨な装甲骨。

まだ体の人工皮膚は残っているのではなやかな女の形は残したままだ。

後味が良いわけではない。

オートマタ専用の、一般にはリアルドールアイと呼ばれる眼球を再現したレジン、すっかり無くなっていたが赤く光るアイカメラは、まだ光を失ってはいなかった。

オートマタはガクガクと身体を痙攣させながら立ち上がろうとする。

早く動きを止めないと、危ないかもしれない。

ガザはそんな事を漠然と考えながら、装弾し、全ての弾丸を、立ち上がったオートマタの上半身に打ち込んだ。

一発では何も堪えなかったオートマタでも、立て続けに何発もの銃弾を浴びて、衝撃で床に倒れた。

吹き出した皮下循環液が高価な絨毯を汚す。

ガザはまたM29に装弾し、オートマタの顔に打ち尽くす。

装甲骨は依然として、ヒビすら入っていないが、その衝撃でメインとなる精密機械に多少のショックは与えられたらしく、わずかに四肢を痙攣させた。

その隙に、ガザはM29に装弾、ワームを構え、オートマタの右足の膝のあたりに撃った。

痙攣が治まり、ゆっくりとオートマタが立ち上がる。ガザは左足の付け根、首にワームを撃ち、また上半身にM29を撃つ。

オートマタはまた床に倒れ、また痙攣したが、先ほどとは様子が違う事にガザは気付いた。

オートマタは体を痙攣させたまま、立ち上がった。

ガザは嫌な予感がして、ワームを弾が続く限りオートマタの間接に撃つ。

オートマタの痙攣はいよいよ激しくなったが、それは精密機械の故障ではなかった。

幼い顔に不似合いだった豊満な胸が服もろとも弾け、装甲骨がむき出しになった。

続いて、足と腕の人工皮膚が弾けるように破れ、壁や床を赤黒く汚し、その滴はガザの頬までも汚す。

体の装甲骨を被う、無数の銀色の細い糸を見た瞬間、ガザの嫌な予感は、確信へと変わった。

一見、細い金属製の糸に見える物体は、ただの金属ではない。ガザがよく知るものだった。

体が成形する前に、動きを止めなければ、とてもかなう相手ではない。

間接にワームを打ち込み、顔面にM29を打ち続ける。その時ようやく、オートマタの左目が光を失った。

しかし、そんな、故障などものともしないように、徐々に銀色の細い糸が膨張しだした。

伸縮金属繊維。それに間違いなかった。ガザの左腕にも使われているものだった。

蜘蛛の糸をヒントに作り出されたこの繊維は、金属よりも衝撃に強く、柔軟性があり、しかも強靱であった。

そんなものをわざわざ施したオートマタなど、ガザが知る限り、一つしか無い。

「ビースト」

頬に伝う、油臭い皮下循環液を拳で拭いながら、ガザは思わず呟いた。



### 第三章 13 ガザ

何故、こんなものがここにあるのか。

ビーストとは俗称だった。

オシリス社製の悪趣味な兵器に、正式な商標や型番はあったが、ガザ達、末端の兵士は正式名称でこのオートマタを呼んだ事は無かった。

俗称ビーストは軍が保有しているオートマタの中でもずば抜けて凶暴なもので、現在、軍でも戦闘用のオートマタは戦場でも投入はされているが、あまり配備されていない。

何故なら、恐ろしくコストがかかるのだ。オートマタ一台で戦車が二台は買えると囁かれるほどだった。

生身の人間よりは頑丈にできてはいるが、機械は機械であり、融通がまったく効かない。AIに組み込まれた行動しかない。その行動は、味方の識別IDチップを持たない動く人間を、片っ端から攻撃する事だ。識別IDチップがなければ、民間人であるうが、味方であるうが、見境なく攻撃する。

ガザも何度か、このタイプのオートマタと戦場で行動した事があった。それは実験的な導入だった。部隊に多くても、一台か二台だが、それでもその戦力は圧倒的なものだった。

ある時、識別IDチップを腕に巻き付た兵士が、敵兵にブラスタ  
ーで腕を撃たれ、腕が吹っ飛んだ。

兵士の悲劇は腕を無くした事ではなく、無くした腕に識別IDチップを付けていた事だった。

腕と識別IDチップを無くした兵士は、自分を撃った敵兵もとモビーストに襲われて死んだ。

部隊にはビーストの動きを止めれるだけの装備があつたにも関わらず、指揮官はそれをしなかった。

兵士一人が死ぬことより、オートマター一台を壊す事の方が、重大な損失だからだ。コストは生身の人間の方が安い。

それを見た末端の兵士達は識別IDチップを腕に着けることをやめた。ガザを含めて。

オートマタの装甲骨を覆う伸縮金属繊維は膨張し続け、金属製の筋肉がまとわりついていく。

ガザはここにはいない、上官に向かって口を開いた。

「グレイン、オートマタだ。ビーストがいる。今、体を形成中だ。この装備じゃ持ちそうにない。左腕のロック解除を」

イヤフォンからグレインの声が聞こえる。

「了解した。解除まで少し時間がかかる。それまで持ちこたえろ」

「早くしろ！なんでこう、毎回毎回時間がかかるんだ」

ガザの左腕は作り物だった。

キセニアの駐屯地にいた時に生身は無くした。

軍の上層部は、ガザの功労を称えるようにして、機械の腕を贈与した。

正しくは、それは建前で、本音は新たな兵器の開発の為だったらしい。つまり、ガザは被験者だ。

しかし、軍上層部の思惑などガザには関係ない。オシリス社から派遣された技術者は、細かいオーダーを聞いてくれたし、ガザは満足している。例えば利用されようが、それが自分にとって有益なものなら、それでよかった。

しかし、生身以上の機能と運動能力を持った左腕だとしても、左腕の他は生身だった。

ビーストは人間よりも高い運動能力を誇り、しかも中枢AIを装甲骨、伸縮金属繊維でできた筋肉で覆った化け物である。

そんなものに半端に機械化した人間がまともに戦えるだろうか。だが現状よりはマシだ。今はありったけのワームを撃ち込む事に専念する他無かった。

いくらワームがうまく着弾しても、この細いワイヤーでは、装甲骨を突き破れるはずはなかったが、ガザが企んだ通り、ワイヤーは膨張する伸縮金属繊維の間を潜り抜けるように、装甲骨に絡まる。少しだが、動きを鈍らせる事ができる。

オートマタの装甲骨を覆う銀色の筋肉は完成し、オートマタは膝

をつき四つん這いになる。足が若干短くなって四足歩行の獣のような体型に変わった。

ビーストは、獣が濡れた体の水を切るように体をふるわせると、赤い皮下循環液が無数の滴となって壁を汚した。ビーストと呼ばれる通り、獣じみた動きだった。

もう、あのメイドスタイルの女の面影はどこにも無い。体は繊維の銀色の筋肉に覆われ、まるで豹のようだったが、顔の部分は赤黒い皮下循環液に濡れた装甲骨が剥き出しで、その装甲骨はというと人間の形を模していたときの名残そのまま、人間の頭蓋骨そのものである。銀色の猛獣の体に人間の頭蓋骨を戴く化け物。

片方だけ残ったアイカメラが不気味に光っていた。金属で出来た獣が、ガザを見つめ、口を開け閉めする。

カチカチと剥き出しのセラミック製の尖った歯が音を立てた。ガザはこのオートマタが自分を笑っているように見えた。左腕の口ツク解除はまだされない。無性に腹が立つ。グレインにも、このビーストにも、ここにいないサラにも。

「クソ、弾切れか」

ガザは舌打ちをして、撃ち尽くしたワームの銃をビーストに向かって投げつけた。銃はビーストの顔面に直撃し、音をたてて床に転がる。

ビーストはそれを踏みつけて壊しながら、ゆっくりと前進し、ガザににじりよろうとした。

ガザの放った無数のワームが、足の筋肉の隙間からあらわれ、ビ

ーストの足に薦のように絡みつき、床にもぐりこむ。

一瞬、動きを止めたかのように見えたが、足に絡まった草を振り払うように足を動かすだけで、音を立てながらそれは引きちぎられた。

ガザはビーストのアイカメラに向かってM29を撃ったが、それよりも早く、先程とは比べ物にならない勢いでビーストはガザに飛びかかった。

ガザはビーストをよけて転がり、ビーストは派手な音をたてて、大きな花瓶を壊した。

「グレイン、まだか！」

ガザはそこにいない上官に向かって叫んだ。

耳に着けたイヤフォンから、グレインの声が聞こえる。

「ロック解除まで時間がかかる。あと1分持ちこたえろ」

1分。気の遠くなるような時間だった。

クソ親父！いつもこう！

素早くM29に装弾し連射するが、大したダメージを与える事もなく、ビーストはガザに向かって飛びかかる。

ガザはビーストに肩を床に押し付けられ動きを封じられた。ビーストの鋭い爪が肉に食い込むが、痛みには構っている余裕などなかった。

ガザの喉元めがけて歯を向け、ガザは左腕でそれを防いだ。ビース

トの歯が、左腕に食い込む。必死にビーストの腹を蹴るが、びくともしない。

そうこうしてる間に、ガザの左腕の皮膚は裂け、人工筋肉が剥き出しになり骨が軋み始める。

銃は、押し倒された拍子に手から離れていた。

しかし、M29でどうこうなる相手ではない。

ひたすら、ロックが解除されるまで耐えて待つことしか、ガザにできる事はなかった。

いよいよ、伸縮金属繊維が千切れ装甲骨が剥き出しになる。腕が千切れたら最後だ。

ガザは為す術もなく、ビーストに喉を噛みきられて死ぬ。

「早くしろ！」

とうとう耐えきれずに叫んだ時、ようやく「ロック」が解除された。

左腕のロックが解除される度、ガザは至福感を味わう。一瞬の出来事だが、時間の感覚を忘れる程だった。思わず声が漏れた。

その至福感分泌されたエンドルフィンのせいだ。

腕を繋げた時に、脳にも偽物の神経を繋げた。

それは人工とは言え有機物だったが、生身の部分、特に脳が受ける不可「ストレス」は半端なものではなく、人為的に脳内麻薬を分泌させなくては、「持たない」のだ。

左腕に仕込まれた赤く光るレーザーサーベルが、傷付いた皮膚を切り裂き、手首を軸にバタフライナイフのようにあらわれる。

それは、左腕を噛み続ける、オートマタめがけ、弧を描いて滑り込み、首と胴を切り離れた。  
首が落ちると、同時、ビームサーベルは光を無くし消えた。ガザの意思で消したのではない。  
システムが壊れて消えたのだ。

肩に食い込んだ、オートマタの手が力を失い、首を無くした体はガザの上に倒れ込む。呆れた事に、頭部はガザの左腕に噛みついたままだった。

左腕をふってそれを落とそうとすると、ありえない方向に間接が動き、オートマタの首と共に、肘から下がちぎれた。

装甲骨をオートマタにやられたばかりか、無茶をしてビームサーベルを出力したせいだ。壊れないはずがない。痛覚をオフにしているので、痛みは感じなかったが。

ガザは荒い呼吸をおさめるように一つ長く息を吐いて、オートマタの体をどかして起き上がる。

まだ、やる事があった。

あのプログラマーを探さなくてはいけない。

ガザは腕から離れた、M29を拾おうとそれに向かって歩きだした。

何気無く目に入った、自分の左腕をくわえたままのオートマタの頭部。

その左目が光ったような気がした。その瞬間、眩い閃光がガザを襲う。

何が起こったのか分からなかった。

爆薬か。いや違う。体は平気だ。

痛みもない。おそらく目眩ましの為の光だと理解できたが、そのせいで目が見えない。

とつさに、壁側に体を移動させようとすると、うなじに冷たい物が押しつけられた。

「動かないで」

女の涼やかな声が響いた。あの、プログラマーの声だった。

首に突き付けられているのは、おそらく銃口だろう。  
冷たい物が背筋を伝う。

ガザは油断した自分に舌打ちをしたくなった。



### 第三章 14 ガザ

銃口の冷たい感触に不似合いな女の声が耳に届く。

「この銃、トリガーが甘い。死にたくなかったら、大人しくしてちょうだい」

背後から銃口を突き付けている女は間違いなく、ニルヴァーナの主任プログラマーだった。

その時、初めていつその声を聞いたかを思い出した。

「あんた、確か昼にも会ったよな？」

「ええ、非常階段の場所を教えてあげたわ」

女は冷静で、銃も震えてはいなかった。

「その時に俺の正体に気付いた？」

ガザも冷静だった。

相手が殺す気があるなら、さっさとトリガーを引いているはずである。隙を伺うチャンスはいくらでもある。

「まさか、とは思ったけど。あそこに人がいる時点で不自然だったわ。あの辺りは昼間は誰もいないのが普通の事だし。この区はそういう所よ。」

確信したのは、ニルヴァーナに最近登録した会員を調べてからだけだね。

しかし、まあ、派手に壊してくれたのね。招待したのは私だけ。とっても高かったのよ。あの娘。

社の経費で落とすの苦労したし、2割は自腹で払ったのに」

『あの娘』と言うのは、あのビーストの事らしい。

サラはナイフの存在に気付いたようで、ガザの腰にあるナイフ二本を抜き取った。

金属が床に転がる音が聞こえる。

サラが出来るだけ遠くに捨てたのだろう。

「俺があのおトマタに殺られるとも思ってた？」

ガザの質問に、彼女は軽く笑い声をたてた。

「そうだと良かったんだけど、あなた、利用価値があるみたいだし」

「今、殺す気はない？」

「そうね。あなた次第よ」

「俺はあんたに殺されるのもごめんだが、あんたに利用されて上司に殺されるのもごめんだ」

「私に利用された時点で組織に捨てられるのね。可哀想」

少しも可哀想とは思っていない口調だった。

「さて、本題といきましょう。

馬鹿な事は考えないことね。

私を殺したら、あなた達が一番恐れている事態が起きるわ」

光のショックは徐々に良くなってきているが、まだ視界がぼやけていた。

「なんで逃げなかったんだ。あんたにとって不利益な事ばかりじゃないか」

「取引の為よ」

ようやく、目が慣れ始めてきた。

何か気をそらせるものを探す。

足元に陶器の破片が転がっている。

少し、音をならせばいい。気をそらすには充分だった。  
一か八かやってみるか。

ガザは相手に悟られぬよう、平静を保った。

「例え、貴方と私が今と逆の立場でも、私は貴方達より優位よ。  
私を殺せば、スキャンダルは漏れるわ」

女が言葉を紡ぐ間を狙い、ガザは足元に転がった陶器の破片をそっと蹴った。

彼女の集中が途切れた瞬間を見逃さず、ガザは素早く銃を握った。  
サラの手首を残った右手で掴んだ。

細い手首だった。それに似合った力でサラは必死に抵抗したが、ガザは銃を握りサラの腹を力をこめて蹴る。サラの手から銃が離れた。

彼女の体は蹴られた衝撃で壁に打ち付けられ、ガザは奪った銃をそちらに向けた。

銃を突き付けたまでは良かったが、やはり素人だ。

「立場は逆転したが、それでも自分が優位だつて言い切れるか？」

女は激しくむせ、血反吐を吐きながらも立ち上がり、何かを探すようにジャケットの懷をまさぐる。

ガザはトリガーを躊躇う事なく引いた。

サラの右肩に弾丸が擦り、服に鮮血が滲む。

彼女は壁を背に床に座り込んだ。

弾丸は外れたのではなく。わざと殺さないように右肩を狙った。さっきの言葉が気になったからだ。

「おかしな真似するな。

懷の物を捨てろ」

彼女は苦痛に口を歪ませながら、銃を捨てた。

念の為、二丁用意していたのだろう。

呆れるほど、用心深い。

ガザはサラに近付き、捨てられた銃を蹴った。

彼女は唇についた血を、指で拭いながら、好戦的な眼差しでガザを見返す。

その様は、不気味で美しかった。

「丸腰で銃突き付けられても、あんたは自分が優位だって言い切れるのか？」

彼女は額に脂汗を滲ませていたが、口角を釣り上げて微笑んだ。

「さつきも言ったでしょう。私が死んだらスキャンダルが漏れるって。

貴方が私を殺した瞬間、貴方は私に負けるの」

「なんで、あんたが死んだら情報がもれるんだ？」

「言えるわけじゃない。自らタネを明かしたら意味がないですよ」

ガザは女の左上腕部に銃を向け、ためらう事無くトリガーを引いた。

乾いた音が響き、女は短く叫んだ。腕からまた血が滴って指に伝う。

さつきよりも深い傷を受けたはずだ。

それでも、この女は自分が優位だと言い切れるのだろうか？

「猫と鼠で取引は成立しない」

彼女は痛みに呻きながらも微笑んだ。

バーチャルネットで見たあの曖昧な笑顔と一緒にだった。

「いいえ。手足の貴方とするのは取引じゃないわ。要求よ。

貴方が鼠なの。分かるかしら？

私が取引するのは、電警とあなたの上司よ」

ガザは一瞬戸惑った。

さっきの一撃は、相当な痛みを与えたはずである。普通の女なら取り乱すだろう。

痛みに耐えてはいたが、彼女は冷静で高慢だった。その自信はどこからくるのだろう。

その時、背後から、銃声が響いた。

「やめて！」

またしても女の声。叫びに近い声だった。

新手のオートマタかと思い、振り向くと、思いもしなかった人間が視界に映った。

「これ以上、サラに何かしたら、あんたなんか殺してやる」

肩で息をしながら、天井に向けた銃口を震えながらガザに構えなおす女は、キアラ・シーブリングだった。

サラは深いため息をついて呟いた。

「逃げてって言ったのに」

## 第四章1 キアラ

ニルヴァーナで「少女」はキアラにもう一度尋ねた。

「私に会いたい？」

キアラは黙って頷くと、「少女」は続けた。

「私の言う通りの道順で、必ず目的の場所に来て。そうしないと、私もあなたも大変な事になる」

そして、面倒な方法と複雑な道順を少女をキアラに伝えた。

何故、そんな方法を使わなければならないのかと少女に問うと、彼女は皮肉的ともいえる微笑みを浮かべて答えた。

「女神が監視してる」

女神。一瞬、何の事が分かりかねたが、すぐに何を指しているのかわかった。

アイシスだ。

このシステムは連邦市民の生活を監視している。

どういうシステムで、何で監視されているのかは、キアラも知らない。国がアイシスを「安全」に運用する事を理由に、公表していないからだ。

アイシスは、キセニア戦争が原因で多発したテロから国民を守る為に二年前に導入された。

その監視を行っている何かは、町に設置された監視カメラに仕込まれていると言っている者もいるし、夜になると空を飛び交う、オシリス社製の竜の群れがそうだと言う者もあり、そのどちらにも人を監視するシステムが仕込まれていると言う者もいる。

それらは公表されていない事実を憶測で語った噂程度の情報でしかなかった。

しかし、アイシスは正常に機能していたし、その「得体の知れないもの」に監視されることに異議を唱える者も少なかった。

そんな「得体の知れないもの」に守られても良いと大半の人間が思える程、テロは多発し、連邦市民は疲弊し病んでいると言っても過言ではない状態だった。

テロへの恐怖が他人への疑心暗鬼へと繋がり、必要以上の防衛を招く結果となった。つまり差別である。

テロとは関係のない、キセニア、クルス力、カステイユの三国の系の善良な人間が差別にあう事も珍しい事ではなく、それが当然だという風潮まであったのだ。

いつ自分がテロに巻き込まれるかという恐怖はキアラでさえも体感していた。

アイシス導入の効果は絶大だった。テロは今では全く起きてないないし、犯罪件数も減った。

その国民の安全を守る為のシステムに見つかっては困ると「少女」



は言う。

つまり「少女」はこれから、連邦にとって困る事をしようとしているのはキアラにも分かった。

しかし、そんなモラルは、今のキアラにとってはどうでもよいことだった。

かなり面倒な道順だったが、バーチャルネットで記録する事、ログは残しておいてはいけないと禁じられた。

バーチャルネットなので、現実の世界のように、メモをとることもできない。

全て頭に叩き込むしか方法はなかった。

何度も繰り返し、少女に言われた道順を頭に入れる。ここまで、暗記というのを必死でしたのは初めてだった。

キアラがニルヴァーナからダイブアウトした後、真っ先に、頭に叩き込んだ道順を紙に書きとめた。

それすら必要もないほど、すっかり覚えきっていたが。

そして、服をできるだけ色を押さえた、カジュアルで動きやすいものに替える。

服装の指定は少女はしなかったが、目的地は12区と聞き、なるべく地味で動きやすい服装の方が良いと、キアラは判断した。

足を踏み入れた事はなかったが、12区の治安の悪さを知っていたからだ。

タクシーやメトロの精算はクレジットカードを使ってはいけない。

必ず現金が身元が判別しにくいプリペイドカードで精算するようにと少女に言われたのだが、生憎、キアラは現金を持ち歩くタイプではなく、買い物はいつもクレジットカードで精算していた。プリペイドカードなど使った事がない。

キアラは自宅から出ると、メトロの駅付近にあるコンビニエンスストアのキャッシュディスプレイで、自分の口座から現金を限度額いっぱいまで引き出す。なるべく多く現金がいるような気がしたのだ。自分が使うのではない。

サラを逃がす為の資金が、もかしたら必要になるかもしれない。

とても財布に入る量ではなく、人の目を憚りながら、バッグにそのまま詰め込んだ。

念のため、プリペイドカードも購入する。

そしてメトロを使い指定の駅で降りる。

歩いては違う駅へと行き、メトロに乗った。

そういった事を何度も繰り返した。

途中から無人タクシーを使って、12区へ向かった。

無人タクシーでは目的の場所を告げずに自分で道を指示しながら移動するように「少女」に言われていた。

キアラは言う通りに、12区の目的の場所までついた。

時刻は夕方で、荒廃した景色が赤く染まっていた。

キアラは弾む息を押さえて、そのアパルトマンに踏み込み、「少女」と、初めて現実の世界で会った。

「少女」はキアラより年長の、目を見張るほど綺麗な女でバーチャ

ルネットでの少女に似ていた。

少女が成長したら、こんな姿になるのだろうと思ったが、そうではなくバーチャルネットの「少女」は、現実にいるこの女が少女だった頃を模して作られたものだ、時間を置いて気づく。

それは僅かな違いだが、大きな違いだった。  
何が現実なのか曖昧になってきている。

「彼女」の現実は「少女」ではなく、「彼女」は「女」なのだ。  
そしてキアラは「彼」ではなく「女」だった。

しかし、現実とは何なのか。その定義をすぐに答えられる人間は少ない。  
もしかしたら誰もわかっていないのかもしれない。

キアラは目の前にある現実を噛み締める。それは悪い気分ではなかった。今まで自分を覆っていた曖昧な何かが流れ落ちたような気分だった。

キアラは「少女」は現実の姿でも美しいと思ったが、それ以上の感情は何故かわかなかない。極度に興奮しているせいもあるかもしれない、その時は思った。

じっと自分を見つめて黙っているキアラに、彼女は微笑んだ。

「初めまして」

何故か照れ臭そうに、現実の世界で女である「少女」は名乗った。

「私は、サラ・リンドバル」

## 第四章 2 ガザ

ガザは、自分に銃口を向けた女を見つめた。

女にしては背が高く、まあ美人なのだろうと言える程度の女で、何処にでもいるような普通の女だった。

銃を握った手は震え、生まれて初めて手にしたのではないかと思えるほどぎこちない。

グレインから議員の娘をどうするか of 指示は出されていなかった。

「あんな短時間で、たぶらかしたのか？」

サラに尋ねると、彼女は何故か渋い顔をするだけで何も答えなかった。

キアラはガザに銃口を向けたまま、サラに近づく。

「酷い」

唇を噛み締めて、ガザを睨んだ。酷いとはガザがサラに負わせた傷の事だろう。

「サラが何をしたの？何でこんな目に合わなきゃいけないの」

「キアラ、これ以上は危ないから、この男を刺激しないで」

サラは興奮したキアラを柔らかい口調で宥めたが、それを遮るようにガザは口を開いた。

「あんたの父親がそれを望んだからだ」

ガザは皮肉な笑みを浮かべてキアラに事実を告げた。おそらくキアラは知らないだろうとガザは思った。

キアラはガザの言葉に傷ついた素振りも、動揺も見せなかった。ただ黙ってガザを睨むと、キアラはサラに近づき、傷の手当てをしようとハンカチを取り出したが、サラはハンカチだけ受け取った。

「大丈夫。自分でできるから」

ガザにそのまま銃向けておくようにと指示する。

「キアラは知ってるわよ。彼女の父親が何を命令したのかも、私がやった事も。さっき私が教えたの」

ガザは驚いて、サラに視線を向けた。

「なんで」

サラはハンカチを二つに裂くと器用に負傷した肩と腕に巻き付け止血をはじめめる。

「なんでって、私がそう望んで、彼女も知りたがったからよ。他に理由がある？」

「サラ、こんな男に何を言っても無駄だわ」

「そうね。あなたが今すべき事は2つ。一つはキアラを保護する事。もう一つはさつきも言ったけど私と取引する事」

「取引ね。確かにあんたはそう言ってたっけ」

「早くあなたの上司に連絡しなさい」

「さもないや、スキャンダルは漏れて俺の上司が怖れてる事が起るってか」

「そうよ」

「あんたのゆすりのネタが事実だって証拠は？」

灰青色の瞳で真っすぐガザの瞳を射るように見つめ続ける。

「それじゃあ、上司にこう言いなさい。

『フォーラント湾、陸から26キロ程先の孤島。世界を監視する機械仕掛けの女王がいる』ってこの女が言ってるってね」

ガザには何のことかさっぱり分からなかったが、彼女は負傷しているにも関わらず、相変わらず、余裕の笑みを浮かべていた。

そのままトリガーを引けば、彼女を殺すことが出来たが、余裕のある表情がガザを不安にさせた。

「よく考えなさい。それだけじゃないでしょう。シーブリング上院議員が一番大切なものがここにいるのよ」

確かにサラの言う通りだった。グレインに連絡した方がいいかも

しない。

ガザが通信機に手をかけようとした時、イヤフォンからアラームが響いた。

おそらくグレインからの通信だろう。

クソ親父

ガザは内心、悪態をつき。サラに銃口を向けたまま、それに応答した。

キアラも依然として、ガザに銃口を向けたままだった。

「聞こえるか」

グレインの声はわずかだが上ずっている。

「この女の言ってる事が聞こえたか？あんだ達と取引したいそうだが俺に用はないんだと」

「今からそちらに向かう。ターゲットとキアラ・シーブリングを身柄を押さえておけ。彼女らの保護が最優先だ」

「俺は手足だ。頭のアんだが保護の優先順位を明確に提示してくれ。ターゲットか議員の娘かどちらを優先させる？」

「二人を同等に保護しろ。くれぐれも」

突然、外から派手な銃声が響いたかと思うと雑音と共に音声が途切れた。

ガザが動くよりも先に、サラが、階下へ走りだす。



「おい！」

「ちょっと、サラ」

慌ててガザもキアラもサラを追いかけながら、呼び掛けたが、サラは振り向かず、一つの部屋に入っていく。壁一面モニターに埋め尽くされた部屋だった。

その一つがこのマンションの入り口のが映されている。

体格のよい男が2人がそこにいた。サラは苦々しく舌打ちし、ガザやキアラの知らない言葉で一言、吐き捨てるように呟く。そして、ガザ達のわかる言葉で話し出した。

「あなた達の今回の根城って、昼間にあなたに会ったマンションにあるんでしょう？おそらくお仲間は殺られてるわよ」

サラは踵を返して廊下に出るとフロアの奥へと向かった。ガザとキアラもそのあとに続く。

「何を急に」

「さっき銃声が聞こえなかったの。その方向から聞こえたでしょう。あなたの上司との通信もその時に途切れたんじゃない？」

サラは金属製の扉の前に立つと、扉にある、生体反応センサーのキーに手をかざした。

「確かに、今回の本部はあのボロいマンションにあったし、銃声と共に通信が切れた」

今更、隠しても仕方がない事だったので、ガザは答えた。

銃声と共に通信が切れた二つの事実を繋げるぐらいはガザにもできたが、言葉が続ける。この女を試した方がいいと思っただからだ。

「だけど銃声が聞こえるなんて、12区じゃよくある事だろう」

「あなた、私から何を聞きたいの？」

よく分かってるじゃないかとガザは思ったが口には出さず、唇を片側だけ上げて笑った。ガザの心の内を読んだのかはわからないが、サラはそのまま喋り出す。

「いくらこの区が治安が悪いつて言われてても、一応がアイシスが配備されているのよ。あんな銃声が響くのは稀な事だわ。」

それに、画面に映ってた二人の男は東方系のマフィア。ウエンウー社が雇ったサイボーグよ」

「なんであなたがそんな事を知ってるんだ？」

「何故って取引相手だから。顔見知りなの。」

あなたが政府に依頼されて裏の仕事をやるように、ウエンウー社の裏の仕事を彼らがやる。

立場の弱い外国人が他国でビジネスをするには、こういう関係は大切でしょう。

あの二人のボスは私のお友達の人」

お友達という言葉が、この女が口にすると妙に生々しく響く。キアラは眉をしかめ、ガザはため息をついた。

「あんたには救いの主だな」

電子音と重厚な音を響かせながら、扉のロックが解除された。

「違うわ。正反対よ。彼らは私を殺しにきたのよ」

サラは慎重に扉を開く。

ガザは扉の奥に広がった光景に息を飲んだ。そして何故か寒気を覚えた。

ウォークインクローゼットより狭い長細い部屋だったが、そこに所狭しと銃火器の類いが並んでいた。女一人が所持するには多すぎる量だった。

驚きながらも、ガザは口を開いた。

「ウェンウー社が雇った奴らなら、これは俺の危機であってあんたの危機じゃない。取引は諦める。俺はこのお嬢さんを連れて逃げる」

「ウェンウー社はそんな甘いものじゃないわ。彼らは私ごと消すにきまつてる」

「あんたの勤めてる会社じゃないか。あんたを殺す理由がわからない」

「そういう会社で、そういう国なの。」

私がああノーストやこういうものを所持できる時点で気づくべきよ。あなたが壊したノーストも彼らから買った。

さっきも言ったように『彼ら』はウェンウー社との関係も密接してるわ。

その恩恵をフルに活用して、やりたい放題よ。人材は東方からどんどん流れてくるしね。

最近では違法に出力設定されたオートマタの販売がメイン。軍から横

流しされたのを改良して儲けたり一から作ったり、手広くビジネスをしているわ。売春、児童ポルノ、ドラッグ、人身売買。どれももちろん違法。

ウェンウー社も彼らを利用する事でかなりの利益を得てる。

お互いにやりたい放題よ。

嫌でしょう。そんな会社で働くのは」

「さっきから俺が一番聞きたがっている事をあんたはちつとも答えちゃくれないが、俺が一番知りたい疑問はウェンウー社があんたを消そうとする理由だ」

「ごめんなさい。

でも、これだけ情報を喋ったんだから、少しは私を信じてくれる？」

甘く弱々しい口調だった。この手管で何人の人間を惑わしたのかは知らないが、ガザは答えずに先を促した。サラはわざとらしくため息をつく。

「簡単なことよ。私は会社を裏切ろうとしていて、おそらく、それがバレたの」

「裏切る？」

「私はウェンウー社から離れたい。今回の事を期に、あなた達側、つまり　オシリスや民主党側にコンタクトを取って、退職したかったの」

「ヤクザ達と密接な関係にある会社にいるのは嫌って事か？」

「ウェンウー社は私みたいな人間を、女として最大限に利用する事

に躊躇いもみせない会社よ。

なんでもさせるし、なんでも奪う。

あなたは男だから分らないかもしれないけど、こんな屈辱って他  
にない」

社の命令であのサイボーグ達のボスと『お友達』にならなければい  
けなかったとも言いたげだった。白々しいとガザは思った。

「私はクリーンになりたいの」

やけに嘘くさいセリフだとガザは思ったが、それも口には出さな  
かった。表情には出ていたかもしれないが。

「なるほど。」

だが、退職を妨げるにとしては大袈裟じゃないか」

「私のウェンウー社での立場はどちらかと言うと裏方なの。

そんな機密情報を握ってる人間をあ 회사가離す訳ない。円満退社  
は無理ね。

それに、できるなら私はあなたの上司や電警と手を組んで、ウェ  
ンウー社を叩きたいの」

ガザは最後の一言で、この女の本質を見た気がした。

綺麗で優しい顔をしているが、その中身は抑圧を好む欲望で埋め  
尽くされているかもしれない。

グレイン達や電警と、どんな件でウェンウー社を叩きたいのかは分  
からないが、やはり、ろくでもない女だ。

あの議員の娘はどう思っているのだろうと、キアラを一瞥したが、  
よく分からない表情をしていた。

何かを深く考えているようにも見えたし、何も考えていないようにも見えた。

「例え、彼らが会社が寄越したエスコートだとしても、私は彼らに保護される気はないし、あの会社にいいように使われるのは、もう御免だわ。

だから、あなたとキアラにはここに残って私を守って欲しい。この部屋にあるものを好きなだけ使って構わないから。威力は最少だけど、対電子兵器の電磁波トルネードぐらいならある」

ガザは並んだ銃火器を眺めた。一般人が所持できないものがいくつかあり、ガザが手にしているM29の模造品とは比べ物にならない程、威力のあるものばかりだった。

ガザはようやく先ほどの寒気がなんだったのか理解した。この女は本気でガザを殺そうと思えば殺せたのだ。

可愛がってあげるわと彼女はバーチャルネットでガザに言った。事実、ガザを殺せるだけのものがここにはある。

それをあえてしなかったのは、彼女の目的がガザの上司グレインや電警と取引したいというのが本意であるからなのだろうか。それでもガザはまだこの女の要求を飲み込むのをためらった。

ガザとキアラを殺して、この女やウェンソー社が得をする事は拭えないし、その為にこの女が嘘をついている可能性もあったからだ。

「あなたの上官があなたに下した命令も、私たちの保護が最優先なのよね？」

彼らは私ばかりか、キアラに危害を加えるかもしれない。

もし、そんな行動を彼らが起こしたとしたら、あなたは私たちを保護する為に彼らを排除しなくちゃいけないんじゃないかしら」

「あの二人が、あんたをエスコートする為にウェンソー社が寄越した人間じゃないという証拠がない。いざ残ってあんたを守ろうとしたら、このお嬢さん共々殺されたらたまったものじゃない」

「私は、あの電警の文書、あなた達の組織に私の殺害を依頼した文書を手に入れた時に、ウェンソー社本部に私を保護して欲しいって依頼したのよ。その時は会社を裏切ろうとは思ってなかったわ。でも、それは受諾されなかったし、自分の身は自分で守れと言われた。」

「そんな会社が今更になってエスコートを寄越してくると思う？もう時間はないわ。早く結論を」

サラは力を込めて付け加えた。

「お願い。私を信じて」

ガザは数秒考えた末、結論を出した。

「わかった。あんたのオーダーを受けよう」

キアラが安堵の息を漏らしたのが聞こえた。自分を利用している女に対して何をそこまで入れ込む必要があるのか。キアラの気持ちはガザには理解できない。

サラの要望は受けたものの、ガザは彼女を信じてはいなかった。バーチャルネットであんなに手の込んだ嫌がらせをしたような女である。信用する気はわかなかった。

だが、今は時間がない。結論をいつまでも出さずに、躊躇う事が何より命取りになるのをガザは知っている。

それに、ガザにとってあのサイボーグ達が味方でない事だけは確かで、もしサラがおかしな動きをすれば殺さない程度に動きを止めればいいだけだ。

グレインは二人共に同等に保護しろと言ったが、優先順位は明確だった。

ウエンウー社を裏切ろうとするプログラマーより、議員の娘の方がバックは大きい。

最悪、サラは殺しさえしなければいいのだ。

「ただしいくつか条件ある」

「何かしら」

「あんたには囿になつてもらふ。あんたが2人の注意をひきつけている間に、俺が2人を始末するが、俺はまだあんたを信用する気にはなれない。丸腰でいろ」

「わかったわ」

「それと壁側に背を着けたままでいる事」

「了解」

「少しでもおかしな真似をしたら、あんたには死んでもらう」

「あんた、まだそんな事を言ってるの？」

キアラが憤慨して声を荒あげた。



「それとお嬢さんにも一つ守ってもらいたい事がある」

「何よ」

キアラはいかぶしそうな顔で尋ねた。

「何もするな」

ガザの一言に、キアラは不服そうに鼻を鳴らした。

### 第四章3 チャンプ&リー

「もしもし、誰とお電話してたのかなあ？聞こえますかあ？」

小柄な少年はオレンジ色の髪をかき上げながら、無数の弾丸によって体を蜂の巣にされた作業着の男に尋ねた。

少年は派手なプリントがされたＴシャツに細身のパンツを身に付け、細い腕には毒々しい骸骨の刺青、いくつかの金属製のピアスが耳たぶを貫いており、左の眉尻にもそれがある。

前世紀に流行ったパンク崩れにも見えたが、少年が手にしているのは楽器ではなく機関銃だった。

銃撃戦の後で部屋には硝煙の匂いが充満している。少年と男が二人、床に転がった血まみれの死体が二つ。

少年は、床に転がった血塗れの作業着の男の髪を掴んで顔を覗き込んだ。

「政府の犬が相手って聞いたから楽しみにしてたのに。つまんねえなあ」

オレンジ色の髪の少年は作業着の死体が握った携帯電話を取り上げ、ボタンを押して反応があるか確かめた。

「だめだあ、電話も壊れちゃってる」

「リー、死体に触るな。いきなり弾ぶっぱなされたら誰でもそうなる」

リーと呼ばれたオレンジ色の髪少年とは対照的な、シルバーブ  
ロンドの髪男は呆れて言った。

身長は二メートル近くもある筋肉質な体型で、黒いレザーのコート  
にレザーパンツとシャツと全身黒づくめの衣装に身を包んでいる。  
少年とは違い、アクセサリーの類いは一つも身に付けてはいなかつ  
たが、日は沈んでいるのにサングラスをかけたままだった。

「派手な音立てやがって、やつこさんに気づかれるぞ」

「そりゃ考えてなかった」

「トニーとレオンの生体反応がさっき消えた」

「なんだ。やられちゃったのか。俺らがあっち行った方が良かった  
ね。あいつらが行ったのは近くのボロビルだろ。チャンプくんご  
自慢の目で見てくんない？」

チャンプくんとリーと呼ばれたシルバーブロンドの男はバルコニ  
ーに出て、サングラスを外した。

人によつては、整ったと評価するような硬質的な顔立ちで、アイス  
ブルーの瞳がそれを際立たせているが、整っているのは右側だけだ。  
左目はひきつったように一回り大きく見開き、黒目も右より一回り  
大きい。そして瞳孔が二つあった。チャンプはアパルトマンを見て  
舌打ちした。

「逃げやがる。今、アパートから出た」

「何人逃げたー？」

ふざけた口調で、オレンジ色のパンク少年が尋ねる。

「三人。女二人と男一人。うち女一人が左右の腕を負傷。男も左腕がない。ああ、ありや義手か。」

「負傷してる女はサラだ。間違いない。……となると犬が義手の男で、もう1人の女が議員の娘か」

リーは死体の腕を掴んでバイバイするようにふった。

「あー……全員逃げちゃったのか。残念。トニーとレオンはいいや。俺、あいつら嫌いだったし」

今回の仕事は、チャンプがトニーとレオンと生体反応の信号を送りあうことになっていた。

チャンプもこの二人の同僚を嫌っており、あまり乗り気はしなかったが、リーが仕事でさえ二人と通信したくないと意地を通したので仕方なくチャンプだけが彼らと信号を送り合う事になったのだ。

チャンプとリーは仕事上のパートナーでもあったが、プライバシーでも常に互いの生体反応と健康状態を通信しあっていた。

ある程度、離れていても、どちらかが怪我をすれば、それを「感じ」とれるように通信しあっていた。

それはサイボーグならではの自衛手段だった。

体に変調をきたせば、異常を脳に知らせるよう作られてはいたが、現在の技術でも生身の感覚を完璧に再現する事はできない。

異常に気付かず機械化された体を酷使した場合、ただ走っているだけで心肺機能が停止する可能性すらあった。

その対策として、お互いの状態をチェックしあえるよう通信しあっ

ているのだ。

「犬はチャンプくんのタイプだった？」

「遠目じゃよくは分かんが、タフそうだ」

片方の口の端を吊り上げ、サングラスをかけなおしながらチャンプは言った。

「チャンプくんの相手はタフじゃないもたないもんねー。議員の娘は俺のタイプだった？」

「お前、あんなレズが趣味なのか？」

「ああいうお嬢を一度ひいひい言わせてみたいんだよ。性癖なんてこの際は関係ねえや」

「お前の貧相なもんじゃ、物足りねえって言われるのがオチだ」

「貧相じゃねえよ。ちゃんと成人サイズだ。」

……でさあ、チャンプくん、今からどうする」

リーは仕事道具の入った金属製のカバンからビンを取りだし、中身の液体をジーパンの死体にかけた。

「トニーとレオンが失敗したんだから、俺達がやつらを追いかけるしかないだろう」

チャンプもリーと同じように作業着の死体に液体をぶちまけた。

「確か、次の仕事の予約は入ってなかったよね？」

「ああ」

「それなら、ゆっくり追いかけても、オヤジに怒鳴られずに済むんじゃない？」

「まあな。だが、バレたら給料から天引きされる」

「給料どうこうより、俺は今回の仕事は嫌でしょうがねえよ」

「犬と議員の娘は殺して、サラだけ無傷で生きて連れてこいってアレか？」

「それだよ。それ。馬鹿馬鹿しくてやってらんねえだろ。なんで、あんな女をエスコートしなきゃいけないのさ」

「オヤジ、あの女のせいで腑抜けになったな」

「そうだよ。俺はちつとも面白くねえ。」

「オヤジ、あの女にくそ高いオートマタまで貢いだんだろ。最初はオートマタを買いにきた客だったのによ」

「違う。三割値引ただけだ」

「なんで知ってるんだよ」

「オヤジがあの女と商談で飯食いに行つて、それに付き添った時に聞いたんだよ。」

あの時のオヤジは目も当てられないくらいひどかったね。

オヤジは馬鹿高いオートマタを最初は貢ごうとしたんだ。若頭のマイクが必死に止めるのも聞かずにさ。

それなのにあの女は断った。親父が半額で売ってやるって言ってもあの女は領かない。その訳が最高だった。

「私はフェアな関係でいたいと思ってるの。あなたに囲われるつもりはないわ」ってさ。笑えるだろう。

それまで目も当てられないぐらいのいちやつきぶりだったのに、急に体引いちゃってお堅くなるもんだから、俺は面食らったね。

オヤジは怒るところかタジタジになって「それなら三割値引きをする。これは今後も君や君の会社といい関係を結ぶ為のサービスだ。

他意はない」って言いやがった。  
何が他意は無いだ」

「なんだ。オヤジはお預け食らったのか」

「いいや。商談成立の後、俺らを追っ払って個室に二人きりさ」

「あの女、なんで断ったんだ？どうせオヤジとやったんだろ。普通なら受けとらない？」

「そこまで恩を売りたくなかったんじゃないのか？

それから親父に囲われてる訳でもないし、他にも男が沢山いるって噂だ」

「せいぜい股開く程度で玉もしゃぶってくれなさそうな女なのに」

「ウェンウー社のプログラマーって肩書きだが、ありゃ売女だ。お袋と同じ匂いがする」

「だからなのかぁ、チャンプくんが、サラちゃんを嫌いな訳は。ママと同じ匂いがするのね」

お前のお袋も同業者だったじゃないかとチャンプは思ったが、それは口には出さずにリーに尋ねた。

「じゃあ、お前はあの女の事、どう思ってたよ」

「んー、チャンプくん程じゃないけど、あんまり好きじゃないなあ。綺麗だし虫も殺せないような顔してるけど、実際、きつそうだもん。あと、あの表情が嫌だ」

「あの表情？」

「笑った時の顔だよ」

「なんだそれ」

「なんかとにかく嫌なんだよ。イライラする」

「そんな、お前と俺に嬉しいお知らせだ。オヤジは、サラを助けた為に俺らを放ったわけじゃあない」

「何それ」

「オヤジはサラは自分でいたぶりたいんだとよ」

リーはぎやははは声を上げて笑った。

「オヤジも悪趣味だよなあ。しかし、なんで急にそんな風になった



のかね。昨日までめろめろだったじゃん」

「議員の娘とバーチャルネットでレスしてたのが気に入らないんだと。その程度であの状態じゃ、他に男がいるって事を知ったら、どれぐらい怒り狂うか見物だ」

リーはますます声を上げて笑っていたが、疑問に思うことがありチャンプに尋ねた。

「でもさあ、なんでお前が知ってて、俺が知らないんだよ」

「お前、オヤジに呼び出された時、途中から立ちながら寝てたじゃねえか」

「忘れてた。だってオヤジの話し最近くどいんだもん。聞いてるうちに飽きちゃった。

しかし、機械の体って便利だよねえ。目え開けたまま寝られんだもん。痛みも感じないようにできるし」

「間違いないな」

チャンプは苦笑した。

彼らはサイボーグらしく、体を張った仕事が多い。

戦闘体制に入ると、痛覚を感じないように設定する事が多かった。戦闘では痛みは邪魔な感覚だった。

だが、痛みというのは、体の異常を知らせる信号だ。それがオフのまま、このままオンにならないければ、どうやって体の変調を知ればいいのか。

痛覚と知覚は同義であるのだと、チャンプはある時に気付いた。いつしか痛覚をオフにすることに恐怖を覚えるようになる。それから痛覚をオフにするのを極力避けるようになった。

リーはチャンプのような恐怖を覚えない。

チャンプは麻薬中毒者に左目を潰されてから身体を徐々に機械化していったが、リーは物心ついた時から、生身の体よりも機械の体に慣れ親しんでいる。

彼はチャンプのように生々しい感覚を知らないし、感覚をオフにする事に慣れきってしまった。

リーはチャンプとは違い生身では生きていけなかったのだ。

リーの母親は、リーが胎内にいる時に豊かな生活を求めて、東の大陸から連邦に移住してきた。妊娠には気づいていなかった。

自分に子供が宿っていると知った時、リーの母親は素直に喜んだ。連邦は同郷からの移民が多く、彼女には友人が多かったが、彼女は家族が欲しかったのだ。

父親は誰かわからなかったが、子供を愛せる自信だけはあった。浅はかな女だったが、愛情は深かった。

無条件で愛せるものが自分のおなかにいる事が彼女は嬉しくて仕方がなかったし、連邦は故郷と違いシングルマザーに対する偏見が少ない。

早く稼いで、まともな職につき、生まれてくる赤ちゃんを幸せな家庭を作るのが夢となった。

しかし、リーは未熟児として生まれた。そしていくつかの内臓に欠陥があった。

早急に治療をしなければ、二週間も持たないと医者には告げた。

例え未熟児で生まれたとしても、身体の障害があろうとも、現在の連邦では的確な治療さえすれば生存できる可能性は高くなる。

しかし、リーの母親には赤ん坊の治療に必要なもの、つまり金がなかった。

リーの母親は途方に暮れた。

そして、自分の仕事を仕切っていたワンを頼ったのだ。

ワンは治療の代金を支払うかわりに赤ん坊の将来をワンに任せる事を条件としてつきつけた。

つまりこの赤ん坊は将来、ワンの「会社」の社員にさせるという意味だった。

リーの母親は泣く泣くこれを承諾した。

この先、ワンの手元において置けば、ワンの手下のような、人の道を外した仕事をさせられる事は分かっていたが、それよりも赤ん坊が生きていける道を選んだのだ。

チャンプはリーの母親を知っている。

リーの母親はチャンプの母親の同業者で同じ店で働いていた。

リーの母親は頭は足りなかったが、優しい人だったとチャンプは思う。そして、ちゃんと『母親』だった。

彼女はリーとチャンプが十四歳の時に客に殺された。

それから、リーは成長することをやめた。

チャンプはリーのように生きていくのに困る程の疾患はなく、ただ喘息持ちでひ弱でやせっぽちなだけだったが、チャンプの母親

はワンに生まれる前から子供を預ける事を約束していた。  
クスリの支払いの代わりに子供の将来をワンに売ったのだ。  
チャンプの左目を潰したのは母親だった。

チャンプとリーは物心ついた時から、兄弟、家族のようにずっと一緒にだった。もしかしたら、関係は血縁以上に密接なものなのかもしれない。

お互いの変化、お互いの肉親が亡くなった時も側にいたし、まだ年寄りとは言えないものの、人生の節目には必ずこのパートナーと一緒にいた。ずっと一緒だった。

これからもずっと一緒にいるのだらうと、お互いが口には出さなくとも思っていたし、その関係がいつか壊れるのではないかという危機感も疑いすらも持つてはいなかった。

彼らを結びつけているものは、絶対的な信頼と、依存だった。チャンプの存在がリーであり、リーの存在がチャンプだった。

「お前の提案通り、ゆっくり飯を食ってからサラ達を探そう。あいっらは12区から出られない。それにオヤジがサラを誘き寄せる罠を用意したらしい」

「罠ってなに？」

チャンプは唇を歪めて笑った。

「えげつない罠さ」

「何それ？」

「お前には刺激が強すぎる。オヤジが喋ってる時に寝てたお前も悪い」

「まあ、いいや。俺には関係ないし。」

「楽しめるといいねえ。サラちゃんと愉快な仲間達には頑張ってもらわないと」

「きつと楽しめるさ」

チャンプは床に転がった死体に火を放った。

「夕飯は何を食べよう」

リーは人が焼ける匂いを嗅ぎながら呑気にそう言った。

「とりあえず肉以外だな」

リーは欠伸をしながら死体の燃える部屋を後にし、チャンプもそれに続いた。

## 第四章 4 猫の家

十二区の細い路地に面した建物。その鉄製の扉の前にガザ、サラ、キアラの三人はいた。

サラが扉を叩いて中の住人に呼び掛けていた。

とても人が住んでいるとは思えない半ば崩れかかった建物をガザは眺めた。壁は石造りで重厚そうだが、スプレーで落書きされ、屋根の一部は安っぽいトタンで補強してあった。

「カケル、お願い、開けてよ。友達でしょう」

カザはサラの口から友達という言葉が紡ぎだされると、白々しい気分になった。今日、知り合ったばかりだが、人を利用する事はあっても人を頼ったり頼られたりするようなタイプには見えない。そんな女に友達がいるのだろうか。ガザ自身も人の事が言えるような人間ではないが。

今はそんな女でも、人に頼らなくてはいけない状況に立たされているのである。困った事に。

ガザも、グレインにターゲットの保護を命じられ、まさか行動を共にしなければならないとは数時間前までは予想すらできなかった。

ガザはサラのオートマタとの戦闘で左腕を負傷し、サラもガザに撃たれて左右の腕を負傷していた。

この先、追っ手がいつ襲ってくるかわからない。二人の、特にガザの治療が最優だとサラは主張した。

ガザも異論はなかった。左腕をなくしたままで、二人もの人間を守

れる自信はなかったからだ。

サラに案内され向かった先は、サラの『友達』である、自称エンジニアの店だった。

ガザ達三人はその扉の前にいた。

この店は看板も出てないし、店として営業しているようには見えないが、ガザ達がこの扉の前で足を止めると、点いていた明かりが、わざとらしく消えた。

中に人がいるのは明らかだが、サラが呼び掛けても返事もしない。懲りもせず、サラは扉をノックし続けていた。

ガザはため息をついて、今回の仕事で一番のお荷物である上院議員の娘の様子を見てみると、彼女は自分のバッグとガザの千切れた腕をきつく抱き締め、まだ震えていた。

先ほど、サイボーグであれ人が死ぬ瞬間を目の当たりにしたのだ。それが普通の反応だとガザは思った。きっと、おかしいのは、ガザとサラなのだ。

サラのオフィス兼住居に乗り込んできたヤクザ、あのサイボーグ二人は、ガザの手によって死んだ。

サラが彼らの注意を引き付ける必要もなかった。

二人は部屋に入った瞬間、ガザが投げた電磁波グレネードで動きを止められた隙に、ブラスターで頭を撃ち抜かれ、あっけなくこの世から去ったのだ。

それは、ものの数十秒の出来事で、サラがガザに自分たちを保護しろと説得した時間の方が長いぐらいだった。

サラは床に転がった二つの遺体に目もくれず、オフィスの端末から片手に収まるぐらいの正方形の黒い物体を取り出すと、大事そうにバッグに詰めた。それがなんなのかは、ガザには分からないが、サラにとっては死んだ二人のサイボーグより大切な物だという事だけは分かった。

キアラは腰が抜けたように床に座り込み、サラに話しかけられるまで、動けなかった。

サラは何度目かのノックと呼び掛けをやめて、後ろで突っ立ていたガザに尋ねた。

「グレネード持ってきたんでしょう？」

「あんたに言われたから、いくつか持ってきたよ」

ガザが肩にかけたボストンバッグには物騒なものが詰め込まれている。

先ほど逃げる時に、サラから倉庫から携帯できそうな武器をいくつか持つてくるように『命令』されたからだ。

「その扉、壊して」

ガザがグレネードをバッグから取り出す前に、建物の明かりがつく。

「わかった、開ける！今、開けるから」



錆びた音を立てて扉が開き、中から線の細い青年が顔を覗かせる。醜くはなく、どちらかと言えば整った顔立ちだったが特徴が目立つ。額が狭く目が大きい。まるで猫のような顔だとガザは思った。

「相変わらず、顔に似合わず過激だね」

男にしては少々高めな声だった。サラは嬉しそうに青年に抱きついた。

「カケル、ありがとう。やっぱり友達だわ」

カケルと呼んだ青年にサラは頬に軽く唇を押し付けた。

ガザはなんとなく、この女の『友達』の定義が分かったような気がしたが、青年は嫌そうにサラを押し退けた。少し意外な反応だった。

「やめろよ、そういうのは嫌だって知ってるだろう。」

それに何が友達だよ。友達が友達の家の扉をぶつとばすなんて聞いた事がない」

青年は嫌そうに唇を押し付けられた頬を拭いながら三人を家に招き入れた。サラが憎らしげに反論する。

「私も友達が困ってるのに、助けもしない友達なんて聞いた事がない」

「しょうがないだろう。ワンから連絡がきて、あんた達を助けたら同じ目にあわせるって。俺はワンの下で働いてるんだから」

外は廃墟にしか見えなかったが、中はそこまでひどいものではな

かった。

通されたのは地下にある部屋で、思ったより広い。

ガザが見たことがない機材が整然と並び、清潔だった。壁が白いせいか、エンジンアの仕事場と言うよりも病院のような印象だ。

壁に吊るされたモニタからは、この青年の趣味なのか前時代の映画と思われる映像が流れていた。

海岸でピアノを弾く黒い服を着た女。題名は思い出せないが、この美しい音楽には記憶にあった。

何かの作業をしている最中だったのか、銀色の作業台の上は、訳のわからない機械の部品が転がり、小さな水槽が置かれている。水槽の中では小さな蛸とヒトデを足したような肉色の生き物が、ヒラヒラと泳いでいた。

あまり見ていて気持ちのよい形ではなかったが、サラは水槽を指でつつく。

「順調そうね」

「なんとか。オシリスの発売は来年だからね。まだ時間はあるけど、有機系の素材苦手なんだよなあ」

「これからは、こういう素材がメインになるわ。苦手だから疎かにしてると時代についていけなくなるわよ」

ガザには、生物にしか見えなかったが、これは何かの材料らしい。ガザと同様、気持ち悪そうにそれを眺めていたキアラが尋ねた。

「これは何？」

「新型のメモリーチップの部品。無菌状態で育てたアメーバとヒュドラを遺伝子操作させたものがベース。直接、脳ミソに繋げて使うんだけど、従来のものと比べて、情報の解析率が数段も上がる。より鮮明に人の記憶を数値化できるようになるんだ」

カケルの説明にキアラは露骨に顔をしかめる。

「これを頭の中に入れるの？気持ち悪い。ぞっとする」

「あんた、オシリスの親族のお嬢さんだろう？ニルヴァーナでのサラの恋人」

「なんで、あなたがそんな事を知ってるのかと言いたげな表情をキアラは浮かべた。

「そんな顔するなよ。サラとは友達なんだ。友達の交友関係を友達を知っててもおかしくはないだろう？……って、ごめん、嘘。それはワン 俺のボスにさっき聞いたんだ。

これ、オシリスが、今、開発してるものだよ。一応、戦地での実験は済んでるみたいだけどね」

「なんでそんな情報をあなたが知ってるの？まだ一般公開すらされてないでしょう。だって私知らない」

「ふーん、あんたは知らないんだ。これ開発するのに結構無茶なことをオシリスはやったんだよ。

知らない？脳を傷つけられた兵士の話」

「知らない。知らないわ。

私がいくらオシリスの会長の親戚だからって言っても、新商品の情

報や、それを開発する途中で出た被害者の話なんて聞かされない。  
私はオシリスの経営や父の仕事からは閉め出されてるもの」

キアラの疑問にサラが答えた。

「人の口ほど軽いものってないのよ。

私達が手に入る情報は、オシリスの上層部にとっては、どうでもいい事ばかりだけど」

キアラはため息をつく。誰が情報を盗んでここに流したのか察しがついたのだろう。

「企業スパイでもあるのね」

キアラに向かってサラは黙って微笑み、カケルに向き直る。

「話しは変わるけど、ワンと話したって事は、もう、だいたいのこととは知ってるのね」

「あんたは馬鹿だ。ウェンウー社を裏切るなんて」

「しょうがないじゃない。これ以上あの会社にいたくなかったんだもの」

「あんたの母国やこの12区じゃ、ウェンウー社の恩恵に授かりたい人間なんて山ほどいるよ。

……腕の傷ひどいね。トニーとレオンがやったの？あいつら容赦ないから」

「違うわ。彼がやったの」

サラは顎でガザを示した。

「へえ、このおにいさんが」

カケルはとガザに顔を向け微笑みかけた。笑うと目が細くなり、日向の猫のようだ。

「どういう経緯でそうなったか、聞くのはやめておく。

正直、さっきドアを壊すって脅されてほっとしたよ。脅されたから仕方なく助けたって理由ができたから。あとでこのお兄さんが適当に殴ってくれたらなんとか言い訳できる」

「高そうね」

「二本はもらわないとやりきれない」

「ふっかけるわね。私の治療代も込みにして」

「友達だからそれぐらいのサービスはするよ。腕の傷見せて。そっちのお兄さんも」

「私は自分でやるからいいわ。この人の腕を治してほしいの。できれば30分以内で」

「そんな無茶な事を言うなよ。

あ、薬とか隅の棚にあるから勝手にやって」

カケルはキアラが抱いていたガザの左腕を手にとると眺めて口笛を吹いた。

「いい人工生体部品使ってるね。頑丈だけどしなやかだ。しかし派手に壊したもんだねえ」

サラが薬棚から薬品類を物色し始めると、キアラがサラにあわてて駆け寄りそれを手伝った。

「あなたがカスタムしたビーストが噛みついたのよ。ビーストも壊されたけどね」

「へえ、あれを壊せれたんだ。なんかあると思ったらおっかないもん仕込んである。レーザーサーベル？」

ガザの千切れた左腕を指先で撫でた。失われた部分で元々は自分の体ではないはずなのに、ガザは妙な寒気を感じた。あまり人に触れられるのは好きでは無かった。特に男は。

「あのビーストぶっ壊したなんて、おにいさん相当タフだね。左腕以外は生身だろう？」

カケルは微笑みながらガザに尋ねた。少し媚を感じさせる笑みだった。ガザは黙って頷く。

「見たところカステイユ系だけど軍関係者？」

カケルは上目遣いでまた尋ねてきたが、ガザは答えなかった。彼はガザ本体の腕、生身と人工部分の境目を確かめるように指で撫でた。男にしては仕草が柔らかく、妙な違和感を感じる。

そんなガザの思惑を察する事もなく、カケルは千切れた部分から

飛び出した人工神経にループをあてて唸った。

「これオシリスの機材使ってるけど全くのオリジナルだ。4時間は欲しい」

「私たち時間がないのよ。見た目もどうでもいいし、繊細な動きなんてできなくてもいいから」

「やるだけやってみるけど30分じゃ無理だよ。せめて一時間はくれないと治療できない」

「わかったわ」

ガザの体の事であるのに、二人どう治療するのか勝手に決められていくのは、あまりいい気分では無かったが、ここはサラに任せる事にした。

「ところで、ワンってのはどんな奴なんだ？」

カザの質問にサラはキアラに患部を消毒液で拭われながら答えた。

「東方系のマフィアのボス。十二区の影の支配者よ。あなたが殺したサイボーグたちの上司で、カケルの店の出資者でもある」

「それで、あんたのお友達の一人って訳だ」

カケルはガザの嫌味に苦笑しながら口を開く。

「俺の雇い主だから庇う訳じゃないけど、ワンは枯れかけた中年だけど、見てくれはいい男だよ。脂ぎってないし、ヤクザらしくない」

サラは自分の腕の患部に注射器を突き刺し、顔をしかめながら付け足す。

「そうね。普通に会社の重役にいそうな感じよ。見た目だけはね」

「女の趣味は悪かったけど。前は、胸のでかい女が好きだったんだ。菓子しか食わないような甘ったれた馬鹿女。そいつらに比べたらあんたはマシな方だったよ。」

でも、あんたがくるまでは、あんな腑抜け男じゃなかったんだけどねえ」

「私のせいにしないでよ。ワンは女への幻想を捨てきれないタイプなの。しかも、母性に餓えた渴望型のマザコン。私は彼のニーズに応えて、その理想を提供しただけよ」

「へえ、あんたがママ」

唇を歪めてカケルは笑った。

「そう、だから今の彼が本来の姿なのよ。だってママの前で虚勢はつたってしょうがないでしょう」

「ワン、かなり怒ってたよ。君を捕まえて酷い目にあわせてやるって言ってた」

「あら、そう」

サラは余裕のある表情のままで、その様子をカケルが楽しげに眺めている。サラばかりでなく、カケルまでもがワンという男を少し



馬鹿にしているようだった。

「でも、なんで急にそうなっちゃったのかしらね。彼、私の言うことならなんでも聞いてくれてたのに」

「自分の行動思い返してみろよ。あんたの『お友達』はワン一人じやなかっただろう」

「ワンは浮気されたと怒ってる訳？」

「そうみたい。ウェンウー社を裏切ろうとしてる事より、そっちを怒ってた。貞淑なはずのママがアバズレじゃ、普通は怒るよね」

「馬鹿よね。彼との約束をすっぱかした事、一度や二度じゃないのよ。普通なら悟るでしょう」

「あんたを信用してたんじゃないの？」

「信用？彼が自分の理想を信じただけよ。ああいうタイプの人間はね、自分の理想を砕かれるのが嫌なの。信じてるんじゃないくて、自分の理想が虚像だって事を知りたくないの」

「事実を探らないのは自分の理想を砕かれるのが嫌だから？」

「だって普通に考えたらおかしいと気付くはずでしょう。私の断り文句はいつもこう。

ごめんなさい、お仕事が入って今日は会えないわ。次の日もダメ。夜？ダメよ、重役と食事会だもの」

サラの子供をあやすような甘ったれた口調にカケルは吹き出す。

「真実よりも理想のママに甘えてたかったのよ。だから「こんな事をするような女じゃない」って思い込んで真実を遠ざける」

二人の会話に、キアラが口をはさんだ。

「話を聞いてるだけでも情けない男ね。

『信じるものは救われる』ってよく出来た言葉だと思うわよ。自分の世界に閉じ籠って、都合のいい世界を信じていれば幸せだもの。色々と捉え違えてるって誰かが教えてあげないの？」

サラとカケルがたまりかねたように声を出して笑う。

まるで女が集まって男の悪口を言い合っているような光景だ。カケルは女ではないが。

何故だか普段よりも目が活き活きと輝いて見えるのは気のせいだろうか。ガザは居心地の悪さを感じずにはいられなくなる。

そして、こういう場面を見る度に思う。男よりも女の方が底意地が悪いのだと。

「そういう男だったから、だから御しやすかったんだけど」

「相変わらず人の柔い部分に付け入るの上手いよね。

確かにあんたと付き合うの反対してた部下は多かったのに、ワンはそんな警告聞こうともしなかったよ。見てるこっちが嫌になるぐらいの逆上せっぷりだったし。

やっぱり、そう思うと変だな。なんで急にバレちゃったんだろう」

「部下の言うことは聞かない男でも、聞かざるおえない相手の言うことなら、聞く耳を持つ男なのかもしれないわ。……憶測だけど」

「あ、忘れる所だった」

カケルはガザを椅子に座らせるとサラに近付いた。

「そのマザコンからあんたに伝言があるんだった」

「私に？ご丁寧ね」

カケルはサラの耳元で何か囁いた。

ガザの耳には何を囁いたのかは届かなかったが、サラの顔色が見る間に色を失っていく。

キアラが心配して呼び掛ける。

「大丈夫？」

サラは、ため息をついてかぶりをふった。

「下らない事よ。何でもないわ、大丈夫」

ガザは初めてサラが動揺する姿を見た。いつも掴み所のない微笑を張り付けた女が、あからさまに動揺するような伝言が何も無いわけがない。

腕の治療が終わったらサラを問い詰めた方がよいだろう。

「下らない事かな。確かに、君みたいな女には必要のないものだけ  
ど」

カケルはそう言いながら、いかぶしげな表情のガザの腕を遠慮がちに掴み人工神経を指で引っ張りながら治療を始めた。

ガザは、元々、人に触られるのは好きな方では無かったし、いやに優しい触り方をする男だったのでそれが気になって仕方なくなる。

漠然とだが、カケルがサラに抱きつかれて嫌がったのは、女が苦手で男に性欲を感じるタイプなのではないかとすら思った。

余程、嫌そうな顔をしていたのか、サラがガザにからかうように言った。

「そんなに嫌がる事ないじゃないの。そんなに人に触れるのは嫌い？」

「あまり好きじゃない」

「何か警戒しているようだから教えてあげる。『彼』は私と同じ女よ。

体を男に変えちゃって、男みたいな喋り方してるけど、心はしっかり女のまま」

思わずカケルを仰視してしまう。カケルは恥じるように顔を真っ赤にして俯いた。

サラに言われてみれば、この青年は男にしては華奢で小柄で声も少しばかり高い。

しかし、心は女のままなのに、何故、男になる必要があったのか分からなかった。

今の連邦では、多少の偏見や差別はあるものの性別を変えるのはさして珍しい事でもなく、ガザでさえ性同一性障害という言葉はなん

となく知っていた。

しかし、カケルはそれとは少し違うようだ。とても理解できない世界で、言葉を失うしかない。

その様子が面白かったのか、サラが軽く声を上げて笑ったが、カケルはそれが氣にくわなかったらしくサラをきつく睨んだ。

「そんな事、いちいち言わなくてもいいじゃないか、人を出汁にして笑うなよ。あんただって……」

一瞬、口を閉ざしたが、下卑びた表情を浮かべて言葉を続けた。

「あんただって俺と同じようなものじゃないか。だって、あんた」

カケルの言葉は、ぱんつと乾いた音と共に遮られ、ガザは息を飲んだ。

キアラがカケルの頬を平手打ちして言葉を遮ったのだ。

キアラは怒りも露な形相でカケルを睨みつけ、また手をあげそうな勢いだった。サラがそれを慌てて止める。唾が悪そうにカケルは俯いた。

ガザは一人、状況を飲み込めず呆然とするしかない。

キアラの様子に威圧されたのか、カケルは渋々と口を開いた。

「ごめん、言いすぎた」

「いいのよ。お互い様でしょう」

サラは冷静だったが、キアラはまだ怒りを押さえきれないのか、まだ震えている。

「でも、サラ」

唇が色を失うぐらい強く噛みしめるキアラの目に涙が浮かぶ。ガザはその慌ただしい表情の変化に半ば呆れた。

キラアのサラへの入れ込み方は普通ではない事ぐらいはガザにも解った。それが友情か恋愛感情からくるものなのかは分からないが、サラが流せる事でも、サラを馬鹿にされたり、蔑ろにされるのがキアラには許せないのかもしれない。

カケルはサラを自分と同じようなものと言った。

自分と同様、サラは女ではないとでも言うつもりだったのだろうか。

サラはどこからどう見ても女だが、元は男であつたとか。

そんな事を考えたが、馬鹿馬鹿しくなり考えを隅においやる。

もはや、ここでの性別の話題はタブーに近い。サラの性別や性癖については分からなかったが、キアラは見た目は育ちの良さそうな女だが、ヴァーチャルセックスで男になって楽しんでいたような女で、カケルは自らの性を捨てて男になったような女である。ひどく場違いな所に来てしまったのだと、ガザは思った。

男が理解しようとする方が愚かなのかもしれない。早く治療が終わらないかと心から願った。

カケルは無言でガザの腕を治療を再開し、黙々と作業を続けてい

たが、腕の大半が繋がった頃、ガザに話しかけた。

「お兄さんも、俺みたいな人間は理解できない？」

その通りだったが、なんと答えていいのか分からなかった。

「こういう場所で一人で商売していると、女だと不便なんだ。実にシンプルな力関係がここを支配してる。」

あたり前だけど、女って男より力が弱いじゃないか。

ここでは弱いものでしかないんだ。搾取と抑圧の対象でしかない。女だからって理由で甘やかしてくれるものが何一つ通用しない。

サラみたいなのは例外だよ。オートマタやワンの手下に守って貰える立場だから。

でも、俺みたいな女がヤクザの下で働いてても、ここではあまり意味がない。

それなら12区から出ればいいって話だけど、俺は正規のIDを持つてないから、十二区以外で商売するのは不可能に等しい。

ヒモを作って守って貰えばいいんだろうけど、それは嫌だったから」

カケルの立場には少し同情したが、やはりなんと答えていいのか分からない。

それに、カケルにとっては、威圧し搾取する側にガザが属しているのだ。何も答えずにいると、カケルはガザを嘲るように笑った。卑屈な笑みだった。

治療が終わり、ガゼの腕は生体部品が丸見えの状態だったが、動くようにはなった。

「卵とか割るのは無理だよ。あとはオシリスの専属にどうにかしてもらって」

若干、指先に違和感を感じるが、特に支障はなく、レーザーも元通りにはなった。カケルはあまり酷使しないようにと注意を付け加える。

サラがキアラに何か耳打ちし、キアラは頷くと紙幣の束を自分のバッグから取りだしてカケルに握らせる。慣れた手つきで紙幣を数えながら、カケルは口を開いた。

「倍以上ある。だいぶ多いけど」

「一つお願いがあるから、その分の料金よ」

「治療以外の手助けは無理だよ」

「私達がここから出たら、あなたの上司に連絡してもいい。ただし、それを30分だけ待って欲しいの」

「それぐらいならいいよ。お兄さんが二発ぐらい殴ってくれたら信憑性でるかも」

「その分も追加するわ」



キアラは気前よく紙幣の束を掴んでカケルに押し付ける。ガザはサラに耳打ちした。

「いいのか？そんな約束で。第一、こいつを信用できるのか？」

「いいのよ。彼の立場上、私達がここに来た事を黙っておくなんてできないわ」

「黙らせる方法なんていくらでもあるだろう。あの二人のサイボーグみたいにしたらいじゃないか」

「あなた、私を勘違いしてない？私は何もかも殺して黙らせようとするあなた達とは違う。ローコストかもしれないけど、その方法って先がない。」

信用ができない相手に、約束を最後まで守らせるのは難しいけど、相手の負担にならない程度の制限をつければ、大抵は守れるものよ。それに30分あれば十二区から出られる。今の状態でワンの手下とやりあうのは危険でしょう。あなたの上司の保護を待つより、一刻も早く十二区から出た方がいい」

サラの説には納得させられるものがあり、十二区がウエンソー社の縁の深いヤクザの縄張りでなら、早く脱出した方がよい。なるほどとガザが思っていると、キアラがカケルに喋りかけた。

「あなたが性別を変えた理由、男に支配されたり守られるのが嫌だったの？」

「確かに嫌な目には沢山あったけど、それだけじゃないよ。できれば同じステージに立ちたかったんだ」

「誰と？」

「男と」

二人のやり取りを眺めてサラがため息をつく。

「難儀な性格よね。二人とも」

「俺に言わせれば、あんたも難儀な性格だけどね」

ガザは通信機からグレインに連絡してみたが、ノイズが聞こえるばかりで繋がらなかった。

「自力で脱出するしかないな」

「最短のルートを検索してみる」

サラが自分の携帯端末を取り出して起動させた。  
この地区の地図を見ようとしていたが、警告らしきポップアップが  
ホ口に浮かび上がると顔を強張らせた。

「カケル、モニタでニュース映して！」

モニタが切り替えられると、ガザとキアラもサラと同じようにな  
った。

とんでもない状況がモニタに映し出されていたからだ。

道路で慌ただしく警官がバリケードを張っているのをバックに、  
女性記者が緊張した面持ちで喋っていた。

「えー……先ほど十二区への爆破テロ予告の為、十二区への道路は全て封鎖されました。

現在、十二区へのテロ予告の為、十二区への道路は全て封鎖されています。

犯行は反連邦を掲げるカステイユ系のテロ組織と見られ、犯行声明文ではシーブリング上院議員の長女キアラ・シーブリングさんを殺害したと報告してきており、シーブリング上院議員の自宅にテロの予告の文書共にキアラさんのものと見られる体の一部が送りつけられたとの事です。

えー……キアラさんの安否の依然として確認できておらず、十二区での小規模な爆破も同一犯の可能性が高いとの事です。

繰り返します。緊急ニュースです。現在、十二区への道路は全て封鎖されています」

女性記者は同じ事をまた繰り返す。

テロ組織の主犯として写しだされた写真は、鮮明なサラの顔写真と、荒く不鮮明な画質で上空から撮ったような男のシルエットだった。吐き捨てるようにサラが呟く。

「あの野郎、馬鹿にして」

モニタを見て固まる三人をよそにカケルが忍び笑いを漏らす。耳になつとりと絡み付くような嫌な笑いだった。

「この様子じゃ、12区からは出られそうにないね。  
この写真はサラで間違いないだろうけど、この男、あんただよね。  
サラと一緒にこのお嬢さん殺して爆弾でもしかける？」

カケルがニヤニヤしながらガザに尋ねてきた。

そのいやらしい表情に、この男　正確には女は、最初からこうなる事を知っていたのだと直感が告げる。

カケルは言った。男と同じステージに立ちたかったのだと。解釈は違いかもしれないが、それなら遠慮する必要はない。カケルの質問には回答せずに確認した。

「確か、殴っていいんだよね？」

カケルではなくサラとキアラが同時に頷くと、ガザはカケルの頬に拳をぶつけた。

## 第四章 5 セアト

ニュースを見て、セアトは持っていたグラスを床に落とした。幸い絨毯を敷き詰めた部屋だったので、グラスは割れず、中身が溢れただけだった。

部屋に浮かんだテレビの映像では、慌ただしくバリケードを張る警官を背景に、女性記者が現状を説明している。

十二区へのテロの予告、十二区への道路の閉鎖、そしてテロリストによるシーブリング上院議員の娘の殺害。

予測もしていなかった出来事で、半ば茫然自失となったセアトは外線電話のベルで我に返る。

着信の主はキアラの父親、ジョン・シーブリングだった。セアトが電話に出ると、デスクで頭を抱えながら震える、ジョン・シーブリングのホログラムが部屋に現れた。

「君も君の母親も言ったはずだ！キアラは守ると！それがなんで、こんな、こんな事に、あの子の……指が……指が」

ジョン・シーブリングは呻きながら、また頭を抱えた。いつもは厚顔無恥と言われる程、ふてぶてしい態度の政治家が今は見る影もない有り様だった。

セアトはそれを見ながら少しずつ冷静になっていく自分を自覚する。

セアトもニュースには驚き混乱もしたが、自分以上に我を失う者を見ると心が冷えた。我ながら嫌な性格だと内心苦笑した。

「状況の説明をしていただけますか」

なるべく相手を刺激しないように、柔らかい口調で尋ねた。

「自宅の妻宛に小包が届いた。妻がそれを開けたら、ニュースの通りだ。」

テロの予告とキアラ殺害の声明文と、指が……」

「あなたがそれを知ったのは？」

「つい先ほど。妻は包みを開けて気絶して、使用人から電話があったが……」

「すぐには帰らなかった？」

「ああ。よくある事だったからだ。妻に荷物が届いたのは初めてだった」

「それで、ニュースを見て慌てて自宅に帰られたと」

「そうだ」

「……おかしいな」

セアトはジョン・シーブリングとは違う意味で唸った。

「どういう意味だ？キアラは家にはいない！君はキアラを必ず守ると言ったのに！」

掴みかかりそうな勢いでジョン・シーブリングはわめき散らしたが、セアトは冷静にたしなめた。

「上院議員、落ち着いてください。  
おかしくありませんか？」

何故、先程あなたが知った事がニュースで流れているんです。  
人間の体の一部を送られた事でさえもマスコミに隠し通せる、あなたの情報を、彼らはいったいどこで掴んだのでしょうか」

ジョン・シーブリングは一瞬、ぽかんと口を開けて呆けたようになつた。

セアトはサイドボードからウイスキーの瓶を取り出すと、新しいグラスにそれを注いだ。

「送られた指はキアラのものでしたか？指紋の照合や遺伝子は調べましたか？」

「いいや、まだだ」

「調べてみてください。」

きっと、それはキアラのものではないです。

キアラは生きてます。そう簡単に殺す訳がないじゃないですか。あなたの娘ですよ。いくらでも利用価値はある」

キアラは生きている。これは、ジョン・シーブリングを安心させるだけのために言った言葉だった。

セアトは確信など持っていなかったし、もしかしたらキアラは既に殺されているのかもしれないと考えていたが、それは口には出さない。これ以上、ジョン・シーブリングに混乱されては困るからだ。今は彼を落ち着かせ、事態を収拾させなければいけない。

ジョン・シープリングはセアトの言葉にすぎるように何度も頷いた。

「ああ、生きてる。絶対に生きてる。そうだ。私のキアラは殺されてない。あの子がそんな簡単に殺されてるはずない。私の娘だぞ、殺されてたまるか。殺されてたまるか」

謔言のように同じ言葉を繰り返すシープリングを眺めながら、セアトはウイスキーを喉に流しこむ。みつともなく取り乱す父親の姿は、酒の肴にはならないと思った。

「問題は誰がこんな情報を流したかです。」

このテロ予告は、おそらくキセニア系のテロリストの犯行ではない」

「……何故、そう思う」

セアトはジョン・シープリングがいつもより察しが悪い事にため息をつきそうになったが、堪えて話しを続ける。

「主犯の二人の写真ですよ。ニュースに流れている」

「写真？」

「テロリストの写真です。女性の方を見てください。」

彼女の写真だけが妙に鮮明なのが気になりますが、それは後で説明します。

彼女は、我々が電警に依頼したウェンウー社のプログラマー、サラ・リンドバルですね。

どう見ても、カステイユ系の人種ではない。私達が調べたところで



は、彼女は連邦の生まれで、キセニア、カステイユ系の移民でもなければ、その血が混じっている訳でもない」

セアトは何も反応を示さないジョン・シーブリングは、サラ・リンドバルの顔を覚えていないか見ていないのだと思った。

おそらく、彼にとつては、娘の目を背けたい趣味の、その相手の顔など見たくはなかったのだろう。セアトはテーブルの上の端末を操作し、自分達が入手したサラのデータをホロにアップした。ジョン・シーブリングの所にもそれを送信する。

「このテロ予告のニュースで名前や顔写真をあげられている人間、その中で我々が知っている人間は三人。キアラとあなたと、そしてこの主任プログラマーだ。

バーチャルネット規制法案を可決に導く為に、我々はキアラとバーチャルネットで関係のあった、この主任プログラマーの消去を電警に依頼しています。

それに今日はサラ・リンドバルを殺害する決行日だった。あまりにも重なりすぎてはいませんか？」

ジョン・シーブリングはまだ腑に落ちないような顔をしていたが、口を開いた。

「確かに」

「あと一つ。

ニュースで流れている、もう一人のテロリストの写真ですが、これはひどく画質が荒い。シルエットと服装が確認出来る程度です。

おそらく衛星から撮ったもので、ジャミングのせいで画像が荒れ

たのでしょうか。

私はこの被写体は、電警が放った「犬」だと思います。

今回の処理を依頼した電警からの資料、けしかける「犬」と背格好が似ている。

あと、彼のミッション時の服装もおそらく同じものでしょうか?」

セアトは「犬」のデータをアップし、ジョン・シーブリングに送信した。

受信したデータを見てジョン・シーブリングは頷く。

「確かに君の言うとおり、我々の「犬」の可能性が高い」

「この写真の男が「犬」だとします。」

ニュースでのサラ・リンドバルの写真を見てください。

彼女の写真はこうも鮮明なのに、我々の「犬」かもしれない男の写真はひどく不鮮明。

情報を流した人間の立場はこうなります。

サラ・リンドバルの写真は入手する事ができるが、連邦のジャミングもカットできず、「犬」の写真は手に入れる事が難しい側の人間つまり

ようやく落ち着いて物事を考えられるようになったのか、ジョン・シーブリングはため息をついて呟く。

「……ウェンウー社か、いや野党の連中か。」

彼らがメディアへの情報提供者で、偽のテロ予告の情報を流し、我々に何らかの罠を仕掛けようとしていると」

「ありえない話ではないはずです。

あなたが議会で提出しようとしているバーチャルネット規制法案が可決されて、一番困るのはウェンワー社なのだから。

我々の行動があちらに見破られて、この騒ぎを起こされているかもしれない。

あちらに情報が漏れていた可能性が極めて高いです」

「情報漏洩だと！私はくれぐれも」

ジョン・シーブリングは怒りを露にしたが、ここでヒステリックになっても仕方がないと思ったのか言葉を飲み込んだ。

「……もし、情報が漏れていたのなら、君らしくない不始末だね」

「申し訳ありません」

情報が漏れていたとすれば、セアトがトレバーに仕事を依頼してからだろう。

それまでは細心の注意を払っていたし、ネットでデータのやり取りはせずに、ジョン・シーブリングと母は直接会って話をしていたからだ。

例えば、トレバーから情報が漏れていたとしても、自分自身もフィアとその恋人に気を取られ過ぎていたのかもしれないと、セアトは少しだけ反省した。

「しかし、なぜ彼らは自分達の身内まで陥れるような真似をするのかね。しかも我々が消そうとした人間だぞ。

我々の「犬」をテロリストに仕立てあげるのは分かるが、あの主任プログラマーは何よりも得難い証拠であつたはずだ」

「もしかしたら、彼女は彼等にとって邪魔な存在となつたのかもしれない」

ジョン・シープリングはまた溜め息をついた。

「そろそろ推測はやめましょう。

この問題を解決してから明らかにすればいい。

今はキアラの保護が最優先です。

私はアイシスのデータを解析して、キアラの所在を確認します」

「では、私は電警のトレバーや、なんと言つたかな、あの元軍諜報部の牧童は」

「グレインです。なかなか食えない人ですよ。ひよっとしたら、電警のトレバー参事官より役に立つかもしれない」

「そう、彼だ。彼とトレバーにコンタクトを取ってみる。必要があれば連警と軍関係者に根回ししよう。この祭りも早く終わらせたい方がいいだろう」

「お願いします」

「これが解決したら、一緒に食事でもしよう」

「楽しみにしてます」

ジョン・シープリングほどではないが、はとこであるキアラには

生きていて欲しいとセアトは思っていた。

血縁者だからでも、幼い頃の彼女を知っているからではない。

彼女がジョン・シーブリングの娘で、利用価値の高い女だからだ。前々から、このまま結婚させるのは惜しいとすら思っていた。

それに、平凡でつまらない女と思っていたが、そうではないかもしれない。

もし彼女が生きていたら、自分の駒にならないものかとセアトは考えた。このスキャンダルでジョン・シーブリングを脅すのも一つの手かもしれない。

ジョン・シーブリングが我を失うほど安否を心配し、セアトが奸計まじりの欲望でその身を気にしていたキアラは生きている。

彼女は男の背後にそつと忍びより、カケルの家でくすねてきた注射器を、彼の首筋に突き刺したところだった。

そう言えば、この男の名前をまだ知らない。キアラはサラに尋ねた。

「本名は知らないけど、コードネームはガザだったはず」

「どういう意味？」

「スペイン語でガーゼの意味」

「布の？」

「さあ、特に意味なんてないかもしれない。だって、所詮は犬の名前だしね」

サラは、脱力し膝をついているガザの瞳を覗きこんだ。

「おやすみなさい。良い夢を」

何が良い夢だ。一体、何を企んでいるのかと言いたかったが、舌が痺れて喋れない。ガザは地に倒れた。

## 第四章 6 チャンプ & amp・リー

「馬鹿だなあ。それで殴られて気絶して連絡が遅れたのかよ」

チャンプは携帯電話に向かって喋りながら、自分の冷麺の焼豚を箸で掴むと、リーのダッカルビの皿に向かって放る。

十二区の小さなコリアンレストランにチャンプとリーはいた。

狭い店内に客は彼らしかいない。

唯一の店員、店主の中年男は、厨房からカウンターに上半身を乗り出して、ニュースが流れるテレビを凝視していた。

「肉食わねえと力でないぞ」

そう言いながらもリーは焼豚を頬張る。

「ああ、わかった。わかったから。オヤジには俺から言っておくから安心しろ。心配するな。じゃあな」

チャンプが電話を切ると、リーが白米を掻きこみながら尋ねた。

「誰からのお電話？」

「カケルだよ。サラ達がカケルの店に来たってさ。犬の腕を治しに」

「あー： やつぱり、サラちゃん達はカケルんとこいったのかあ。カケル、殴られちゃったの？」

「あの犬に殴られたんだとよ」

チャンプは冷麺を啜ると顔をしかめた。いつもよりかなり味が薄い。

チャンプとリーはこの店の常連だった。清潔な店とはい難いが、夜遅くまで営業しているし、味も悪くない為、よく利用している。

店主とは知り合いだったが、今日は常連客や料理の事より、特別番組のニュースに夢中らしい。

味がいつもより薄いと文句を言うのもなんだか悪い気がして、チャンプはテーブルにあったコチジャンの瓶を掴むと冷麺の器に盛大にぶちこんだ。

「ひつでえや。普通殴るかね。あのカケルをさ」

「カケルは、もう何年も前に女やめちまっただろう。犬にとってはただの『男』だ。お前だって性別問わず平気で殴る癖に」

「カケルは別だ。幼馴染みだし」

冷麺に酢を垂らしながら、チャンプが呆れて言う。

「大した鼻屑だな。だがよ、皆が皆、俺らと同じ価値観じゃねえぞ」

「今でもあいつ細いからさ、まだ女じゃないかって、たまに思うんだよ。かわいかったのに勿体無い」

「まあな。でも、アイツは自分のお袋や、ここらの女と同じようにはなりたくなかったんだろう」

「それは分かるけどさあ、そんな事する前に、俺らを頼ってくれて



も良くない？

俺らだって、もうガキじゃないんだし」

肉を噛み千切りながらリーは不平を漏らした。

チャンプとリーとカケルは母親が同じ店で働いていおり、年も近かったせいか子供の頃はよく行動を共にした。それは三人が成長するにつれ疎遠になっていったが、カケルが独立して店を立ち上げてからは、彼らのメンテナンスはカケルが請け負っている。

チャンプとリー、そのお互いほどではないが、二人にとっては数少ない信頼できる人間の一人だった。

チャンプとリーでも幼馴染みの変貌には、さすがに驚いた。

会わなかった数年の間にいったい何があったのか。チャンプが、なんで男になってしまったのか、それとなく尋ねると『彼』はこう言った。

「今が幸せだから、それでいい」

質問の答えにもなっていないが、これ以上、聞くことはできなかった。

お前が幸せならそれでいいよ。そんな陳腐な事をカケルに言ったよ  
うな気がする。

「この仕事が終わったら、自分で聞いてみるよ」

「そうする」

チャンプは店のテレビのに目をやった。

「なあ、見てみる盛大な祭りだ」

テレビでは道に作られたバリケードの前に銃器を持った兵士が整列していた。

「ど派手だねえ。3年ぶりのテロ。掃討作戦いつ始まるんだろ」

そう言いながらも、リーはニュースよりも噛みきれない肉に集中していた。

「なあ、そのテロなんだけだよ」

「ん、何？オヤジ達가가サラ達をここから出さない為にやった狂言じゃねえの？」

「オヤジが仕掛けた罠だと思うか？」

「どういう事？」

「あのビビりのオヤジが、こんな派手な陽動出来るかね」

「浮気の代償にしても、ウェンウー社を裏切ろうとしてる見せしめでも、ちょっと派手すぎるしねえ。で、チャンプくんはどう思うわけ？」

「俺はウェンウー社と野党が、この祭りを仕切ってると思うぜ」

「俺は違うなあ」

「なんだよ。他にどんな組織がこんな馬鹿げた祭りしでかすんだ。たかが女一人捕まえるだけの為に」

「本国」

「は？」

「俺らの母国、東方連合だよ。」

大体さあ、あのサラって女おかしくね？

最初はウェンウー社の重役達のベッドでの面倒を見る係かと思ったけど、権限がでかすぎない？

だって、自分とニルヴァーナの情報を守らせる為だけに、本社にあるクソ高いオートマタ買わせたんだぜ。ベッドでのおねだりにしても額がでかすぎるよ。

それにさあ、オヤジ達が、サラのバーチャルセックスネットの相手、上院議員の娘まで殺せとか俺らに命令したじゃん。

別に殺さなくてよくない？だって、あのお嬢、オシリス会長の親戚だろ。

そんなリスクまで背負ってまでしてさ、オヤジ達いたい何しようとしてる訳？

おかしいよ。あの女」

「じゃあ、お前はあの女の正体はなんだと思ってるんだ？」

リーはにやりと笑った。

「スパイ。企業とかそんなチンケなもんじゃなくて、もっと、でっかい、例えば国家がらみの。」

上院議員のお嬢を殺すのは何かヤバい話を聞いている可能性があるから」

チャンプは一瞬黙った後、テレビに夢中の店主が振り返るほど声

を上げて笑った。リーもそれにつられて笑う。二人が腹を抱えて笑っていると、チャンプの携帯電話から着信音が鳴った。チャンプは笑いをおさめようと咳払いをしたが、こらえきれず、笑いながらそれに出る。

「もしもし、ああ、すまん。わかった。了解した。飲んでねえよ。今からそっちに向かう。違うよ、飲んでねえって」

チャンプは電話を切ると席を立った。

「マイクからだ。お前が言うスパイがオヤジのどこに向かうって連絡が入ったとさ。今からオヤジの護衛だ。行くぞ」

リーは残った白米を慌てて掻き込む。

「サラちゃんなんで、わざわざオヤジんところ向かうのさ。殺されるだけじゃん」

「罠に誘われてきたのさ。つつか飯食いながら喋るな」

「さっきから気になってんだけどさ、なにそれ。どんな罠？」

「えげつない罠さ」

「さっきからそればっかじゃん。なんだよ、教えるよ」

「おい、おっさん勘定。リー、今日はお前が払え」

「えー、昨日も俺が払ったのによお」

文句を言つりーを無視してチャンプは店を出て、夜空を眺めた。  
月が綺麗な夜だった。

## 第四章7 ガザ

重い瞼を上げて目に映ったのは、見慣れた自宅の天井ではなく、コンクリートむき出しの煤けた天井だった。

盛大に息を吸ったせいで、埃を吸い込みむせる。

地面に俯せに倒れたはずだったが、誰が運んだのか、埃まみれた革張りのソファアの上にだらしく寝転がっていた。

埃を払いながら身体を起こしてみると、身体の痺れはもう無かったが、少し頭が重い。

カケルに治療された生体部品がむき出しの左腕を見ると、今までの出来事が夢ではなかったのだとガザは実感する。腕時計の文字盤を見ると、カケルの家を出てから、まだ二時間ほどしかたっていないかった。

ガザとサラとキアラは、グレインと連絡がとれるまで身を隠す事にした。下手に動きまわるのは危険だと考えたからだ。

そして元デパートの廃墟に入ったところ、キアラに何かの薬品を首に注射されてガザは気を失った。

油断した自分が腹立たしいが、それよりも自分を気絶させた女達に腹がたった。あれだけ懸命に自分たちを保護しろと主張していた癖に、何を考えているのか全く分からなかった。

「起きた？」

ガザを気絶させた女は、瓦礫の上に腰掛け、虚ろな表情で外を眺

めていた。サラの姿はない。喉はまだいがらっぽく、ガザがまた咳きこむと、キアラが水のボトルを差し出した。

「飲んで。ゆっくり。もし喉がまだ痺れてたらやめて。誤飲して肺に入ったら大変だから」

いつ用意したものなのか分からなかったが、冷たい水を口に含むと、体までもが潤ってくる気がした。

「痺れは？」

ガザがかぶりをふると、キアラは安堵の表情を浮かべる。

「そう、良かった」

ガザを気絶させたくせに、嫌に優しい態度に違和感をおぼえる。  
一気にボトルの水を飲みほすと、濡れた唇を親指で拭いながら、ガザは尋ねた。

「あの女は？」

キアラは苦いものを噛み潰したような顔をした。

「サラは、三十分ぐらい前にここを出ていったわ」

ガザはグレインからの言い付けも忘れ、キアラの首を掴むと壁に押し付けた。

「あの女があんたに頼んだのか」

キアラは恐怖の為か震えていたが、それでもガザを睨んで答えた。

「違うわ。私が勝手にやった」

怒りで指に力が入りそうになったが、自制して手を離す。キアラは地面に崩れるように座り込んだ。

ガザは迷った。このままサラを追いかけたとしても、キアラが何をするか分からなかったし、彼女を守りながらサラを探し出す自信も無い。

せめて、グレインと連絡が取れば良かったが、通信してみても、ノイズが聞こえるばかりだ。舌打ちをして、ソファに身を投げ出すようにして乱暴に腰かけた。

「サラを追いかけないの？」

ガザは苛立ちながら煙草をくわえ火をつける。

「今の状態で追いかけてもリスクが高すぎる。あんたは何をしでかすか分からないし」

ガザがキアラに向けて煙を吐き出すと、彼女は眉をしかめて煙を払った。

「良かったな。あんたのお望み通り、あの女は自由の身だ」

「あなたの上司は私達を同等に保護しろって命令したのに？」

「それは建前さ。保護の優先順位は決まってる。一番はあんたで、その次にあの女だ。自分の立場や身分を分かっているのか？上院議員



の娘で、オシリスの親族だろう。

あの女より、あんたのお守り方が最優先だ」

「サラを助けにいった」

キアラの言葉にガザは自分の耳を疑った。

「助けろって、何言ってるんだ。あの女は逃げたんだろう」

「追いかけて！」

意味が分からなかった。ガザを気絶させてまでしてサラを逃がしたのに、何故、追いかけると言うのか。ガザが気絶していた間、二人に何かあったのか。

「何を企てるか知らないが、俺はもう付き合いきれない。今、あの女が一人になるのが、どれだけ危険な事かわかってるだろう。マフィアに狙われて、おまけにテロリストの疑いまでかけられて指名手配中なんだ。あの女の事は諦めろ」

キアラの頬に涙が伝う。女はすぐに泣く。泣けば、誰かが助けてくれるとでも思っているのだろうか。

しかし、この場にいるのは、彼女に対して何の情も持たない男がいるだけだった。煙草を地面に落とすと足で踏み潰した。

「泣くぐらいならなんで逃がした」

「分かってる。分かってるけど、どうしても、どうしても行かせてあげたくて」

「逃がしたんじゃないのか？」

キアラは首を横ふった。

「違う」

嗚咽をこらえながら続ける。

「サラは、あなたに保護されて十二区を出るつもりでいた。でも、どうしても、どうしても行かせてあげたくて」

そこまで言うと、キアラは言葉に詰まり、声をあげて泣き出した。まるで子供だ。ガザは呆れてそれを眺めた。

「泣くなよ」

泣きたいのはこっちの方だと言いたかった。

いくらキアラを保護したところで、サラを逃がしてしまった事にはかわりがない。犬になってから初めてのミスだった。失敗した犬がどうなるのかは知らない。

どうせ、ろくでもない最後が待っているのだろう。

しかし、それに抗う気力は全くわいてこなかった。まさか、こんな事が命取りになるとは思わなかったが。

もし、少しでも自分が助かりたいと思うなら、無茶をしてもサラを追いかけたのだろうか、それよりも作戦の成功率を優先されたのは、せめてものプライドだったのだろうか。

キアラはしゃっくりをあげながら、また喋りだした。

「さつき、カケルがサラに耳打ちしたでしょう。ワンから伝言があるって」

「ああ、言ってたな。何言ったか俺には聞こえなかったけど」

それは気になっていた事だった。カケルに耳打ちされ、顔が青ざめたサラに、後で何を言われたのか問い詰めるつもりだったが、今となっては、もう、どうでもいい事だ。

「私はサラの側にいたから、カケルが何を言ってるか聞こえた。サラ、ワンに呼び出されたの。サラは大丈夫だって言ってたけど、諦めていい事とは思えなくて、どうしても、サラの意思を確かめたくて……」

「そんなくだらない事で、俺を気絶させたのか」

「あなたが聞いていたら、サラはきっと自分の本当の気持ちを喋ってくれなっただろうし、理由がなんであろうと、あなたがサラを行かせてくれるとは思えなかったから」

「確かに、理由がなんであろうと、俺はあの女を行かせなかっただろうよ」

「さつきから、あの女、あの女って言い方やめてくれない。彼女にはちゃんとした名前があるわ。とても不愉快」

キアラの、噛みつく物言いに鼻白んだが、これ以上、刺激するのは面倒だったので、素直に従った。

「わかった。訂正するよ。それで、あんたは、何故、俺を気絶させ

までして、サラを行かせたんだ。相応の理由があるんだろうな?」

「ワンはサラの 大切なものを預かってるって言って呼び出したの」

何故か歯切れの悪い喋り方だった。

「大切なもの?まさかあの女の子供とか、そんな三流ドラマみたいな流れやめてくれよ」

「違う。サラの 」

通信機からアラームが鳴る。着信はグレインからだった。ガザは、キアラをの言葉を止めてそれに応答する。

「現状の説明を」

労いも無しにいきなりそれかと思いつながらガザは答える。

「ニュース見ただろう。あのせいで十二区から出られない。あれから、ワンとか言う東方系のマフィアの手下に奇襲された」

「二人は無事か。キアラ・シーブリングは生きてるんだろうな」

「議員の娘は生きてる、どこも欠けた部分もないし五体満足だ。それに俺に薬品を注射して気絶させるぐらい元気だよ」

「どういう意味だ。サラ・リンドバルも生きてるんだろうな?」

「俺が気絶してる隙に逃げた」

「何をやってるんだ！」

グレインの怒鳴り声で鼓膜が痺れた。自分でも情けないと思っていたので何も言い返せない。

「すぐに追いかける」

無茶を言つなと言いたかったが、グレインはそんなことを聞いてくれないような剣幕だった。

「議員の娘は？」

「そちらも保護したままでだ」

ガザは頭を抱えなくなった。

「バックアップは？」

「すぐには無理だ。軍が十二区を閉鎖している。それに、もうすぐカウンターテロ、掃討作戦に入る」

「どれくらいで？」

「約三十分後だ。正確には、二十八分後」

ガザは今度こそ本当に頭を抱えた。

「いくらなんでも、無理だ」

「弱音を吐くな。先ほどシープリング上院議員から連絡があった。今、軍の幹部に根回ししている最中だ」

「……希望が持てたよ」

「我々もなるべく早く、エスコートを寄越す。また連絡をしろ」

「了解」

命令されたら、その通りに動くのがガザの仕事だ。選択権などない。

サラの家から持ってきた銃器の類いの入ったボストンバッグを漁り、ブラスターにエネルギーを注入しながら、口を開いた。

「良かったな。俺は今からあんたを保護しながら、サラを追いかける。なきやいけなくなった」

キアラはベそをかきながら、携帯端末をガザにつきだす。十二区の地図が浮かび、その一画を指差す。

「サラはこの倉庫に行ったわ。ワンがよく取引で使う所だって言っていた。それと、サラがおそらくワンはまたサイボーグの護衛を連れて来るつもりだろうから、電磁波グレネードとサブマシンガンぐらいは持ってこいって。おそらくサイボーグの護衛は二人」

いやに用意がいい。自分が目を覚ました時に、嫌に優しくしたのはそういう訳だったのかと、ガザは気付いた。

「あんた、最初から俺にあの女を助けさせるつもりだったんだろう」

キアラは、まだべそをかきながら頷く。

「他に誰がいるのよ」

泣きながらも、口にする言葉は生意気だった。

「あんたさ、自分の命も危険にさらしてるって実感あるか？」

「え？」

キアラは呆氣にとられた様子で聞き返す。

「その大切なものとやらを、サラに取りに行かせたせいで、俺はあんたを保護しながら、サラを見つけ出さなきゃいけなくなつた。

俺が失敗したら、俺もあんたも死ぬ。相手はヤクザだから、楽に殺してくれるとは限らない。きっといたぶられて殺されるぞ。それが分かつてるのか？」

「あなた、死ぬの？」

まるで話が通じない。

この女は危機感なんてものは持っていないのかもしれない。今まで、随分とおめでたく生きていたものだ。

今日、何度目かわからない溜め息について、ガザは質問を変えた。

「まあ、いいよ。さっきの話の続き。サラが危険をおかしてまで、取りにいった大切なものってのはなんだ？」

キアラは口元を手で覆うと、また目に涙を溜めた。

いい加減にしてくれとガザは思う。めそめそと泣き続ける子供のよ

うな女の相手などしくない。

「もういい。行くぞ」

ガザはサラのいる倉庫へ向かおうと立ち上がった。その背中に向かってキアラが呟いた。

「子宮」

「は？」

「サラは、ずっと探してたの。自分の子宮と卵巣を。それをワンや、サラの本当の上司が見つけたって。欲しかったら、こっちに帰ってこいって。さっきカケルにそう言われてたのよ」

涙を流し続ける女の顔を、ガザは見返した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4070d/>

---

アルカイクスマイル

2011年6月28日00時17分発行